

第 75 回日本学校農業クラブ全国大会  
令和 6 度 岩手大会

クラブ員代表者会議  
会 議 資 料



大会スローガン

舞い上がれ 農クの絆 岩手で咲かせろ 新たな発見  
輝く稲穂 豊かな自然 おでんせ岩手へ 未来に広がる農クの輪

期 日 令和 6 年 10 月 22 日 (火) ~ 10 月 23 日 (水)  
会 場 岩手県立水沢農業高等学校  
実施担当校 岩手県立大船渡東高等学校・岩手県立水沢農業高等学校  
〒022-0006 岩手県大船渡市立根町字冷清水 1-1  
TEL 0192-26-2380 FAX 0192-27-3108

## クラブ員代表者会議実施委員長挨拶

クラブ員代表者会議実施委員長  
岩手県立大船渡東高等学校  
校 長 宇夫方 聡

全国からお集まりいただいた農業クラブ員の皆様、引率の先生方、ようこそ岩手県へ、ようこそ奥州市へ、お越しいただきました。心から歓迎申し上げます。

岩手県は本州の北東部に位置し、東西約 122km、南北約 189km とその広さは北海道に次ぐ面積であり、日本面積の 4%を占めています。また、奥州市は岩手県の内陸南部に位置し、中央を北上川が流れ、北上川西側には胆沢川によって開かれた日本最大級の胆沢扇状地が広がり、稲作を中心とした県内屈指の農業地帯となっています。

この地域では昭和 28 年に完成した石淵ダムから引水した農業用水が使われています。石淵ダムの完成までは、胆沢川の水を二つの取水堰（寿安堰、茂井羅堰）で引水していました。この二つの堰はわずか 1km しか離れておらず、上流側の堰がたくさん水を取れば下流側の水が少なくなるため、血を流すほどの水争いがあったそうです。それを解消したのが石淵ダムの貯水と、引水した農業用水を均等に分配するための逆サイフォンの原理を利用した国内最大級の円筒分土工です。胆沢平野小唄には「想いは一筋、流れは八筋」とあり、今では水争いを解消したこの円筒分土工は胆沢平野のシンボルとなり、分水池の周辺は円筒分水アクアパークとして親水公園化されています。このように先人たちは、直面する課題に対し、悪戦苦闘しながらも様々な知恵や工夫で乗り越えてきました。

近年、通信の高速化とともに人工知能 AI や IoT など情報技術が急速に発展し、さらに ChatGPT などの対話型の生成 AI が身近な時代になってきました。一方で、地球規模で平均気温が上昇する地球温暖化や頻発する大規模な自然災害、感染症など、生命に関わる地球規模のリスクが年々深刻になってきています。また、我が国の農業を取り巻く環境は、少子高齢化による農業従事者の減少、食料自給率の減少など多くの課題を抱えています。

「クラブ員代表者会議」は「農業クラブ活動の事例をもとにした情報交換と連盟運営に関する意見交換を行い、クラブ員の資質向上と農業クラブの発展を図る。」という目的があります。その目的を達成すべく、今回の参加の皆様が充実した情報・意見交換を行い、親睦を深めるとともに、互いに高めあう機会になれば幸いです。

結びに、本会議の開催にあたり大船渡東高等学校並びに水沢農業高等学校の生徒・職員が一丸となって準備を進めてまいりました。行き届かないところもあろうかと思いますが、おもてなしの心をも持って運営に努めてまいります。ご参会の皆様が、本会議を新たな契機として、地域や農業を担うリーダーとして益々活躍されることを心より祈念し、開催の挨拶といたします。

## 生徒実行委員長あいさつ

クラブ員代表者会議生徒実行委員長

岩手県立大船渡東高等学校

農芸科学科 3年 田中 愛子

全国の農業クラブの皆様こんにちは。ようこそ岩手へお越しくださいました。全国大会が岩手県で開催されるのは、43年ぶりです。この素晴らしい大会に携わることができ、運営担当一同心より嬉しく思います。今回のクラブ員代表者会議は岩手県立水沢農業高校で開催し、運営は大船渡東高校、水沢農業高校の農業クラブ員が担当します。

このクラブ員代表者会議の目的は、クラブ活動の事例をもとにした情報交換と連盟運営に関する意見交換を行い、クラブ員の資質の向上とクラブ活動の発展を図ることです。3つの分科会に分かれ、情報発信の方法やSDGs、スマート農業の活用など新しい時代の変化に対応した、農業クラブの在り方について話し合われます。都道府県ごと、単位クラブごとに取り組んでいる内容や課題は大きく異なります。積極的な交流や話し合いの中で自分たちの活動をよりよくするためのヒントが見つかるはずです。

昨年、熊本大会から「感謝と友情のバトン」を引き継ぎ、どのように岩手大会を盛り上げていくべきかを考えてきました。全国大会の実施にあたり、大会イメージキャラクターであるわんこきょうだいを描いたカウントダウンボードの製作、農ク新聞での全国大会に向けた記事の作成や参加選手へのインタビューなど運営生徒の意識向上に取り組んできました。岩手県においても、グループラインを活用したこまめな話し合い、公式Instagramによる広報、甲子園岩手県予選会場での100日前イベントの開催などみんなでアイデアを出し合い取り組んできました。またアナウンスマナー講習会ではフリーアナウンサーの菅原まゆみ氏を講師に招き、司会進行の心構えやアナウンスの表現力を磨き、皆様を丁寧におもてなしするための準備を重ねてきました。全体会につきましては、久慈千鶴子様の講演、「言葉と伝える力 ～表現力を向上させる実践的な方法～」や大船渡東高校太鼓部による演奏会、岩手県の魅力を知ってもらうためのプレゼンテーションを予定しています。ぜひ楽しんでください。

最後に、農業クラブ3大目標に科学性、社会性、指導性があります。このクラブ員代表者会議において、日々の活動や事前レポートの提出によって科学性を、事例発表やグループワークによって社会性を、グループワークでの意見の集約を通して指導性をそれぞれ達成することができると思っています。全国からお越しくださる農業クラブ員の皆様にとって活発な意見交換や交流の輪を広げ、充実した会議になるように私たちが全力でサポートをします。どうぞよろしくお祈りします。

## クラブ員代表者会議実施概要

- 1 期 日** 令和6年10月22日(火)～23日(水)
- 2 会 場** 岩手県立水沢農業高等学校
- 3 目 的** クラブ活動の事例をもとにした情報交換と連盟運営に関する意見交換を行い、クラブ員の資質の向上とクラブ活動の発展を図る。

**4 実施担当校** 岩手県立大船渡東高等学校 ・ 岩手県立水沢農業高等学校

### 5 実施委員

生徒実施委員長	岩手県立大船渡東高等学校	農芸科学科3年	田中愛子
生徒実施副委員長	岩手県立水沢農業高等学校	農業科学科2年	佐々木裕
実施委員長	岩手県立大船渡東高等学校	校 長	宇夫方聰
実施副委員長	岩手県立水沢農業高等学校	校 長	佐藤紀文
実施主任	岩手県立大船渡東高等学校	教 諭	小野悟
実施副主任	岩手県立水沢農業高等学校	教 諭	小原一仁

### 6 指導助言者

指導助言者代表	宮城県農業高等学校	校 長	浅野伸一
指導助言者			
【第1分科会】	青森県立柏木農業高等学校	教 諭	佐々木慧
【第1分科会】	青森県立名久井農業高等学校	教 諭	奥瀬翔太
【第1分科会】	宮城県農業高等学校	教 諭	小島宗工
【第2分科会】	秋田県立金足農業高等学校	教 諭	和泉有紗
【第2分科会】	秋田県立大曲農業高等学校	教 諭	菅原慎太郎
【第2分科会】	山形県立置賜農業高等学校	教 諭	上野真二
【第3分科会】	山形県立新庄神室産業高等学校	教 諭	長沼洋樹
【第3分科会】	福島県立岩瀬農業高等学校	教 諭	穴澤道弘
【第3分科会】	福島県立修明高等学校	教 諭	伊藤正樹

### 7 日 程

- (1) 事前打ち合わせ全体会・分科会 10月22日(火)
- 13:30～14:00 受付(生徒昇降口前)
  - 14:00～14:45 事前打合せ会・全体会(体育館)
  - 14:45～16:30 事前打合せ会・リハーサル(各分科会会場 教室)
- (2) クラブ員代表者会議 10月23日(水)
- 8:50～9:20 受付(生徒昇降口前)
  - 9:30～10:00 開会式(体育館)
  - 10:15～12:30 分科会(各分科会会場 教室)
  - 12:30～13:30 昼食(各分科会会場 教室他)
  - 13:30～14:50 全体会Ⅰ(体育館)
  - 15:00～16:00 全体会Ⅱ(体育館)

※分科会司会者・記録者、指導助言者代表、指導助言者は午後の日程が以下のようになります。

12:30～13:30	昼食（各分科会会場 教室他）
13:30～14:50	分科会まとめ（情報処理室）
15:00～16:00	全体会Ⅱ（体育館）
16:10～16:30	総まとめ会（会議室）
※総まとめ会参加者：指導助言者代表、指導助言者、実施委員長、実施主任	

## 8 分科会テーマおよび会場

分科会	テーマ	会場
第1分科会	「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまう SNS の他に、より多くの人に SNS 以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」	第1会場
		第2会場
		第3会場
第2分科会	「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」	第4会場
		第5会場
		第6会場
第3分科会	「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」	第7会場
		第8会場
		第9会場

## 9 運営担当校

分科会	会場	運営担当校	司会者	記録者	指導助言者
第1分科会	第1	青森県立柏木農業高等学校	工藤 健志郎 長利 天生	福士 陸斗	佐々木 慧
	第2	青森県立名久井農業高等学校	川守田しずく	和田 歩望 宮木 斗摩	奥瀬 翔太
	第3	宮城県農業高等学校	川村 梓 阿部 稜	小松 杜愛	小島 宗工
第2分科会	第4	秋田県立金足農業高等学校	佐藤 あやの 菊地 凛	神田 梨希	和泉 有紗
	第5	秋田県立大曲農業高等学校	鈴木 万葉 佐藤 美音	森本 美桜	菅原 慎太郎
	第6	山形県立置賜農業高等学校	船山 優希 渡部 心真	植村 航大	上野 真二
第3分科会	第7	山形県立新庄神室産業高等学校	矢口 瑠波 西田 夕夏	齋藤 翔汰	長沼 洋樹
	第8	福島県立岩瀬農業高等学校	我妻 恵治	片桐 花乃 力丸 紗里奈	穴澤 道弘
	第9	福島県立修明高等学校	菊池 流星	高松 凛 橋本 林奈	伊藤 正樹

## 10 事例発表校

分科会	会場	事例発表校	発表者	指導者
第1分科会	第1	関東ブロック 千葉県立旭農業高等学校	高野 二葉・嶋田 幸奈 江田 咲里花	茶屋原 文子
	第2	近畿ブロック 兵庫県立播磨農業高等学校	長澤 作心・塩崎 咲月 坪田 知佳	鎌田 一樹
	第3	九州ブロック 鹿児島県立鹿屋農業高等学校	長峯 煌剣・原口 優愛 前田 真奈美	蘭田 啓晶
第2分科会	第4	北海道ブロック 北海道静内農業高等学校	石岡 悠那・田中 とわ 松本 彩楓	阿部 安寿志
	第5	北信越ブロック 福井県立若狭東高等学校	高田 栄・仲村 美羽	角野 宏美
	第6	中国ブロック 岡山県立高松農業高等学校	杉山 怜菜・市田 紗梨 小河原みゆり	白石 大二郎
第3分科会	第7	東北ブロック 青森県立名久井農業高等学校	川守田 めい・山形 葵 河門前 瑠壺	高橋 将太
	第8	東海ブロック 三重県立相可高等学校	内山 栞那・森 恋雪 長岡 明日香	野田 紗由
	第9	四国ブロック 愛媛県立大洲農業高等学校	神山 玲音・清水 悠生 中野 康誠	小西 由真

# 参加者課題レポート

## 第1分科会 第1会場

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまう SNS の他に、より多くの人に SNS 以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第1会場	千葉県立旭農業高等学校	青森県立柏木農業高等学校

## 第1分科会 第1会場

### 【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	北北海道	富良野緑峰高等学校	園芸科学科	3	吉村 華
2	茨城県	石岡第一高等学校	園芸科	2	田上 陽己
3	群馬県	藤岡北高等学校	環境土木科	3	原田 克則
4	埼玉県	児玉高等学校	生物資源科	3	小林 麻衣
5	東京都	農芸高等学校	園芸科学科	2	山田 弥彦
6	山梨県	北杜高等学校	総合学科	2	藤森 水木
7	長野県	下高井農林高等学校	地域創造農学科	3	白川 和花
8	福井県	坂井高等学校	食農科学科	2	宮下 彩巴
9	岐阜県	岐阜農林高等学校	流通科学科	2	藤井 優凧
10	滋賀県	湖南農業高等学校	食品科	2	池永 まさみ
11	島根県	出雲農林高等学校	動物科学科	3	福田 美結
12	山口県	山口農業高等学校	生物生産科	2	阿武 華凜
13	佐賀県	佐賀農業高等学校	環境工学科	3	釘本 陸人

### 【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	千葉県	旭農業高等学校	食品科学科	3	高野 二葉
15	千葉県	旭農業高等学校	食品科学科	3	嶋田 幸奈
16	千葉県	旭農業高等学校	園芸科	2	江田 咲里花

### 【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	青森県	柏木農業高等学校	生物生産科	3	工藤 健志郎
18	青森県	柏木農業高等学校	生物生産科	2	長利 天生
19	青森県	柏木農業高等学校	生物生産科	1	福士 陸斗

## 「旭農業が取り組む魅力発信方法」

クラブ員代表者会議 関東ブロック 千葉県立旭農業高等学校

食品科学科 3年 嶋田 幸奈

食品科学科 3年 高野 二葉

園芸科 2年 江田 咲里花

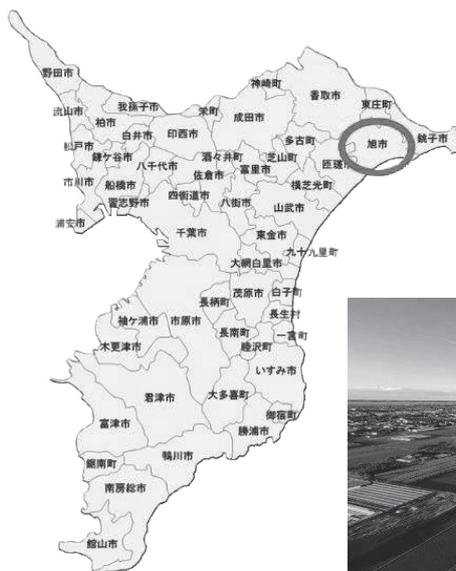
### 1 はじめに



盛んな土地でも、農家が減  
ぜなら、これからの社会を  
うことは、「きつい」「汚い」  
イメージの影響だと考え  
られます。そういった、農  
業離れから後継者不足問  
題、耕作放棄地の増加に繋  
がっています。この現状を  
打破するべく、私たち農業  
高校生が農業の魅力を発信  
していかなければなりません。

近年は情報発信の手段としてSNSが主流になっています。しかし、SNSの使用方法がわからない高齢者や、制限がかけられた小中学生、そもそも全く見ない若者など様々な人がいます。そのような人たちに対しての発信方法を考えなければなりません。私たちはこの恵まれた旭市で、農業の魅力を発信す  
や近隣の小中学校と実際に交  
発信し続けています。

千葉県内の農業高校は14存在し、関東最大の農業高校設置数であります。中でも旭農業高校は唯一の農業を専門とする学校です。畜産科、園芸科、食品科学科の3つで構成されており、家畜や農産物、食品を通して命の尊さ、食の重要性を日々学んでいます。旭市は年平均気温が約15℃と夏は涼しく、冬は暖かな気候に恵まれています。そのため、千葉県内で1位、全国1718市町村で6位の農業産出額を誇る農業大国です。中でも、豚肉は全国2位、野菜は県内1位であり、食の郷と言えます。



しかし、このように農業が少しているのが事実です。な  
担う若者が農業と聞いて思  
「危険」などといったマイナ



SNSの使い方が分からない高齢者

るべく、各科ごとに地域の方々  
流をすることで農業の魅力



制限がかけられた小・中学生

## 2 活動内容

### (1) 販売

市内のイベントや催事などで、食パンやマドレーヌ・ジャム、卵や私たちが育てた野菜や草花・果樹などを販売しています。

食品科学科では、文化祭や加工部をメインにパンやジャムなどを販売しています。文化祭でのパン販売では待ち時間が約1時間になるほど人気です。菓子パンは、食パン、クリームパン、クルミパン、カレーパン、チーズパンなど種類が豊富であることも集客に繋がっていると思います。

また、畜産科では卵やプリンを販売しています。千葉県で養鶏を飼育している高校が他にないため、販売と同時に多くのお客様に手に取っていただき30分ほどで完売します。また養鶏専攻では、地元のカフェと協力してプリン製造を行っています。SDGsを目的に、廃棄される規格外鶏卵を商品化するべく、以前から交流のあった千葉女子高校のレシピを参考に、カフェの方と協力し完成させました。完成発表会には、旭市長をはじめ多くの記者の方々にお越しいただきました。その反応は大きく、販売開始時は



入り  
売を

予定の20倍もの注文数が  
ました。カフェの方でも販  
行っていることから、様々  
な方に購入していただくと  
同時に旭農業についても知  
ってもらえることができてい  
ます。



そして、園芸科では野菜  
や草花を販売しています。  
収穫から販売までの時間が  
短く、新鮮でおいしい野菜  
が安価で手に入るため、ご好評いただいています。客層は  
40代以降の方が多く販売の際、商品説明はもちろん、学  
校の特色などを説明することで、直接魅力を発信できて  
います。



### (2) 訪問・来校

旭農業では年1回小学校へ出向き、イモの苗植えから収穫までの一連の作業を一緒に行っています。初めての体験に興味津々で体験してくれる小学生に、注意事項や手順を説明しながら、終始楽しく作業してくれています。私たちも指導する立場は初めてなので、緊張しますが、駆け寄ってきてくれる小学生と会話するうちに肩の力も抜けてきました。自分た



ちで植えたイモを収穫した小学生は達成感に溢れ感動しており、その姿を間近で見ると



も、とてもうれしく思いました。他にも、花や野菜の種や苗と一緒に植えています。小学生に興味を持ってもらえるよう、プランターにお絵描きするところから始まります。収穫までのことを考え、特別感を抱けるよう好きな絵を書いてもらいます。

また、小学生から高校生にそれぞれ来校していただき、動物のふれあい体験を実施しています。ウサギをはじめとした愛玩動物から、触れ合う機会のない家畜を見学してもらい、私たちが普段口にしている、牛乳や卵、豚肉などがどのように生産されているのかを説明します。卵に関しては、実際に集卵作業から選卵、パック詰めまでを体験してもらいます。重さや柄などを確認しながら、自分たちの手で販売可能な状態まで作業することで、食の大切さを実感することもでき、「大変だけれど楽しい」という声をいただいています。他にも、田植えから収穫までの一連の作業を一緒に行っています。



### 3 これから

実際に交流しながら農業の楽しさを感じてもらうことが一番だと思いますが、より多くの方に知ってもらうにはどうしたらよいのか考えました。その結果、広報に力をいれるべきだと思います。

園芸科では2021年からカレープロジェクトを実施しており、現在第3弾を計画中です。地元の企業と連携しながら、旭農業で育てた豚肉や地元産のマッシュルームを使用したレトルトカレーが完成しました。販売場所として、

市内の道の駅に協力を得ることができ常置していただいています。それだけでも広告の役割はありますが、パンフレットを作成し一緒に渡



これからの活動

- 1、広告に力を入れる！
- 2、カレープロジェクト第3弾の開発！
- 3、農業クラブの存在をアピール！



旭農ブランドの確立

旭農業高校養豚専攻の豚肉

旭市産の野菜

フードデザインコース  
カレープロジェクトメンバー

すことで、より詳しく魅力を発信できると思います。カレーといった多くの人が手に取る商品の場合、お客様にパンフレットが渡る機会も多いと考えました。

旭  
農  
業  
は  
農  
業  
高  
校  
の  
甲  
子  
園  
と  
言  
わ  
れ  
る



「農業クラブ」ではほぼ毎年、関東大会への出場を決めています。今年の千葉県学校農業クラブ連盟研究発表大会では、意見発表で2部門、プロジェクト発表で1部門が最優秀賞を受賞し、関東大会への切符を掴みました。それは、決して簡単なことではなく誇れることだと思っています。農業に興味を持ち、農業高校への進学が選択肢に入るよう、そういった大会結果を横断幕として学校に張り出すことで、通りすがりの方も目に留めることができます。多くの学校では、部活動での試合成績などが貼り出されていますが、千葉県内唯一の農業専門の高校として農業クラブの存在もアピールできればと思います。



#### 4 まとめ

SNSだけでは発信の限りのある農業の魅力は、体験や交流を通して伝えることが1番だと思います。イメージだけで農業を縛り付けるのは良くないと、実際に農業を学ぶ身として感じています。体験や交流を通して多く聞かれる言葉は「楽しい」「感動」とプラスなものがほとんどです。それはスマホの中だけの情報では伝わらないということです。

年々、農家が減少し後継者不足になり、耕作放棄地が増えているのが現状です。私たちが住む千葉県でも、農業産出額が昭和44年以降、北海道・茨城に次いで第3位だったが、令和3年以降第6位と落ちています。ロボットやAIを活用したスマート農業の導入も解決方法のひとつとして挙げられますが、そもそもの農業をする人がいないとどうすることもできないのです。そのため、この現状を変えるのは並大抵なことではないと思います。急には厳しいですが、徐々に回復へと向かう手伝いができれば嬉しいです。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北北海道ブロック 北海道富良野緑峰高等学校  
園芸科学科 3年 吉村 華

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

### ①地域との連携活動、交流活動を充実させる。

- ・どの学校でも地域との連携活動や交流活動を行っていると思います。そのような機会をより充実させ、相手に「〇〇高校さんの生徒は素晴らしいね」と思ってもらえれば、その方々が様々な場所でそのことを発信してくれるようになる。またそのような活動を重ねていくと多くの場合が新聞の記事や地域の広報誌に載るなどと思う。それらから情報を得る世代はSNSで情報を多く得る世代とは異なるので良いと思う。



幼稚園とのジャガイモ交流学习

### ②在校生、卒業生が学んだことに自信と誇りを持つ。

- ・その学校、学科に学んでいる生徒自身が「いい学校だ、いい学科だ」と自信をもって言うといい。①と同じようにそれらの情報は噂や評判という形で広まっていくと考える。SNSでの情報発信が積極的発信とするとこれらの方法は積極的発信ではないが、だからこそ効果があると考えられる。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

### ①地域の方々との交流や自分たちから地域に入っていく、地域（地域産業）が抱える課題を見つけ出し、それを解決するプロジェクト学習を行う。

- ・地域課題の解決に向け活動していくと、必ずSDGsの17ある目標の何かにかかわると考える。富良野緑峰高校では赤ワインの製造時に出る搾りかす（パミス）の有効利用について研究している。活動の中で意図していなかったが「2、飢餓をゼロに」や「15、陸の豊かさを守ろう」に該当している。



ワイン搾りかす（パミス）の研究

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

### ①特にスマート農業の技術や実践事例を紹介、発信して農業のマイナスイメージをプラスに転換し興味を持ってもらう。

- ・農業と言えば「汚れる、重労働、儲からない」などのマイナスイメージを持っている人も多いと思うので、実際の事例などを紹介、情報発信しイメージを変えると良いと思う。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 茨城県立石岡第一高等学校  
園芸科 2年 田上 陽己

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

本校では学校HPなどのSNS以外での情報発信として、石岡市で開催されるふれあいまつりに参加し、生産物の販売や学校紹介を実施しています。また、石岡市内の消防署や警察署、JR石岡駅に栽培した草花のプランターを置かせていただき、学校での取組をアピールしています。10月には茨城県で開催するシン・いばらきメシというイベントがあり、パネルでの参加になりませんが、来場した方々に学校について情報発信します。

また、今後は石岡市内の直売所やホームセンターなどのような農業などと関わりのある場所などに学校のポスターを貼らせていただいたり、移動販売なども実施できたらと思います。

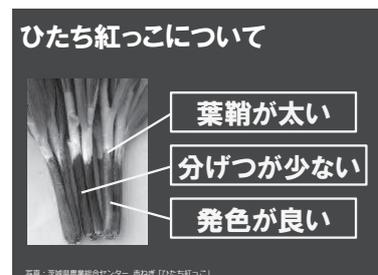
これらの活動を通して、農業高校は一般的な高校と比べてこんなことしているんだと感じてもらえることができ、農業高校ならではの魅力を伝えることができると思います。



## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校では現在、茨城県の伝統野菜の赤ネギのひたち紅っこの栽培をしており地方野菜として地域の人達に知ってもらおうと活動しています。しかしながら、栽培が難しく収益がでないなどの問題もあり生産があまりされておらず、知名度が低いといった地域課題があります。赤ネギなどの伝統野菜を知ってもらうために、その野菜の特徴を活かした料理などを考えていくことで、より地域に身近な野菜として感じてもらうことができるのではないかと思います。そして生産から消費まで考えたものを学校内外で普及活動していくことで地域野菜の普及という課題解決につながると考えます。



## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

本校では温室でトマトとメロンの水耕栽培を行っています。しかしながら収穫ロボットやAI、IoTによる生産管理の施設はありません。まずは農業を学んでいる私達高校生が実際にスマート農業を行っている農家を見学することや、ロボットトラクタやドローンの操作などの体験することで、スマート農業の良い点や課題を理解し、実際に学校でも活用していくことができたらと思います。実際に体験したことであれば各種イベント等でその体験を発表することができ、地元の小学生や中学生にも体験会を開催するなど考えることができます。若い世代の方にも実際に見学や体験をしてもらうことで、これがスマート農業なんだと知ってもらったり興味を持ってもらうことができると思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立藤岡北高等学校  
環境土木科 3年 原田 克則

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

学校内外で地域参加型のイベントを開催し、各コースの特色を活かして魅力を発信する機会をつくっています。農産物や加工品販売、カフェやクラフト体験ブースの運営を行い、市広報誌やポスターなどで告知し、さまざまな年齢層の方に参加していただいています。また、コースごとに他団体と協力して取り組んでいる活動も多くあります。環境工学コースでは、県水産試験場と共同で環境調査を行い、藤岡市天然記念物ヤリタナゴの保護活動や小川の環境保全活動に取り組んでおり、学会やシンポジウム、各種イベントや機関誌等で積極的に発表しています。このような活動は、各種メディアに取り上げていただき、幅広い情報発信につながっています。



## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域行事に私たちがボランティア参加するなどして、地域コミュニティに参画し信頼関係を構築する中で、私たちの活動への理解や提案を発表すべく勉強会を開催しています。地域の課題解決として、公園の調査活動から利用形態の変化を明らかにし、これからの社会に求められる公園のあり方の実現に向け、市と共同で市公園づくり協議会を設立し、地域と連携して樹木調査・バリアフリー調査等調査研究を進め、ユニバーサルデザイン化への提案を行うなど、活動を発信する機会をつくるのが大事だと考えています。



## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

本校では、ドローンを活用した環境調査や栽培管理を行うスマート農業に取り組んでいます。ロスフラワー対策として、県内の花生産者とコラボして商品開発・販売を行うことで、花の普及活動や農業経済活性化にも取り組んでいます。また、本校公式インスタでは、樹木や野菜苗クイズなども定期的に発信し若者にも興味をもってもらえるような魅力発信を行っています。以上に、新しいアグリビジネスや6次産業化に取り組んでいる様子等を発信し、より多くの人に周知していきたいと考えています。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立児玉高等学校  
生物資源科 3年 小林 麻衣

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

定期的に講演会や体験講座を開催したり、地域のイベントなどに参加したりして、農業高校や農業クラブの活動や魅力を発信する機会を設ける。また、話を聞くだけでは特に若い人はつまらないと思うので、体験コーナーやゲームなどのレクリエーションイベントなども同時に企画して幅広い年齢層に興味をもってもらうように工夫する。

情報発信のツールとして、新聞やチラシ、ポスター、地域の回覧板などの紙媒体を利用する。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域の様々なエコ活動やボランティア活動に参加してそれを支援したり、学校でSDGsに関係するワークショップなどのイベントを企画したりする。

学校の農場などで出た規格外農産物の販売や加工体験教室の開催、子ども食堂への食材提供や参加などに積極的に取り組んでいく。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

文化祭や農産物即売会など、地域の方が大勢学校に来る機会を利用し、スマート農業や農業経済に関する体験イベントや特別講義などを実施する。

スマート農機のメーカーやシステムの開発会社と学校のコラボイベントを企画して、高校生や中学生にその体験に参加してもらったり、話を聞いてもらったりして、まずはどういった技術なのかを広くPRしていく活動をする。

SNSなどを使って、スマート農業の活用方法や農業経済の講義などを広く発信する。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立 農芸高等学校  
園芸科学科 2年 山田 弥彦

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

SNS 以外の情報発信の場として、駅、公共施設などで販売会など人が集まる催しの開催と同時にポスターや配布物でPRするのが良いと考える。学校行事での生産品即売会で、いらっしやっただお客さまの多くが足を止めて生産品を買われていた。販売会を多くの人が集まる駅や公共施設で行う。販売会で多くの人を集め、買っていただいたお客様にPR プリントを渡したり、PR 動画を流しておくことで足を止めてくれたお客様にも PR することができるのではないかと考えた。公共施設以外にも、地域のお祭りなどに参加するのもよいと考える。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域課題解決のためには、普遍的な知識、柔軟な発想、地域を知ること、地域との連携の四つが大切だと考える。そもそも、地域にどんな課題があるのかわからなければ活動を起こすことができない。また、活動を行っても、地域との連携ができなければ、活動の実は結ばれないであろう。普段の授業は、普遍的であり、すべての事象に対して有効なわけではないと思う。その地域の特色、考え方を取り入れ、普遍的な知識をその地域に合ったものに変え、知識を地域が受け入れられる形にして行く、柔軟な発想も大切だと考える。柔軟な発想で考えていくうちに、地域課題の解決やSDGsにつながるイノベーションが起きていこう。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

興味をもってもらうためには、たくさんの情報を流していくことが大切だと考える。たくさんの情報が流れることで、すでに興味があるけど絵を伸ばしきれない人への最後の一押しになる可能性もあれば、たくさんの情報の一分野に刺激を受けて、興味を広げていかれる方もいると考える。私は、何事も「知る」ことが重要だと考える。ドラマなどでブームが起こることがあるように、今まで何とも思っていなかったことに何かの情報を知ったことで興味が出てくるということがある。そのきっかけとなる、「何かの情報」が不足してしまっているのではないかと考えた。きつい、汚い、生産は難しいなど、農業に手を出しにくい事柄はスマート農業によって改善されている。そのことを、世の中の若い人々は知っているのか。義務教育で伝えきれているだろうか。私は伝えきれていないと考える。そのために私たちがすべきなのは、テレビ、ネットニュース、電光掲示板でもいい、情報を流していくべきなのではないか。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 山梨県立北杜高等学校

総合学科 2年 藤森 水木

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

地域だよりを作って地域に配ったり、貼り紙を駅やコンビニなどに貼ってもらいます。北杜高校の最寄り駅である日野春駅ではロータリーに北杜高校で育てた花が植えられています。そのような情報を強調した貼り紙などを貼るのも効果的だと思います。地域だよりのおもな内容は、学校での収穫祭についての情報や授業内容、活動内容について文字だけでなく、イラストや写真を使って魅力を発信します。

近年、北杜高校で田植えを行うときには取材していただき、テレビでその様子が放送されています。田植えだけでなく、授業や活動の様子を定期的にテレビや新聞などに載せてもらうことができれば、より多くの人に農業高校の魅力を発信できるのではないかと考えました。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

北杜高校では4パーミルイニシアチブに取り組んでいます。これは世界の土壌の炭素量を増やし、人間の経済活動によって発生する大気中の二酸化炭素を実質ゼロにすることができるという考えに基づいた国際的な取り組みです。北杜高校ではこの活動を地域の方々に広める活動を進めています。この活動が地域の方に広まればSDGsの意識向上にもつながると考えます。また、北杜高校では4パーミルイニシアチブの活動を行う際に無煙炭化器というものを使っています。これは煙が発生しにくく、外部から空気が入り込まないため、酸欠による炭化が促進され、比較的短時間でバイオ炭が生成できる機器です。この機器を使用すれば野焼き等で発生する煙の課題を解決できるのではないかと考えます。私自身、このような取り組みや機器を最近知りました。地域の方々もこのような取り組みについて知らない方がほとんどだと思うので、多くの方に広めることができれば地域の課題解決やSDGsにつながると考えます。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業の楽しさを伝えるための活動では、農作物の収穫や農業についての知識を使った競技会を行うと良いと思います。収穫に関する競技ではモモやブドウの糖度を当てる競技を行います。最近ではカメラを使って果物の糖度を測ることができるようなので、そのようなものを利用しスムーズな競技の運営を行います。農業についての知識を使った競技では、農業に関する〇×クイズなどを農業を行う上で集めたデータを利用して作り、参加者に農業についての知識を深めてもらいます。これらの競技では上位の参加者に景品として農作物を持ちかえることができるように準備をします。景品が目当ての参加者にも、農業の楽しさ、農業の知識を深めてもらうことができれば、若い世代に興味を持ってもらうことができると思います。また、北杜高校では地元の子供に農業体験をしてもらうことができるように交流活動を行っています。この活動を発展させ、見ても面白い農業にすることができれば、小さなころから農業に興味を持ってもらえると考えます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県下高井農林高等学校  
地域創造農学科 3年 白川和花

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

『現状』 情報を発信する際に SNS などに全て頼ってしまっている。

- ・スマートフォンなどで伝えられてしまう。
- ・身近にあるネット情報の方が簡単に得られてしまう。

『問題点』 SNS などは年齢層が限られてしまう。

- 『対策』
- ・年齢層に関係なく誰にでも見やすいポスターを作成し、イベントを通して広い場所で魅力を伝える。
  - ・地域のローカルテレビ・回覧板・掲示板などを利用して地域の人から伝えていく。
  - ・地域の協力してくれそうなお店に手伝っていただく。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

『現状』 社会、地域で問題となっている点を考え直す。

- ・問題を解決するため意見交換。
- ・SDGs の活動内容の把握。

『問題点』 それぞれの活動をどんな方法でSDGsにつなげるか。

- 『対策』
- ・多くの人にSDGsの活動内容を理解してもらう。
  - ・活動が地域の課題解決やSDGsにつながるようにクラブの委員で考える。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

『現状』 スマート農業や農業経済の理解を深める。

- ・若者が農業に興味を持っていない。
- ・スマート農業と農業経済があまり知られていない。

『問題点』 若者が農業に興味をあまり持っていない。

- 『対策』
- ・今までとは違う農業のやり方や経済の状況を伝え、実際に体験していただいたり見ていただいたりすることが大切だと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 福井県立坂井高等学校  
食農科学科食品コース 2年 宮下彩巴

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

多くの人に農業高校について知ってもらうには、テレビで、農業高校の魅力について高校生の私たちが発信することや、市役所との方々と共同して農業高校の魅力広報誌を製作し、私たち高校生が様々な地域に広報誌を配り歩くといいと思います。

高齢者が多い施設や地域で開催するイベントに参加し、活動について知ってもらうことが大切だと思います

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校では、廃棄される酒かすやトマトなどを使用したパンやお菓子などの食品にすることで、学校にある販売所や地域の祭りなどの商品として利益を得ることができ、食品ロスの削減につながります。また、どれだけの食品が廃棄になっているかを知ってもらうきっかけにもなると思います。

地域の人から話を聞きどのようなものが、廃棄になるのか、生産現場の状況を知り、その情報を多くの人に伝えたいです。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

休みが多いことや、虫がいない、日焼けをしないなどの若い世代の人たちが、働きたいと思えるような職場環境だと発信していきたいです。具体的には、インスタグラムを用いて多くの人と関わりを持ち、農業をやっている人と、やりたいと思っている人の交流の場を作りたいです。

その他、実際にスマート農業とはどのようなものを映像として残し、SNS等を駆使して外部へ発信することで興味を持ってもらうことが大事だと思います。また、現時点でどのくらいスマート農業が普及しているかメリットやデメリットをまとめ説明し、若い世代とディスカッションを行うことで、若い世代の人たちに興味を持ってもらえるのではないかと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 岐阜県立岐阜農林高等学校  
流通科学科 2年 藤井優風

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・人と直接話すことができる販売所・交流の場が必要である。
- SNSなどの文面では堅苦しく感じることや、意味合いが上手く伝わらないことが多い。  
相手の表情、言葉、雰囲気などからいろいろな情報を察知して、お互いをよく知ることができる対面式販売や交流の場などがあると良い。短時間での広がりには期待できないが、信頼を得ながら確実に魅力は伝わっていくと考える。
- ①地域密着型の実習生産物の販売：地域の農産物直売所、地元のお祭り催し物
- ②地域密着型メディアによる宣伝：ケーブルテレビ、新聞広告、ポスター掲示など

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・学習やプロジェクト活動がSDGsの目標にどのように関連していくのか知る必要がある。
- 地域課題を知るための情報交換会を開催し、地域住民、市役所、JA関係者、学識者などと話し合い、取り組むべき課題や方向性を検討するための情報を把握することが必要である。
- ・最近の課題研究だけでなく、過去の研究も参考にしながら、SDGsに繋がりそうな課題研究を再検討していく。
- 例) ワケあり実習生産物を低価格で販売する。  
廃棄される農産物、廃材などをリサイクルして価値あるものにする。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・若い世代と農業従事者、農業研究者などとの交流の場・農場での体験実習などが必要である。
- 若い世代にとって農業は「重労働」「汚い」「きつい」「天候に左右される」「所得が低い」などマイナスイメージをもっている方が多い。そのため、実体験を見聞きする場や体験を通じて自ら考えられる活動の場があると良い。
- 例) 小中学生向けの体験活動、農業体験ツアー、農業機械の操作体験、スマート農業を実践している農家への見学会や語る会 など。
- ・SNSやYouTubeなどを利用して、農業を学ぶ高校生から情報発信をする。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立湖南農業高等学校  
食品科 2年 池永 まさみ

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

農業高校の魅力を知ってもらうためには、SNSが持つ広範囲、不特定多数に発信できるというメリットの反対にある、特定範囲、限定的な人に発信するような地域の広報誌やコミュニティーセンターの掲示板にポスターを掲示することで電子端末を活用されていない人へも発信することが出来ると思います。また、農業高校で栽培、製造、制作したものを地域のイベントで販売する、地域の方を学校に招待して授業参観や農業体験をしてもらうなどの交流をしていくことでも魅力を伝えていくことができると思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域の特産品を活用したレシピの考案や環境保全に貢献できるような学習、活動をしていくことができると思います。

本校では、市の花や滋賀県の伝統野菜を用いたクッキーやカレーなどのレシピを考案し、製造しています。また、環境保全の視点では、商品を梱包する容器や袋をプラスチックから紙に変更することや滋賀県を代表する自然環境である琵琶湖のごみ拾い、ごみ拾いなどで回収した資源でのコンポスト製造などを通して廃棄物を減らすような取り組みができると思います。

地域の課題では、放課後の小学生の活動の場としての子供食堂の運営ができると考えています。授業で製造した加工品や農産物で食事を作る、小学生と一緒に農産物を栽培するなどの交流をしてみたいと思っています。こんな活動ができれば、一つの課題だけでなく、将来の農業高校生を増やすことや若者世代から地域の課題を解決することにつながると思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業のイメージが、「暑いハウスの中で栽培する」等の大変なこととして捉えられている点があるので、ゲーム感覚でパソコンやモニターを操作しながら管理する方法を体験するようお願いをイベントを開催して、自分でも農業が出来るかもしれないという良いイメージを持ってもらえる機会を増やすことが必要であると思います。

農業関連企業さんに協力していただき、農業高校で農業機械の実演や植物工場の展示ができるといいなと考えます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 島根県立出雲農林高等学校  
動物科学科3年 福田 美結

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

### ●現状と提案

農業祭、出農ショップそして移動動物園を通して、各学科の活動をPRすることで、日頃の学習成果の周知と学校の認知度向上を図っている。

提案として魅力あるオープンスクールにすることが考えられる。例えば、学校説明会にOB生徒も同行すると効果的かもしれない。その他、学校だよりを回覧板で回してもらい、ラジオ、マルチテレビなどへのプロジェクト発表紹介や地域の行事やお祭りに参加、販売と合わせてステージ等で活動内容を紹介させてもらうなどが考えられる。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

### ●現状と提案

植物科学科では地域の身近な絶滅危惧種（イズモコバイモ）を保護する活動をしている。持続可能な農業経営を学ぶために美味しまね認証（GAP）を水稻、野菜（トマト）を取得している。動物科学科では出雲コーチンの復活（種の保存）を目指した研究を行っている。

提案と取り組みして後輩にこれらの研究を継続してもらうために、発表会等で関心を持ってもらう。また規格外品のサツマイモを飼料として置き換えることで、飼料コスト削減と廃棄サツマイモの削減につなげている。SDGsの理解や地域課題を知るために、関連産業に就職した出雲農林OBなどからの聞き取り調査、フィールドワークを行うなどが考えられる。



## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

### ●現状と提案

植物科学科では自動田植機やハウス自動巻き上げ機の増設により農作業の省力化を図っている。食品科学科では商品の栄養計算をインターネットで作成している。動物科学科では牛舎内の繁殖養牛房にカメラを設置して、牛の行動観察や分娩の様子を遠隔からいつでも見ることができる。

提案として地域参加型（親子参加型など）の企画を行い、スマート農業を体験してもらう。若い世代の農業者や革新的な農業者から農業経営の方法や農作業効率化の手段など聞き取り調査を行う。そしてその内容を、農業クラブ活動発表などの発表会で発表し、若い世代でも活躍できる産業であることを伝えるなどが考えられる。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 山口県立山口農業高等学校  
生物生産科 2年 阿武 華凜

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

絵本、漫画、ポスター(電車内の広告など)の作成や、幼稚園、老人ホームへの訪問、テレビなど様々な人の目に入る場所で情報発信を行うことが考えられる。

幼稚園の訪問では、農業高校の取組を手作りの絵本にし、読み聞かせる。テレビは年齢に関係なく多くの人に見てもらえるので、取材に来てもらえるようなイベントを行う。電車通学する高校生や大学生、社会人、スーパー等で買い物をする人に向けたポスターを作成して表示する。また、農業高校を舞台にした漫画、コメディ映画を作る。あまり実現できそうにはないけれど、コメディなら恋愛ものが苦手な人や、見るのが恥ずかしいという人でも見ることができると思う。

農業高校で作った野菜や果物を使った料理、木で作れるおもちゃ、フラワーアレンジメント体験など、ワークショップのも一つの方法だと思う。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

まずはSDGsについて知る活動を増やす。地域の農業法人が取り組んでいるSDGsへの取り組みを発表してもらい機会が本校で行われている。そうした行事を農業クラブが関わりながら今後もっと増やしていく。

校内で雑草を肥料にしたり、家畜の排せつ物を肥料にしたりするなど、循環型農業に取り組む意識を高める活動を行う。また、学校以外の農家さんとのやり取りを増やして、環境へ配慮している取り組みが無いか意見交換を行う。それらを農業クラブの活動で、別のクラブ員へ情報発信し、一人ひとりがSDGsを意識できるようにする。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

スマート農業について自分たちで調べて発表する。また授業等で本校にある農業用ドローンを実際に見てもらい、興味を持ってもらう。

農業経済については、専門用語も多く、分かりづらい内容が原因で興味を持ってもらえないと考えている。例えば、わかりやすく漫画にすると、教科書や本に苦手意識がある人でも興味を持ってもらいやすいのではないかと。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立佐賀農業高等学校  
環境工学科 3年 釘本 陸人

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

本校は、校外での活動を通して、地元の方と交流を行っています。地元道の駅で行っている高校生ケーキカフェ「サノ・ボヌール」では、実習で製造した様々なケーキとドリンクで地域の方に癒しのひとときを提供しています。また、地元商店街で行っている生産物販売「サノンマルシェ」では、クッキーやビスケットなどの加工品、野菜や果物、花などを販売しています。カフェや販売会は毎回多くの方にご来店いただいております。日ごろの学びの成果である加工品や生産物を通して農業高校を知っていただく機会になっています。その他、農業クラブの活動としては年に1回の地域清掃ボランティアや、農業科学科で栽培した草花を地元の駅や施設に届ける活動を行っています。今後は販売会や文化祭などの機会に、各科や農業クラブが取り組んでいる学習内容や活動などについて、PRしていき、本校のことをより深く知ってもらいたいと思っています。



## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

まずは地域のことやSDGsについてよく理解することが必要だと思います。本校では1年時の総合的な探究の時間や2・3年時の課題研究の授業で、地域の課題解決に向けて取り組んでいます。総合的な探究の時間は、農業や環境、人口、教育、産業等に関するテーマについて調査やフィールドワークを行います。年度末には学年全体で発表会を行い、地域の課題やこれから取り組むべきことを共有しています。2・3年時の課題研究は学年を超えて課題解決に向けて取り組むことで多様なアイデアが生まれ、日ごろの学びの成果を地域に還元しています。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

本校では無人トラクターやドローンを活用した実習を行っており、体験入学でもこれらスマート農業や最先端機器の紹介をしています。また、就農を目指す農業高校生が集う「未来さが農業塾」では、海外農業事情視察研修や先進農家・施設等の視察を行い、スマート農業や最先端の農業経営について学びを深めています。これらの知識を生かしてどのように活動していくとよいか、全国のクラブ員の皆さんと意見を交換したいと思っています。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立旭農業高等学校

食品科学科 3年 嶋田 幸奈

食品科学科 3年 高野 二葉

園芸科 2年 江田咲里花

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ① 市町村の産業祭や文化祭で情報発信による発表会を行う。
- ② 市町村の広報誌や地区の社会福祉法人と連携し、福祉活動と農業体験等を組み合わせて取り組む。(福祉と農業プロジェクト) 体験を話し合い、地域の「かたりべ」活動を活かす。
- ③ 幼稚園・小学校・中学校生向けの情報交換(学期に1回) だよりを作成し、配布する。  
(お互いに参加しあえるものを考えて行う。例えば「草花や野菜の種まき・花壇づくり・野菜や作物の収穫体験・ブルーベリーのせん定・家畜のお世話体験など」)
- ④ 地域の教育関係機関の先生方(幼稚園・小学校・中学校・高校・特別支援学校等) 農業高校を体験してもらい、その体験や農業高校の魅力を話してもらう。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ① 農業クラブの発表大会(県大会・関東大会・全国大会)に児童や中学生を招待する。または、高校生が出前授業でプロジェクトの発表を行う。保護者にも協力してもらい地域社会へ発信する。
- ② より多くの発表場所へ赴き発表し、学校外への研修会や企業が行っている活動を見学する。
- ③ ひとり1つの卒業プロジェクトを作り、冊子にして介護施設や生涯学習センター等、各学校関係・公共の場で閲覧してもらい、アドバイザーになって共に交流する。
- ④ 農業実習を通じて、身近な問題(猛暑、異常気象など)やその対策を考えることで、よりよい農業の方法を考えられSDGsにつながる。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ① 農業事務所や県の農業大学校等の機関に相談し、スマート農業に取り組んでいる農家を紹介してもらう。最初は参加型で経験を積み、その後学校独自の参画型を実践する。
- ② 先輩農家や農業協同組合・農業法人に協力をもとめて、勉強会や見学会、体験学習を行う。
- ③ 農林水産省や農業経済界・県会議員に勉強会の協力をしてもらい、「人と農業・町と農業・国と農業」のつながりを学ぶ土台をつくり食の重要性を幼少期から教育をする。(食育活動)
- ④ 地域発農業物語と題して、テレビドラマをつくり、その地域ごとに「農業にまつわる」話題を取り入れて動画発信する。(良いところだけでなく、現実的な問題点も取り上げる。)
- ⑤ 農業以外の高校生と一緒に会談を行う。
- ⑥ スーパーなどで販売している農産物に関して、「使われているスマート農業」や「どのようなルートをたどって消費者に届いているか」、「どのようにして値段が決定するのか」などについて、ポップをつくり展示する。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック青森県連盟 青森県立柏木農業高等学校

生物生産科 3年 工藤 健志郎

生物生産科 2年 長利 天生

生物生産科 1年 福士 陸斗

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

SNS以外の情報発信の手段として、地元の報道機関や広報誌での取り上げ、外部コンテストへの応募や参加などが効果的ではないかと考えている。テレビや新聞などの報道機関に取り上げられることによって、より多くの人が目にする機会となり、自治体の広報誌も同様の効果があると感じている。また、外部コンテストへの参加によって、参加者に知ってもらえることができるほかに、様々な媒体に取り上げられることがあるため、多くの人が目にする機会になると感じている。



活動後の報道機関による取材の様子

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域の方々と連携した活動が重要であると考えており、本校でも地域農家や企業など様々な団体と連携した授業やプロジェクト活動が展開されている。その過程で、連携する方々の本当の「困り事」に気が付き、その解決のために活動することが大切であり、何度も訪問してコミュニケーションを重ねながら活動を進めていくことが必要であると考えている。また、お互いに同じ思いや熱量で活動に取り組むことも重要であり、お互いにとってメリットが大きく、継続した活動を展開することにつながっていくと感じている。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

スマート農業分野では、自動運転田植え機の試乗学習やVRゴーグルを活用したリンゴの選定技術の学習会、ICT機器やスマート機器を農作物の栽培管理に取り入れるなどを行っている。農業経済分野では、柏農市や柏農祭での農産物販売、海外研修を活用した輸出農産物や加工品の市場調査などを行っている。どんな行事や活動においても、クラブ員自身が楽しく、「わくわく」できることが重要である。これらの様々な活動が小さなきっかけとなり、興味を持って活動していくことで、クラブ員の大きな成長や飛躍へとつながっていくこともあると考えられる。



自動運転田植え機の試乗学習の様子

# 参加者課題レポート

## 第1分科会 第2会場

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまう SNS の他に、より多くの人に SNS 以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第2会場	兵庫県立播磨農業高等学校	青森県立名久井農業高等学校

## 第1分科会 第2会場

### 【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	宮城県	宮城県農業高等学校	園芸科	2	小椋 奏海
2	栃木県	栃木農業高等学校	環境デザイン科	2	滝沢 聖那
3	群馬県	大泉高等学校	生物生産科	3	大川原 睦歩
4	千葉県	流山高等学校	園芸科	2	金久保 悠海
5	東京都	農業高等学校	都市園芸科	3	柄本 龍信
6	静岡県	田方農業高等学校	生産科学科	2	仁科 千鶴
7	長野県	佐久平総合技術高等学校	食料マネジメント科	3	佐藤 陸翔
8	愛知県	稲沢・稲沢緑風館高等学校	園芸科	2	鈴木 悠平
9	三重県	明野高等学校	生産科学科	2	辻井 悠斗
10	大阪府	豊中高等学校能勢分校	総合学科	2	鳥谷 美波
11	岡山県	瀬戸南高等学校	園芸科学科	3	田口 紗彩
12	愛媛県	伊予農業高等学校	生活科学科	2	高橋 こころ
13	長崎県	諫早農業高等学校	生活科学科	2	城島 彩乃

### 【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	兵庫県	播磨農業高等学校	畜産科	3	長澤 作心
15	兵庫県	播磨農業高等学校	畜産科	2	塩崎 咲月
16	兵庫県	播磨農業高等学校	畜産科	2	坪田 知佳

### 【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	青森県	名久井農業高等学校	生物生産科	3	川守田 しずく
18	青森県	名久井農業高等学校	生物生産科	3	和田 歩望
19	青森県	名久井農業高等学校	環境システム科	3	宮木 斗摩

# 「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

近畿ブロック 兵庫県立播磨農業高等学校  
畜産科 3年 長澤 作心  
畜産科 2年 塩崎 咲月  
畜産科 2年 坪田 知佳

## 1 はじめに

近畿ブロック連盟は2府4県37の加盟校で構成されています。兵庫県連盟は11校で構成されており、令和6年度はクラブ員数2,240名が所属しています。また、日本列島のほぼ中央に位置する兵庫県は、日本標準時を決める東経135度の子午線が南北に走り、北には日本海、南は瀬戸内海、太平洋に接するなど、その多様な気候と風土から、「日本の縮図」と言われています。また、農畜産物では全国に広がる黒毛和牛の素牛である但馬牛や日本3大和牛に数えられる神戸ビーフ。淡路のタマネギ、酒米である山田錦など全国的に有名な農畜産物を保有する県でもあります。



### 播磨農業高校とは

兵庫県唯一の文部科学省指定「農業経営者育成高等学校」としての使命のもと、来年度創立60周年を迎え拠点農業高校としての役割を果たすべく、農業教育・普通科教育・寄宿舎教育を教育活動の3つの柱として展開し、農業を愛し、豊かな知識と確かな技術を持ち、21世紀の兵庫の農業と地域社会の発展を担い、国際社会で活躍・貢献する、夢と志を持ったところ豊かで自立する人材の育成を目指した学校です。

また設置学科は「農業経営科」「園芸科」「畜産科」の3学科を有し、西日本最大級の32haという広大な校地で、体験を重視した実践的な農業経営が学べます。



## 2 事例報告

### 販売会の充実①

本校の取り組みとしては年に数回行われる。販売会において生徒が主体となり販売会の運営を行っています。特に、1学期の授業内において3回行われる校内販売会では地域や保護者の向けに、2年生が担当し、3学科の6コースの代表生徒が中心となり販売物の設定、価格調整、レイアウト全て任せられ運営を行っています。

また、物を売るためだけの販売にならないために、各授業等の関連付けをさせ市場調査やアンケートの実施を行っています。

昨年度に関しては google を使用したアンケート実施を行い、回答数 20 平均という結果に至ったが、今年度は手書きのアンケートに原点回帰をして行ってみると結果 40 という回答数に至り SNS 利用世代においては効果的になる一方で学校に実際に来てくれる相としては SNS 未利用世代も大きな顧客の相があるように分析した。

地元地域の広報や回覧版に挟んでもらうような取り組みをしていくことも必要ではないかと考えます。

また、3年生からは校外での販売実習だけではなく、各種ボランティアやイベントに一人一回以上参加するように配当されています。



## 販売会の充実②

本校最大の行事「農高祭」では、毎年11月23日の行われる宮中祭祀の一つである新嘗祭の行事に合わせ1年間の収穫への感謝を「農高祭」というかたちで本校では開催しています。そして農業クラブ執行部の活動として11月の上旬から大看板の設置、県内農業高校から集めた農産物や学校紹介パネルの展示を行うなどの農業高校展、執行部で育てたダイコンの販売、食品バザーなどがあります。

3年前から規模を拡大していき、現在ではロコミの効果等により昨年度は40万円ほどの収益になり、利益分は農業クラブ活動費の一部に補填されています。



## 地域貢献事業

本校では、農業クラブ執行部のみならず、各科コースにおいて地域交流を踏まえて、農業高校の魅力アップ並びに地域貢献に取り組んでいます。特に植栽や植栽用の苗配布については 20 年以上前から地元加西市と協力し、取り組み地域と共存した学校として地域に貢献しています。



### 3 まとめ 今後の活動

農業高校の魅力を発信する手段としてとして SNS を利用すると年齢層が限られてしまうは仕方ないことだと思う。しかし、それでも多くの人に発信するためには、活動に対して歴史や伝統を積み重ねていくことで地域等に根付いたものになっていくことが大事になってくると思う

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 宮城県農業高等学校  
園芸科 2年 小椋 奏海

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

若い世代にはSNSでの情報発信を継続し、学校ホームページを充実させ多くの方々に見ていただくように毎週様々な記事を更新しています。そのためアクセスが月平均3万件を超えています。また、企業などとコラボを行い各種マスメディアに取り扱っていただくことで多くの方々に学校での取り組みを知ってもらうことに繋がると 생각합니다。

幅広い年齢層に知ってもらうために地域の各種イベントやスーパーなどで販売実習やポスター掲示を行いながら学校案内のダイジェスト版を作成して配布することで情報発信し、学校ホームページへ繋がることでSNS以外での情報発信をすることができると考えています。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

私は現在専攻している施設野菜Ⅱ部門で主にイチゴやメロンを中心に学習しています。メロンのプロジェクト学習として品種による栽培方法の生育差について学習しています。地域の課題解決やSDGsにおいては地域で発生する汚泥を堆肥化したものを使用して栽培実験に取り組んでいます。企業と連携して汚泥堆肥の割合や栽培品目を変えてプランターで栽培実験を行っています。この研究を行うことで、地域で発生する汚泥問題や肥料の枯渇問題などの解決につなげることができると考えて現在研究を行っています。また、汚泥の処理を行っている浄化センターのイベントに参加し、生産物の販売を行いながら汚泥堆肥の活用について研究していることをパネル展示など行っています。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

私が専攻している施設野菜Ⅱ部門では日専連と連携してInstagramを利用して「宮農応援団」として外部に向けて学校で行っている学習を発信しています。これからはさらにTikTokやBeRealなど若い世代に人気があるアプリを取り入れ、身近な存在にあることを知ってもらいたいと考えています。

また、みやぎ生協と連携して学校でとれた野菜や果物を使ってスイーツを作り販売する活動を行っています。その際に私達が心がけていることは見た目が映えるスイーツを作って流行させることで興味を持ってもらえるようにすることです。スイーツをスーパーで販売する際は報道発表してマスメディアに取り上げてもらえるように取り組んでいます。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立栃木農業高等学校  
環境デザイン科 2年 滝沢聖那

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

栃木農業高校では情報発信の方法として学校ホームページのほか、地元新聞への掲載（栃木市内の小中学校の給食に本校で生産した食材を使用した栃農給食 DAY、手打ちそば部の全国大会での活躍）やテレビ取材（所さんの目がテン）などがある。現段階でも地域への情報発信は十分行われているが、より一層農業高校の魅力を伝えるためには多種多様なツールを用いて対象者別の情報発信をする必要があると考える。

また、本校では取り組んでいないが、他県で行われている学校公式 SNS（X、Instagram 等）の活用について、その効果や活用方法について今回のクラブ員代表者会議を通して学んでいきたい。



図1 栃農給食 DAY



図2 テレビ取材

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

栃木農業高校では地元農家と連携し地域の特産品を PR するための活動（栃木市の特産品であるゆずを使った商品の開発、広報活動）や地域の自然環境、絶滅危惧種を取り戻す活動を行いSDGsへの貢献に取り組んでいる。これらの活動は地域の方々と連携することによって成り立っているため、学校内だけでなくさまざまな人の協力が重要となる。そのため、農業高校生が地域とつながりを持つ機会が増えることが求められる。一方で、活動や取り組みを継続したものにするために後輩たちにどのように引き継いでいくかという点が課題であり、他校の状況を知り、本校に反映させていきたい。



図3 地域連携活動



図4 地域貢献活動

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

栃木農業高校では、スマート農業の実践例として農業用ドローンや水田の水位センサー、牛の行動把握センサー等の ICT 機器が活用されている。Society5.0 といわれる今の社会は AI や ICT 技術が大きく発展し、その技術が農業にも使われている。しかし、農業に関わりのない若者はその内容を知らない人がほとんどだという現状がある。若者への興味を促すためには、これまでの農業に対するイメージを大きく変えることが重要であり、若者が身近に使う SNS など親しみやすい方法で現在の農業について情報発信を行う活動をしていくべきだと考える。



図5 農作業の省力化

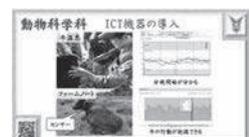


図6 ICT 機器の導入

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立大泉高等学校  
生物生産科 3年 大川原 睦歩

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

・各学校で行っている様々なイベント(大泉高校の場合ならば毎年春や秋に行われる泉農フェア)などで地域の人たちに呼びかけて交流して魅力を伝え、農業クラブの様々な大会の活動やプロジェクト活動の内容を町の人たちに紹介して、多くの人に見てもらい、魅力を知ってもらえるようにする。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

・まずは自分たちの地域にどのような課題があるのかを1人ひとりが意識して知ることが大切だと思う。SDGsとはどのような課題が理解し、地域の課題との関連を分析できるとより良い活動になる。それを踏まえた上で、現在行っている活動や学習に取り組むことで課題解決能力を身につけ、一つひとつ解決していくことによってSDGsにつながると考える。また、第1分科会でも述べたように地域の人達と交流して伝えることにより、全員が課題解決への意識が高まるのではないかと考える。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

・今の農業の課題は高齢化や人手不足が挙げられる。農業において若者が少ない理由は、長時間労働による肉体的な負担や天候に左右され安定した収入が得られないからだと考える。それを改善する「スマート農業」により変化している働き方や、農業の魅力や大切さ、面白さを知ってもらうことが必要だと考える。スマート農業によるロボットの技術や人工知能を使った技術などを用いて作業効率を上げる、また、スマート農業による経営の大規模化や農作物のブランド化などの農業の魅力を、SNSなどを用いて若者たちに発信する活動をしていくべきだと考える。

### 特色ある活動や単位クラブのPR

生物生産科では、生物と自然環境を最大限に活用し、生きる喜びや生命の尊さを学び、技術革新に対応できるスペシャリストになるために必要な能力や態度を育てます。また、2年次には「園芸」「ガーデニング」の2コースに分かれ活動しています。

### 代表者会議への参加の抱負

全国から農業クラブの代表者が集まって会議を行うのでとても緊張していますが、1年に1度しかない大事な行事なので自分の意見をしっかりと持って発表し皆さんの意見を聞いて学びの視野を広げたいと思います。またこの会議で学んだことを今後のクラブ活動で活かしていきたいと思っています。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立流山高等学校  
園芸科 2年 金久保 悠海

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

SNS以外で農業高校の魅力を伝えるには、イベントを利用することがいいと考えます。

高校ならではのイベントの文化祭を活用することです。文化祭は在校生だけでなく、学校外の地域の方や、保護者、受験を希望する中学生など幅広い年齢に方々に参加していただくことのできるイベントであると考えます。

文化祭で農業体験をしていただくことで、楽しみながら農業に触れ、農業の魅力を発信して行うことができると考えます。

次に学校見学会をたくさん実施することです。実際の授業の様子を見学していただくことで、農業高校のカリキュラムを知り、どのような内容を学習し、授業や実習の取り組む姿勢や農業を学ぶ上での留意点、その学びの中での達成感などを見ていただくことで、農業高校の魅力を具体的に伝えることができると考えます。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域の課題解決やSDGsに貢献するには初めに地域の方々へリサーチを行い、何を問題としているのか、どんなことが課題であると感じているかを把握することが必要になると考えます。

その上で、持続可能なプロジェクトを計画します。環境、経済、社会のバランスを考慮したプロジェクトであることが大切であると思います。

具体例として、再生可能エネルギーの導入を検討することをテーマとしたときに、設置する土地の環境に配慮しているか、設置にかかわるコストはどこが負担するか、地域の風土や歴史、そこに住む人々の思いと合致しているかなどが考えられ、それらの課題をクリアして初めて実行できると思います。

多くの方々へ理解を得るためには、リサーチをしっかりと実施すること、啓発活動を実施すること、教育プログラムやワークショップの開催を行い、地域全体で理解を深め、一致団結して問題に取り組むことがSDGsの目標を達成していくことにつながると考えます。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

若い世代に農業に興味をもってもらうためには、SNSを活用するのが最善だと考えます。

若い世代はYouTubeやInstagramなどに触れる機会が多く、スマート農業の成功例や最新技術の動画を作成し、アピールすることで、興味を持ってもらえると考えます。

動画もショート動画などを活用することで、見るハードルを下げ、興味を引きやすくなる工夫を行うことも大切だと感じます。

これをきっかけにインターンシップやグリーンツーリズムなどに参加する人を増やし、農業の活性化に繋がっていくのではないかと考えます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立農業高等学校  
都市園芸科 3年 柄本 龍信

## 1 第1分科会

**農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

私達の高校は、東京の中心の府中駅を降りて徒歩5分程度の場所にあるので、学校自体の認知度はあると思います。毎年11月に行われる文化祭では地域の人が訪れます。そのため5つの学科の魅力が十分に伝わる機会であるといえます。ただ、農ク自体の知名度は少なく、文化祭で展示を行ってもあまり人が来ないので、文化祭のパンフレットなどの1ページを使い、農クの展示を宣伝や、展示に来ない人向けに、農クの活動を記して配れば、文化祭という大きなイベントの中で、高校自体の魅力も伝わり、農クについて知ることが出来ると思います。文化祭に来ない人に対しては、府中駅近くにあるため、張り紙などを作り、「農業高校はこんなことをしているんだ」というPRをすれば、文化祭に来なくとも、会社員の方や駅を利用する人の目に入り魅力を知ることができるはずです。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

農業高校の都市園芸科では主に農作物の栽培について学んでいます。その実習を行う中で、形が悪くて販売できないものを処分してしまうことが多くあります。その食べられるけれど食べずに捨ててしまう食材を食品科学科で加工したり、食物科で料理したりしています。また、緑地計画科では、ケヤキプロジェクトという府中市のシンボルでもあり、国指定の天然記念物に指定されてある「馬場大門のケヤキ並木」を守り継いでいく活動をしています。近年このケヤキ並木は、寿命を迎えたり台風などで倒れたりする木が増えています。そこでケヤキ並木から落ちた種から苗木を育てることで若返りを図る活動を2017年の秋から開始し現在も順調に成長しています。このような活動をほかの場所や学校でも行っていけば、陸の豊かさを守りつつ住み続けられる街づくりができると思います。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

農業は、きつい、危険といったイメージがありますが、若い世代に興味を持ってもらうにはこれらを減らしていくことが大切だと思います。農業高校ではスマート農業に力を入れていて、リモコン草刈り機を導入しています。乗用草刈り機などで考えられる転倒などの事故が起きにくいため生徒や新たに農業を始めた人でも比較的 safely に作業できると考えます。また、自動芝刈り機を導入することにより高さの調整することが難しい芝刈りが自動で行われます。そのため、技術を求められることなく、自動で作業が行われるため他の作業の時間を作ることができます。

農業高校では水耕でトマトを栽培し、東京都GAPを取得しています。水耕栽培の溶液の管理は全て機械で行われ、農薬や作業日時はアグリハブというアプリで管理しています。地域の催し物で販売することで高校生が栽培した、東京都GAPといった付加価値をつけながら販売することで多くの世代が農業について興味を持ってもらえると思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡立田方農業高等学校  
生産科学科 2年 仁科 千鶴

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・農業高校の魅力を発信するには、農産物を購入してもらうことが最も効果的だと考える。学校での販売に限らず、商業施設や駅、道の駅、サービスエリア等幅広い年齢層の方が利用される施設での販売活動が効果的だと考える。
- ・例えば本校で実施している「田農マーケット」や「田農祭」への参加を促し、農業高校の魅力を体験してもらうことが考えられる。このような行事に興味を持ってもらうため、近隣住民へは、商業施設でのポスター・チラシの掲示や、回覧板を用いた宣伝活動が考えられる。
- ・種まきや収穫体験、動物ふれあい体験、調理や食品加工体験のイベントを企画し、参加者と交流することで、人づてで広がっていく魅力もある。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・スマート農業を取り入れることで農作業の負担を減らし、従来の農業の「長時間にわたるきつい労働」というイメージを払しょくすることをアピールすることで、農業従事者や後継者の不足といった地域課題の解決につながる。
- ・現在行っている「温泉水の施用による高付加価値野菜の生産」のプロジェクト活動では、栽培方法を確立することで、農業者のみならず観光事業者や飲食事業者などさまざまな場所で栽培が可能となる。これによって地域資源を活用して、新たな観光資源の創出につながり、地域の観光客減少の課題解決につなげることができる。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・農業に対して、3K（きつい・汚い・危険）のようなイメージを持っている若い世代は多い。そのため、スマート農業などを用いたこれからの農業を知ってもらうことが、若い世代の興味を引くことにつながると考える。
- ・仕事としての農業の魅力は、頑張った分だけ給料に反映されることや、スマート農業で作業効率が上がり、作業リスクが減少すること、自営業では自分の予定で仕事を進められることなどがある。これらをインフルエンサーや企業とコラボしながら、SNSで発信することで若い世代の興味を引くことができると考える。
- ・小学生や保育園児等を対象に、農業体験活動を行うことが、興味を持つきっかけとなる。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県佐久平総合技術高等学校  
食料マネジメント科 3年 佐藤陸翔

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

地域のイベントへ参加して子供からお年寄りまで幅広い年齢の人たちへイベントを通して農業高校の魅力を発信することが大切だと思います。私たちの学校では、農業クラブ員で地域のイベントに積極的に参加しています。イベントでは学校産の加工品や農産物の販売、学校産の農産物を使った豚汁の無償提供などをしてきました。また展示ブースには農業高校の取り組みや活動をまとめたパネルを設置してPRしてきました。イベントには地区内外や他県からの参加者も多く、子供からお年寄りの方まで幅広い方に農業高校の魅力を発信することができました。

イベントを通して実際に私たち農業高校生と地域の方々が直接会話し交流することで農業高校の魅力が伝わると考えます。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

私たちの学校では、3年次の科目「課題研究」で個人またはグループごとにSDGsと関連付けた研究テーマを設定し、課題解決に向けたプロジェクト型学習を行なっています。校是である「明日の佐久平を創る人物たれ」を実現するため、テーマ設定にあたっては「地域の課題」を吸い上げることを意識しています。そして、実際に地域との連携や、地域資源を活用した取り組みを行なっています。社会とつながる取り組みをすることで、より実社会の困りごとへの貢献、そして農業クラブ員の主体性の向上などにつながっています。

これらの取り組みは、文化祭の展示やSDGs宣言、研究集録への掲載、課題研究発表会などで、広く活動を発信しています。このように、お互いの活動を共有することや、外部に活動を発信することがよりSDGsへの貢献につながっていくと考えます。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

私たちのように農業高校生としてスマート農業についての知識や技術を学び農業に携わっている者は農業に対するイメージが変わりつつあると思いますが、農業に全く関わりのない人は農業に関して昔ながらのイメージが強く興味関心がない人も多いと思います。しかし、農業は人間が生きていくうえでなくてはならない産業です。私たちの学校では総合技術高校として工業科の生徒と共同で課題研究に取り組んでいます。困っていることを互いの知識技術で助け合いながら効率的により良いものを生産することにつながっています。総合技術高校として科を越えて協力して活動し互いの強みを生かし学習を深めていけることが良さだと思います。課題研究発表会では地域の多くの中학생に活動を発信してきました。若い世代に若い世代である高校生がスマート農業を通して実際に伝えていくことが興味関心を持ってもらうことにつながると考えます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立稲沢・稲沢緑風館高等学校

園芸科 2年 鈴木 悠平

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

農業高校の魅力を伝えるには身近なところから興味を持ってもらうことが大切だと思う。本校では学校販売(いきいきマーケット)、市内での移動販売や地域の保育園児を学校に招き、サツマイモの植え付け・収穫までの農業体験を行っている。さらに、無農薬の作物を地域の学校に提供し、農業高校生とふれあい、農業高校の特色を発信している。しかし、名古屋などの農業高校のない地域では、このような活動に出会う機会がない。そこで、農業が身近にない地域こそ、販売や農業体験を通し農業高校の魅力を伝える必要があると考える。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

農薬の大量使用により、水田・用水路が汚染され、生物多様性が失われつつある。そこで、無農薬での水稻栽培の技術を確立し広めることで、失われていた生物多様性を取り戻せると考える。無農薬で起きる問題をクリアするために実験田で実験を行っている。冬期湛水を行い、冬の雑草抑制があると分かった。殺菌、殺虫剤を使用しないため、風向き側を条間30センチ、株間を15センチにすることで収量を確保することができ、植物を元気にすることで病害虫を予防することにもなる。水田での無農薬栽培により用水路での生物多様性を取り戻せることでSDGs14、15の目標を達成することにつながる。そのことを立証するために実験田の横に擬似的な用水路を作り、課題に取り組む計画である。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

本校では、梅壇保育園の園児を学校へ招き、サツマイモの植え付けや収穫体験を行っている。また地域で参加者を募り、参加者に栽培管理方法を指導するといった、ふれあい農園も実施している。園児たちは体験活動を楽しみに来校し、サツマイモの収穫体験では、はしゃぎながら楽しんでいる。一方、若い世代の多くは農業に対し「重労働」「汚れる」「儲からない」といったネガティブなイメージを持たれている。そこで、県から導入された統合環境制御システムを活用し、ふれあい農園の内容に組み込むことはできないか。農場へ行かずともタブレットやスマートフォンなどで気軽に楽に参加できることを周知し、まずは農業に興味を持っていただき、実際に体験していただくことが大切だと考える。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立明野高等学校  
生産科学科 2年 辻井 悠斗

## 1. 第1分科会：「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

まず一つ目は「地域イベントへの参加」です。地域の祭りや農業関連のイベントに参加し、農業高校の取り組みを紹介することで、幅広い世代に情報を届けられるのではないかと考えました。

例としては、昨年10月の産業教育フェアのイベントで農業高校生が、お客様に直接販売したことで、どこでどのように作ったかを高校生の口で伝えることができ、PR活動にも繋がりました。

二つ目は「広報誌や新聞の発行」です。学校の取り組みや生徒の活躍を紹介する広報誌を発行し、地域の公共施設や関連企業などに配布することで、幅広い層に情報を届けられるのではないかと考えました。また、写真やインタビューなども活用することで、農業高校の魅力をより効果的に伝えることができるようになるのではないかと考えました。

三つ目は「地域メディアとの連携」です。地域の新聞やラジオ、ケーブルテレビなどのメディアと連携し、農業高校の特集記事や番組の作成を提案することで、地域に向けた情報発信を行えるのではないかと考えました。

## 2. 第2分科会：「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校がある三重県伊勢市は近年の農業従事者の高齢化や担い手不足、食品製造廃棄物の処分費などが課題となっています。本校では、以前より地元地域・企業と連携し、これらの課題解決につながる活動を行っています。例としては、三重県伊勢市横輪町の地域活性化のために昨年度カステラを作りました。このカステラは、横輪町の特産品「横輪芋」のパウダーを使用しており、地域の方から栽培法を教えていただき、本校で高校生が生産から加工、販売までを行う6次産業の取り組みを行いました。

また畜産業においても、飼養コスト削減や飼料自給率の向上、食品廃棄物の処分費削減などの観点から、地元の食品関連企業から排出される食品製造廃棄物のエコフィード給与の取り組みを行いSDGsの活動に貢献しています。これからも、高校生がこのような活動を通して地域の課題解決や、SDGs活動に携わっていきたいと考えています。

## 3. 第3分科会：「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

若者の農業に対する悪いイメージを払拭できるような活動をすることが大切であると考えました。例として、天候に左右され安定的な収益が得られないことや、初期費用が多くかかるということなどです。しかし、これらはスマート農業に関する機器を導入したり、国や自治体からの支援を受けたりすることによって解決できると考えます。こういった情報を発信していくとともに、農業高校の実習でも新しい農業の形を広く取り入れていくことが必要であると考えました。

また、若い世代に興味を持ってもらうためには、小・中学生を対象とした農業体験ができるイベントの開催や出前授業を行い、農業に興味を持ってもらうことで農業高校を目指すきっかけを作ることや、専業で営まれている農家さんのもとで職場体験をさせてもらうこと、SNSなどで農業高校の様子の動画配信をしていくことで、より多くの人に関心をひくことができるようになると考えました。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 大阪府立豊中高等学校能勢分校

総合学科 2年 鳥谷美波

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

まずは【オープンキャンパス・体験イベントの開催】です。この情報発信方法をされている高校は多いと思います。実際に訪れることで、農業の楽しさや学校の雰囲気や学校を直接体験してもらえるので、子供から大人まで幅広い年齢層が参加できる企画をすることで、地域間で情報共有といった広まりを見せ、宣伝効果につながると考えます。例として私達の高校では養蜂と果樹の体験をJAさんと協力し、学校の名前を入れて広告をだしてもらっています。企画をSNS・ポスター以外で案内することが大きな宣伝につながるのか気になるとは思いますが、それを補うために【地域コミュニティとの連携】を図ることで地域の市場での展示ブース設置・協賛イベントを企画すれば、地域密着型の情報拡散が可能であると考え、地域の農家や企業、自治体と協力して、地域全体で農業高校の魅力を発信しようとしています。また私たち高校生はポスターなど作るだけではなく【訪問活動】をさせていただき、地域の小学校・中学校を訪問しプレゼンテーションを行い、若い世代へ農業の魅力を伝えることで早い段階からの興味を促せるのではないかと考えています。このように、これら複数の手段を組み合わせることで、SNSに限らず多方面から農業高校の魅力を伝え、より幅広い層に知っていただけたらと考えました。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

私たちの学校は総合学科であり、課題探究の授業のテーマとして【誰かの何かを解決する】というものがあり、地域の人の問題を市役所の方や、農家の方とお話することで何がこの町にとって問題なのかを自分事のように考え、授業の中での学習を活用して研究を行います。農業高校とは少し違うため1年生の頃から研究に携わることは難しいですが、2年生より持続可能な循環型農業を目指すことは結果的に農家の多い能勢町の地域の方の問題を解決することだととらえ、誰のための何か？を考えて研究すること自体が地域の課題解決・SDGsにつながるのでは？と考えます。(現在の3年生はドローンでの育成調査・養蜂とレンゲ米を使った地域おこしの研究をしています。)

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

何事もまずは体験してもらうことが大切かと考えます。実践的なワークショップを開くことで、実際の農場でスマート農業技術を体験する機会を提供し、ドローンを使った作物管理、データ分析の実践を通じて、農業がただ土をいじる仕事ではないことを知ってもらえれば、農業に対する

【3K】も印象が薄まると思います。また、この岩手県大会のように、競技会を開き、技術やアイデアを競うイベントを通じて、自然と学びながら楽しめる環境を提供することで、若い世代に興味をもってもらえるのではないかと考えます。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立瀬戸南高等学校  
園芸科学科 3年 田口 紗彩

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

【現状】学校ではHPやインスタでの日々の活動を情報公開しているが、受験を控えた中学生などの若い世代は農業に興味がないとなかなか見てもらえない

【対策】オープンスクールや中学校訪問などの機会を生かしてプレゼンをするなど認知度を高める。

学校を知ってもらえるようなポスターや紙芝居、漫画などの若い人が興味をもちやすい広告を行う。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

【現状】授業の中で地域との交流は行っているが、長年同じ団体との交流が多く、新しい地域との繋がりが希薄。

実習で出た農業残渣や規格外農産物を捨てている。

【対策】農業残渣の堆肥化や、規格外農産物でも調理加工すれば使えるものもあるため、飲食店への流通経路を確保すれば食品ロスを解決できるうえ、地域との交流にもなる。

校内の農産物をただ販売するのではなく、メニューを開発して文化祭や地域の催しで販売しアピールにつなげる



## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

【現状】農業従事者の高齢化や担い手がおらず、耕作放棄地はどんどん増えている

農業の効率化のためのスマート農業だが、スマート農業を導入している所を知らない、少ない、導入のコストが高い、高齢者はなかなか使いこなせない。

【対策】農業高校で積極的にスマート農業の機器を導入し、TikTokやインスタなどのSNSを通じて発信する。

農業高校同士でドローンの操作技術を紹介したり講演会を実施する

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 愛媛県立伊予農業高等学校  
生活科学科 2年 高橋 こころ

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・チラシやパンフレットを利用し、学校や小規模施設でイベントを実施する。  
チラシやパンフレットのみでは情報発信が不十分になり、年齢層も限られていく可能性が高いと考えられる。しかし、それらを補うことができる行事等を行うことで情報発信力が強まり、多くの人に参加してもらうことで更に広く伝わるということが期待できる。
- ・農業の実習で作った作物を地域の人に販売する。  
作物の状態や衛生面に注意しながら行わなければならないが、自分で野菜を作った場合は許可は必要ないので販売が可能となる。(他人が作った場合は「食品衛生責任者」の資格と「野菜果物販売業」の届け出が必要になる。) 他学校でも自分達の作物を販売するイベントが開かれているので、それに伴い農業高校でもそのイベントを取り入れても良いのではないかと考えられる。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・身近なところから活動する。  
例えば、森林伐採の問題について考えた時、森林伐採と聞いて私達ではどうすることもできないと考えがちだが、直接関われなくても間接的に関わることは私達でも可能である。まず、FSC 認証マークが付いた商品を選ぶことで、適切に管理されたを保護することにつながり、無駄に森林を伐採する必要がなくなる。陸の資源問題は最大の課題となっている為、海だけでなく陸も課題が多く残っているとみられる。そして、私達が過ごしていく上で一番身近な対策といえば、ポイ捨てをしないことである。他にも対策はあるが、そのことについて調べ、実行するのもSDGsの取組に近づく一歩(行動)になるだろう。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・農業体験を実施する。  
まず、チラシやパンフレットなどで宣伝をするのだが、昔の農業と今の農業で変化したこと、新しく取り入れたことを比較しながら書くと今の農業がいかにスマートになったかが理解されやすくなる。また、若い世代だとスマホやロボット等に興味がある人が多いと考えられるので、農業で使用される機械を元に魅力を発信することで農業について興味を持たせ、多くの人に実際に体験してもらうことによって更にスマート農業や経済農業に対して関心・意欲が湧いてくるということが期待できる。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 長崎県立諫早農業高等学校  
生活科学科 2年 城島 彩乃

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

〈現 状〉・学校公式Instagramの状況を確認した。

・地域と連携した活動をピックアップした。

(例) 商品開発・地域での販売会、ふれあい動物園、田んぼアート、地域開放講座

〈問題点〉・地域連携では私たちが学習する場面が多く、情報発信までに至らない。

・情報発信量、情報発信方法が限定的である。

〈具体策〉・ポスター制作や地域の回覧板への掲載など、地域の方を意識した取り組みを行う。

・地域連携を充実させるために、日々の学習に一生懸命取り組み、専門性を高めることが必要だ。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

〈現 状〉・農業クラブの活動とSDGsとの関連について調査した。

農業祭、ボランティア活動・・・地域連携を通してゴール11（住み続けられるまちづくり）を目指す。

各種発表会、専門部の活動・・・学習を通してゴール9（農業と技術革新の基盤を作ろう）を目指す。

〈問題点〉・私たちの活動はSDGsにつながるものが多いが、これを私たち自身が認知していない。

・限られた人だけの活動となっている。

〈改善策〉・SDGsのゴールを教室や校内に視覚的に表示し、意識を高める。

・プロジェクト活動の研究成果を、もっと多くの地域で活用してもらう。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

〈現 状〉・本校には7つの学科があるが、スマート農業や農業経済に興味・関心が低い生徒が多い。

〈具体策〉・若い年代が興味・関心を持ってくれる「ドローン」・「ロボット」といったものを活用すると良いのではないか。

・企業と連携して「体験会」や「展示会」などのイベントを行い、実際に触れる機会を設ける。

・ドローンやロボットを「導入前」と「導入後」の比較を、スライドやグラフを用いて分かりやすく提示する。(統計学)

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 兵庫県立播磨農業高等学校  
畜産科 3年 長澤 作心  
畜産科 2年 塩崎 咲月  
畜産科 2年 坪田 知佳

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・ポスターなどを張り、積極的にイベント参加を促す。
- ・新聞等に学校活動を掲載してもらい、情報発信を促す。
- ・チラシやDMなどを通して学校情報を知らせる。
- ・販売会に来てもらう。
- ・ケーブルテレビに学校紹介を流してもらう。
- ・イベント通知メール設定を登録してもらう。

まずは学校に来て空気を味わってもらうことが一番の情報発信につながるのだから、発信していく必要がある。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック連盟 青森県立名久井農業高等学校

生物生産科 3年 川守田 しずく

生物生産科 3年 和田 歩望

環境システム科 3年 宮木 斗摩

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

本校の所在地である青森県南部町の広報誌に、本校のコーナーを設けてもらっている。月1回のペース南部町民の皆さんに、現在学校で取り組んでいる事や行事について知ってもらえる機会を得ることができている。また、情報発信の方法として、メディアの活用も有効だと考えている。新聞や地元テレビ局などはもちろんであるが、リーダーシップ等にも掲載・報道してもらえる様に、活動に特色を持たせる創意工夫をするように努めている。

メディア「読むものではなく、掲載されるもの」という意識で活動し、メディアが取材しなくなる農業クラブ活動を展開していく必要がある。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

「名農版 SDGs モデル」を作成している。現在それぞれの研究班で行っているプロジェクト活動が、SDGs17の目標のどの項目に当てはまっているかを一覧にし、クラブ員が意識づけるように可視化している。その他にフィールドワーク等を実施した際には、振り返りを感想などの文章に起こすだけではなく、課題を見つけ出すことも大切にしている。SDGsのどの目標に当てはまり、どういった活動が必要になるのかを考える機会を創出している。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

人口減少、少子高齢化、担い手不足、農家の高齢化など、学校のある南部町は課題先進地域と言える。スマート農業や農業経済は課題解決の手段になるものと考えている。下記の活動を行った。

まず、クラブ員から農業に関する課題を集めた。その中で、スマート農業や農業経済で解決できそうなものを選び、対となる専門用語を探し、得られた専門用語に触れる学習体験を先生や課題研究に提案し、実際に使いこなす経験値をクラブ員一丸となって高めた。

### 【取り組み内容】

ラジコン型草刈りロボットによる省力化、POS システム：エアレジによる販売改善、農業情報システムによる栽培環境制御、定点カメラによる農作物の変化の見定め、クラウド気象観測機による気象データの記録蓄積、アシストスーツによる身体的負担の軽減、買い物弱者を支援する移動販売車など

※詳しくは会議資料の第3分科会第7会場事例発表【東北ブロック】の発表資料を参照

# 参加者課題レポート

## 第1分科会 第3会場

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまう SNS の他に、より多くの人に SNS 以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第3会場	鹿児島県立鹿屋農業高等学校	宮城県農業高等学校

## 第1分科会 第3会場

### 【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	山形県	庄内農業高等学校	食料生産科	2	庄司 心優
2	栃木県	那須拓陽高等学校	農業経営科	2	後藤 未空
3	埼玉県	川越総合高等学校	総合学科	2	松木田 このみ
4	千葉県	茂原樟陽高等学校	農業科	3	蜂谷 湊大
5	神奈川県	吉田島高等学校	都市農業科	3	佐藤 舞
6	静岡県	磐田農業高等学校	生産科学科	2	土屋 沙気
7	長野県	下伊那農業高等学校	アグリサービス科	2	清水 未夢
8	愛知県	田口高等学校	林業科	2	福山 朝陽
9	三重県	伊賀白鳳高等学校	生物資源科	3	岡野 優心
10	鳥取県	智頭農林高等学校	森林科学科	2	山根 充希
11	岡山県	井原高等学校	地域生活科	3	池尾 海斗
12	福岡県	福岡農業高等学校	食品科学科	2	辻 彩花
13	沖縄県	北部農林高等学校	熱帯農業科	2	吉田 有輝

### 【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	鹿児島県	鹿屋農業高等学校	農業科	3	長峯 煌剣
15	鹿児島県	鹿屋農業高等学校	園芸科	3	原口 優愛
16	鹿児島県	鹿屋農業高等学校	食と生活科	2	前田 真奈美

### 【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	宮城県	宮城県農業高等学校	生活科	2	川村 梓
18	宮城県	宮城県農業高等学校	農業科園芸科	1	阿部 稜
19	宮城県	宮城県農業高等学校	生活科	1	小松 杜愛

# 「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまう SNS の他に、より多くの人に SNS 以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

九州ブロック 鹿児島県立鹿屋農業高等学校  
農業科 3年 長 峯 煌 剣  
園芸科 3年 原 口 優 愛  
食と生活科 2年 前 田 真奈美

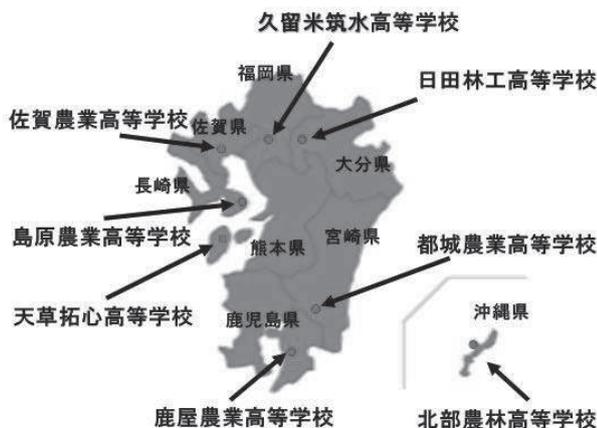
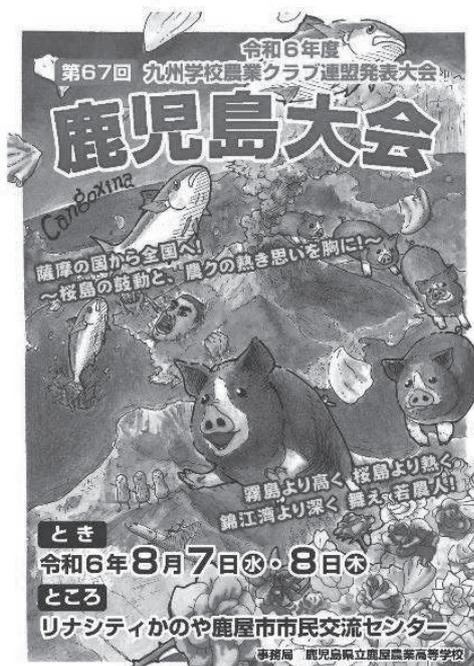
## 1 はじめに

### (1) 九州学校農業クラブ連盟の紹介

九州学校農業クラブ連盟は昭和 33 年 10 月に熊本県と沖縄県を除く九州 6 県で「九州ブロック予選会」を開催したのが始まりです。その後、昭和 34 年に熊本県、昭和 47 年には本土復帰した沖縄県が連盟に加入し、現在に至ります。

今年度の各県連事務局は大分県立日田林工高等学校、宮崎県立都城農業高等学校、沖縄県立北部農林高等学校、福岡県立久留米筑水高等学校、長崎県立島原農業高等学校、佐賀県立佐賀農業高等学校、熊本県立天草拓心高等学校、鹿児島県立鹿屋農業高等学校です。クラブ会員数は、大分県 772 名、宮崎県 1,586 名、沖縄県 2,118 名、福岡県 2,237 名、長崎県 1,467 名、佐賀県 1,146 名、熊本県 2,469 名、鹿児島県 1,127 名、総勢 12,922 名と全国でも比較的大きいブロックです。

「九州はひとつ」の合い言葉をもとに、お互いに切磋琢磨しながら農業クラブ活動に取り組んでいます。九州のクラブ員が団結し、日本の未来を担う大きな希望として日々成長する、それが九州連盟です。



(2) 本年度九州学校農業クラブ連盟事務局校「鹿児島県立鹿屋農業高等学校」の紹介

本校がある鹿児島県鹿屋市は、大隅半島に位置し、かごしま黒牛やかごしま黒豚、サツマイモ、スプレーギクなど多くの農産物を生産する農業地帯です。本校は、明治28年に創立され、来年度には130周年を迎える伝統のある学校です。

6学科設置され農業について広く学べる学校です。文部科学省指定農業経営者育成高等学校として、地域の農業を担う人材育成に努めています。

学科の詳細は、表のとおりです。



農業科	鹿屋市の基幹作物を軸として、サツマイモと米でJGAPと有機認証を取得し、持続可能な農業の学習を迫及しています。
園芸科	植物バイオを軸としてサツマイモ基腐病対策プロジェクトチームとして活動したり、植物工場を立ち上げたりして農業の最先端を進みます。
畜産科	「肉用牛・酪農・養豚・養鶏」のすべてを学び、採卵鶏のJGAP取得、昨年度の和牛甲子園最優秀賞と実践を重ねて高い技術を身に着けます。
農業機械科	スマート農業で注目される農業機械の操作や構造を学び、さらに機械加工の技能検定で高度な技術を身に付けます。
農林環境科	自然環境のスペシャリストを目指し林業・土木・造園を学びます。各種資格で即戦力を身に付けます。
食と生活科	農業生産のその先、食品加工と家庭生活について学び、地域食材を生かしたプロジェクトで学習を深めています。

2 九州学校農業クラブ連盟リーダー研修会の報告

九州学校農業クラブ連盟では、7月24日(水)～26日(金)に2泊3日の日程で「第58回九州学校農業クラブ連盟リーダー研修会」を私たちが通称おおすみくん家と呼ぶ国立大隅青少年自然の家で実施しました。

1日目は、アイスブレイクとしておおすみくん家ビンゴゲームを行い、お互いのことを知り、信頼関係を築きました。その後分科会として、クラブ員代表者会議のテーマについて各県の取り組みや考えを出し合いました。2日目は、朝は分科会を行い、前日に出し合った意見をもとに解決策を話し合いました。昼は、研修視察として、桜島ビジターセンターを訪問し、桜島の

噴火の歴史や自然について学びました。桜島は、鹿児島に広がるシラス台地や錦江湾と関わりの深い多種多様な生き物の生息する場所であり、火山観測体制と防災対策により活火山の周囲でも安全に生活できる豊かな大地で農業生産が盛んな場所でした。夜は、星座観察の中で多くの仲間と語り合いさらに親睦を深めました。3日目は、全体会で分科会の報告を行いました。短い時間でも活発な協議ができ、九州ブロックの結束力がより強くなり、農業クラブが有意義な活動であると実感しました。



### 3 九州学校農業クラブ連盟での協議内容

#### (1) 実態

- ア 学校行事や地域の行事を通して、高校で作った作物を販売している。
- イ ボランティア活動で地域との連携は出来ている。
- ウ 農業高校での学習内容や活動が地域全体に伝わっていない。



#### (2) 問題点

- ア 販売会に来てくれる人が限られている。
- イ 農業高校に行きたいという子ども達が少ない。
- ウ 情報発信が学校周辺だけになっている。
- エ 宣伝不足である。

#### (3) 問題点解決のための取り組み

- ア 校内活動だけでなく、校外でボランティアをする代わりに露店を出店させてもらう。
- イ 小さい子どもたちに向けて、販売会と一緒に、農業体験の出来るブースを作って子どもたちに興味をもってもらおう。
- ウ 販売会で農業クラブの活動や農業高校の魅力をQRコードにしたものを袋やチラシに載せて宣伝する。
- エ 道の駅に自分達で作った花を使って、庭園を作る。
- オ 私たちの専門性を高める。

#### (4) まとめ

#### ア 中学生以下

出前授業や体験活動・販売会での農業体験ブースでPRする。

例：樹木の伐採，食育，物作り，田植え，収穫など

#### イ 在学生

日頃の学習に一生懸命取り組み，私たちの専門性を高めた上で地域のイベントや販売会などに参加する。

#### ウ 地域の方

回覧板にポスターやパンフレット・学科新聞を毎月発行し農業高校の活動を知ってもらう。

魅力を知ってもらうためには，まず，私たちの専門性を高めることが重要です。そうした上でチラシの作成や販売時に説明をすることで魅力を伝えやすくなります。体験などは家族で参加してもらえば，回覧板などを利用した場合でもこれまでより多くの人に注目していただけるはずです。このように，私たちが積極的に活動を広げることで，農業系番組の取材などにつながりより広く情報発信をする機会が増えると考えました。



#### 4 おわりに

九州の農業クラブ員と農業高校の魅力を発信するための協議を行う中で，私たちが農業クラブ活動とおして多くのことを学んでいることに気付かされました。しかし，私達は，その魅力を十分に伝えることができていないのではないかという意見も出され，日頃の学習に一生懸命取り組むことの大切さを自覚できました。SNSで情報を発信することは手軽ですが，情報発信をするために工夫を凝らし，より伝わりやすい内容で発信することも大切なので，農業クラブ活動をおしてより深く学ぶことがその第1歩となると九州の仲間と確認できました。

本校においては今年度よりホームページとブログに加え，インスタグラムの開設も行っています。手軽なSNSを活用することで素早く多くの人に本校の良さが伝わればよいと感じています。そのためにも，校内外の活動へ積極的に参加し，私たちが楽しんでいるところを多くの人に見ていただき，本校のことを応援していただければよいと考えています。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 山形県立庄内農業高等学校  
食料生産科 2年 庄司心優

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

私は地域の子供～シニアまで幅広い世代と一緒に農業を体験してもらう機会を増やし、農業高校生との交流を増やすことで農業高校の魅力を発信することができますと思います。

本校の取り組みとして幼稚園児との田植え体験、小学生との野菜栽培、中学生の農業体験等、農業を通して庄内農業高校の楽しさを発信しています。また、本校の名物である「庄農うどん」は学校という垣根を越え、地域や企業と連携を図りたくさんの方に食べていただくことで学校のアピールはもちろん地域活性の役割も担っています。

しかし、農業の一部分だけを体験してもらうより播種から収穫まで1年間を通して経験できるような体験ができると、より魅力を伝えられるのではないかと考えました。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

初めに地域の課題やSDGsについて知ることが大切だと思います。知ることにより広い視野を持ち、考える事ができると思います。地域の課題についてはたくさんの地域の方との交流を通して共通認識を持ち、解決策に対して様々なアピールをすることが大切だと思います。それらをプロジェクト活動として農業高校で取り組み、結果を持ち寄り共有する事でより地域の課題解決に対して貢献ができると思います。

本校ではJGAP認証を取得し、持続可能な農業経営に取り組んでいます。地域の方に農場を開放し、従来の方法にとらわれずJGAP認証を通して農業のやり方をもう一度考えてもらうことが将来的にSDGsにもつながると思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業に携わっていない人が急にスマート農業や農業経済について興味を持つことは簡単ではないと思います。スマート農業を通して若い世代の農業のイメージを変えられることができれば興味をもってもらえると思います。

本校ではGPS搭載のトラクターで自動操舵を行うことで熟練者でなくても精度の高い作業ができます。これらを実際に体験してもらう事で経験がなくても農業に取り組む事ができる事を知ってもらうことで、農業に対してのイメージを変え興味を持ってもらえるのではないかと考えました。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立那須拓陽高等学校  
農業経営科 2年 後藤 未空

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

私は、地域の人たちを中心に、子供から大人まで参加できる農業体験のイベントを開催すべきだと考えます。例えば、野菜の収穫や牛の乳搾りなどを実際に見て、体験してもらうことで農業高校がどのような活動を行っているのかを知ってもらえる良い機会になり、農業高校の魅力を分かりやすく伝えることができると思います。

また、文化祭などの学校行事で農業体験ができる機会をつくったり、ポスターを作成して掲示したりすることも農業高校の魅力を発信する1つの手段だと考えます。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校では、所有している農場にビオトープがあり、生物多様性の保全などの環境学習にも力を入れています。このビオトープはSDGsの目標14の「海の豊かさを守ろう」と、目標15の「陸の豊かさを守ろう」に関係しています。

この学習がSDGsにつながるために私たちは、環境に配慮した行動をし、地球温暖化防止対策に取り組んでいくべきだと思います。また、絶滅の危機にある生き物について理解し、生息地を保全する取り組みも行っていくべきです。そして、このような取り組みを多くの人に知ってもらい、呼びかけることで一人一人の意識が高まり、SDGsの目標達成につながると思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

若い世代が農業に興味を持ってもらうためには、スマート農業を活用した体験学習の場を設けるべきだと思います。ICTやロボット技術をはじめ、農業機械を実際に体験してもらうことで、農業について知ってもらい、若者の農業に対するマイナスな考え方を変えることができると思います。

また、SNSなどを活用してスマート農業などについて発信することも、若者に興味を持ってもらうために必要なことだと思います。このような活動をすることで若い世代に興味を持ってもらうことができ、若者の就農の増加に期待できると思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立川越総合高等学校  
総合学科 2年 松木田 このみ

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・学校の特色ある授業や活動などを新聞に掲載してもらったり、ニュースに取り上げてもらうと良いと思います。
- ・農業高校の魅力とは、高校生活の中で草花栽培実習、果樹実習、畜産実習、食品加工実習、造園実習など実際に作業体験をしながら、知識や技術をしっかりと身につけていくことができることだと思います。それぞれの農業高校の特色ある授業や活動などをアピールするポスターを地域の公共施設などに掲示すると良いと思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・育てた野菜などを別の福祉施設などに寄付することで、食料支援をし、地域と学校の繋がりが深まると考えました。
- ・育てた野菜などを高校内で販売することで、運送費用などコストが抑えられ、地産地消の促進をすることになると考えました。生産者、消費者共々、つくる責任つかう責任の意識が高まるのではないかと思います。
- ・様々な種類の野菜を育て、効率よく、環境に害がなく（廃棄食材などを肥料にしてロスを少なくするなど）、持続的に生産するにはどんな肥料が良いかレポートにまとめ、発表し広めていき、実践していくことがさらに必要だと考えました。



## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・実際にスマート農業などを活用して農業をしている人やその仕組みを開発した人からお話を聞く機会や、実践できる機会を増やしていくべきだと思います。
- ・スマート農業を取り入れた授業を開講して、スマート農業について学び、身近に関わることで興味を持ってもらうことができると考えます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立茂原樟陽高等学校  
農業科 3年 蜂谷 湊大

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

文化祭や校内販売会のようなイベント以外でも地域のスーパーや農産物直売所、道の駅などと協力し、学校で栽培した農産物や加工品（ジャムやパン）を販売する。

農業に興味がある地域の人を対象に生徒主体の農業体験教室を行う。

学校のホームページを活用して入学を希望する中学生やご家庭に向けて普段の実習風景や実習内容を写真付きでアップロードする。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

SDGs 項目2（飢餓をゼロに）12（つくる責任・つかう責任）

規格外農産物を規格外品として規格品より安価に販売しロスを減らす。

規格外農産物をジャムやパン等に加工し販売する。

規格外農産物や剪定枝を用いて産業動物の飼料に加工し与える。

地域の課題として人口減少が挙げられる。千葉県は農業高校生の志望者が減少し多くの学校で定員割れが見られる。農業高校生が主体となり街ににぎわいを創出し若年層が住みたい街づくりの手助けをする。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農家の減少により、若い世代にとって農業は身近には感じられない職業になり未経験、未知の職業になりつつある。若い世代にとって身近なスマートフォンやタブレットを用いた農業を知ってもらい身近に感じてもらう。

実際にAI技術やロボット技術を取り入れた農業を見たり触れたりして体験してもらう。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立吉田島高等学校  
都市農業科 3年 佐藤舞

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

SNSを使用しない年代には新聞、テレビ等のメディアで農業高校生の活動を取り扱ってもらいます。またその時の映像をショッピングモールや駅構内のモニターでも流してもらいテレビを視聴しない層、幅広い年代に認知してもらいます。他の方法として各農業高校の魅力を簡単にまとめたチラシを作成し地域の掲示板や近隣店舗に掲示する紙媒体の発信手段があります。上記の映像など物を通した発信だけでなく、地域の行事に農業高校生として参加をするべきだと思います。例をあげると、夏祭りに高校で栽培したものを使用した屋台を出店します。屋台の商品と私達農業高校生を通すことで地域の方に分かりやすく農業高校の魅力を伝えられると思います。このときに先程のメディアで使用された映像や自分たちで作成したチラシなどを活用すると良いと思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

現在行っている学習やプロジェクト活動を地域の課題解決やSDGsにつながるためには話し合いだけでなく、クラブ員一人一人が実際に活動する必要があります。例として、各学校の農業クラブ本部が毎月SDGsや地域課題に関する月間目標を作り、それに向かいクラブ員が授業や自主活動を通して課題解決を目指して活動するものです。

クラブ員は今まで培ってきた学習内容を活用し地域の課題解決につなげることができます。また本部役員は課題作成の中で他の課題や独自の課題解決の発見ができそれぞれの成長に繋がります。この月間目標には少数人での活動となるため小さな課題解決が多くなると思います。しかし毎月多くの課題解決策が集められるためそれが積み重なり最終的にはもっと大きな課題を解決することが可能になると思います。

このようなクラブ員が自主的に活動し自分で学習やプロジェクト活動が地域の課題解決やSDGsに繋がっているのか、繋げていくのが考える必要があると思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

小中高校生を農業高校に招き体験学習を取り入れると良いと考えます。まず手作業で栽培体験をしてもらい機械を使用しない農業の大変さを知ってもらいます。次に実際の機械を用いて行われる栽培を通して農業技術の発展を体験してもらいます。他にもなかなか知る機会の少ない栽培後の作物のことや農地がもたらす効果などを一緒に学習する活動をすることで興味を引き出します。体験以外にも他校に農業機械で訪問などを行ってみると面白いのではないのかと思います。またこの活動を記録を体験参加者の感想を交えながら、SNSを使用し活動内容を発信していくと認知が広まり興味を持ってくれる方が増えると考えられます。他にも農業紹介動画として昔と今の農業、農家の違いを少しユニークに表現してあげると興味を引き出されると思います。

若い世代にSNSを通して興味をもってもらうにはガチガチと授業したものではなく少し面白可笑しく活動していくのが大切だと思っています。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立磐田農業高等学校  
生産科学科 2年 土屋沙気

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

### (1) イベントの開催・参加

#### ア 主催のイベントの開催

農業高校の学科は、生産系、環境系、食品系で分かれています。この学科の魅力を伝える方法として具体的に考えたのが校内野菜を使った料理教室です。栽培をして収穫体験から調理して食べるというコースを考えます。そして、料理が終わって片付けた後、校内各所の見どころを案内し鑑賞をしてもらうツアーを行います。このように学校主催のイベントで学校を会場にすることで学校に来る機会ができ、収穫する楽しさも実体験していただけます。

#### イ 地域イベントや校内販売の活用

2ヶ月に1回、駅前の道路を規制し、軽トラ市が開催されています。一般の方と会話ができる時間です。その際に、農業高校の魅力を伝えるボードを用意して、魅力を伝えたいと考えています。磐農MAPのような磐農のことが書かれているパンフレットをお渡しして少しでも磐農の魅力を伝えられたらなと思います。

### (2) 地域企業や農家さんとのコラボ

地域弁当業者や製菓子店と発酵食品を共同開発します。企業と農業高校の名前が入ることによって話題性が増すと考えます。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

### (1) 草花専攻の磐田駅前にプランター設置

### (2) 地域の未利用資源を生産資材として活用する。養鰻業の産業廃棄物「ヌマ」やカキ養殖で発生する牡蠣殻→エコ資源、循環型農業、水産業との協力

### (3) 地域の方と協力しながら地域農産物に再注目し、実現する地域ツアー「磐農生と行くガストロミーツーリズム」

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

### (1) SNSを活用する。

スマート農業の映像や写真を発信してスマート農業のメリットや実際どれほど役立っているのかを発信してみたりする

### (2) スマート農業の現場を見せる

現場でしかわからない凄さを伝えたい。

### (3) 成功事例の紹介

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県下伊那農業高等学校

アグリサービス科 2年 清水未夢

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

農業高校の魅力を発信するためには、文化祭や地域のイベントでの販売活動や地域の方と作業に取り組むことが大切だと考えています。本校では文化祭や飯田市が主催するイベント、販売実習などで農産物を販売することが多くあります。私もコースの授業で飯田駅周辺にトウモロコシの販売をしに行きましたが、多くの方に声をかけていただき下伊那農業高等学校について知ってもらうことができたと考えています。また各研究班では企業とコラボした商品開発や棚田保全活動など地域の方と一緒に活動を行っています。農業クラブ全体でも竹林整備を地元の方と協力して行っています。作業を行う中で地域の方に直接、下伊那農業高等学校の魅力を伝えられていると思います。SNSは便利ですが、生の声を聴くことができません。販売活動や交流活動を通して魅力を発信することで、より伝えたいことが明確に伝わるのではないかと思います。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

私は畜産の授業でブロイラーの飼育を行っています。本校ではブロイラーの小屋を一部竹で、給餌のトレーは使用済みのペットボトルを使用しています。SDGsと聞くと難しい活動のように思えますが、こうした小さな取り組みもSDGsです。本校の文化祭では装飾のほとんどを竹で行うことでコストの大幅削減に成功しました。使用した竹は炭にして打ち上げで使い、その後の灰は畑に戻すことで地域課題の持続可能な解決方法を模索しています。どちらも普段のちょっとした「気付き」からはじまったものです。授業や普段の生活の中にもSDGsに繋がることは多くあります。その気付きをみんなで共有していくことが大切だと思います。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

農業の就業者が減少している背景には若者の農業離れが挙げられます。この原因には農業はきつく、儲からないというイメージがあるからだと思います。しかしスマート農業を導入していくことで農業はとても簡単になり収入も良くなっていくと思います。本校でも無人トラクターのデモ走行やルンバのような自動草刈り機の見学を行っています。誰でも簡単に操作ができ重労働が少なくなっていました。また自動で行うため一人でも行うことができコスト削減に繋がります。しかし便利なスマート農業はまだ知られていないのも現状です。そこでまずは私たちがイベントで体験型ブースを出展し、実際にスマート農業に触れてもらう人を増やしていくことが必要だと考えています。私たちが授業で学んだ魅力を詰め込み、伝えることで若い世代にも興味を持ってもらえるのではないかと思います。またスマート農業はコストを気にする人も多くいると思います。体験型ブースでは国や地域からの支援についてもパネルにまとめ伝えていきたいです。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立田口高等学校

林業科 2年 福山 朝陽

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまう SNS の他に、より多くの人に SNS 以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

本校は地元の3つの中学校と連携型中高一貫教育を実施している。また、各中学校の文化祭では、事前に録画したプロジェクト発表の内容を披露している。夏季休業中に本校生徒が中学生と交流するサマーセミナーでは、実習の様子を見学できるような取り組みを行っている。中学生にとって、面識のある先輩が行うプロジェクト発表や実習の披露は、農業高校で身に付けられる知識や技術を認識する絶好の機会であると共に、入学後の自分を想像する場となっている。

普通科高校に比べ、農業高校は、勉強や実習の内容がイメージしにくいと思うので、地域へ発信し、交流する場を多く設定することが大切だと思う。

SNS をあまり利用しない高齢者には、販売実習を活用し、プロジェクト活動や販売物へのこだわりなどをポスターやチラシ等に分かりやすくまとめて展示することにより、広い世代への情報の発信に繋がると考える。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決や SDGs につながるためには、どのような活動をしていくべきか」

本校は林業科と普通科があり、林業科では2つの専攻に分かれプロジェクト活動を進めている。2つの専攻それぞれが地域の課題を解決する方策を考え、実践している。地域の課題は各授業で話を聞き理解しているが、地域で暮らす方の声を聴く機会は少ない。そのため、役場や地域のために尽力されている方と繋がり、課題の聞き取りや解決に向けた様々な活動にご協力いただいている。

本校の学校農業クラブ員は、林業科で学んでいる。授業では、未利用森林資源の有効利用の方法や森林が与える生態系サービスについて学ぶなど、木材生産だけではない、森林・林業の重要性をクラブ員は改めて認識できる学びと通して、様々な SDGs の目標の解決に繋がっている。しかし校内だけでなく、学んだ知識を校外へ向け発信することが今後の課題であると考えている。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経営などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

本校は、山間地に位置しており、周辺は山林に囲まれた自然豊かな環境にある。私は、これまで、自然に愛着を持ち帰郷される「Uターン」の方や憧れを持って「Iターン」される方を身近に見てきた。そういった方々が山間部での農業や地域文化の担い手として重要な役割を果たしている光景を目の当たりにしてきた。こうした経験から、農業に関心や接点のない方々に広く農業の魅力や重要性を発信し、伝えていくクラブ活動こそが、若い世代に興味をもってもらう入口となるのではないかと考える。そこで農業高校生が直接関わる中で、自らが抱く、農業への想いや希望を発信、共有することにより、農業に興味のある若い世代を増やすことに繋がると考える。

近年、森林計測にドローンが利用されており、本校でも、授業の中でドローンの扱い方について学んでいる。子どもたちを対象にドローンの操作体験を実施し、スマート農業に興味をもってもらうイベントも今後検討していきたい。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立伊賀白鳳高等学校  
生物資源科 3年 岡野 優心

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

学校のHPが有効だと考えます。SNSを利用していない方でも、HPなら簡単に見てもらえます。また、地域の情報誌や新聞も有効です。印刷されているので、手に取って見ていただけます。本校では、切り抜いた記事を保存・掲示しています。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

まず、地域の課題を見つけることが必要です。その上で、私たちに何ができるかを考えます。また、それぞれの行動を積み重ねて、SDGsにつなげる視点を持つことも重要です。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

スマート農業を実施することで、時間や労力が軽減できることを、知ってもらうことが重要だと考えます。知ってもらうことで、農作業に対するイメージが改善されます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 鳥取県立智頭農林高等学校  
森林科学科 2年 山根充希

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

現状：・毎月第3土曜日に町内の空き店舗を借りて販売実習を開催している。

- ・年に1回、11月に、学校で栽培した野菜や加工食品、木材加工品、シイタケ原木藍染製品などを販売する即売会を開催している。
- ・学校紹介パンフレットや学校ポスターを配付している。
- ・大型商業施設での生徒作品展を開催している。

問題点：・テレビ局、新聞社等への情報提供を行い取材のお願いしているが、取材に来てもらえる機会が少ない。

- ・学校紹介パンフレット等をより多くの人に配布したいが、費用がかかる。

対策：・テレビ局、新聞社等への情報提供をより積極的に行い、取材してもらう機会を増やす。

- ・なるべく費用がかからない学校紹介チラシ等を作成し、より多くの人に配布する。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

現状：・地域の課題である森林におけるシカ等の鳥獣被害の対策について取り組んでいる。

- ・地元の小学生に対して森林教室を開催している。

問題点：・課題解決には時間がかかり、継続してプロジェクトに取り組んでいく必要がある。

対策：・取組の成果や課題を、地域の有識者の方に伝え指導助言をもらいながら、地域と連携して取組を継続していく。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

現状：・農業を目指す若い人が少なく、高齢化による人手不足が深刻となっている。

問題点：・農業体験者が少ない。

- ・農業の重労働の部分が伝わり、やりがいが伝わっていない。

対策：・農作物のブランド化を図り付加価値を上げ、農業の魅力を伝える。

- ・農業を気軽に体験できる機会を増やしていく。

- ・スマート農業などの大規模農業について研修する機会を設け、若い世代にこれからの農業の可能性を伝えていく。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック連盟 岡山県立井原高等学校  
地域生活科 3年 池尾 海斗

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまう SNS の他に、より多くの人に SNS 以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

<現 状>

TikTok や X・Instagram などの SNS を中心に情報発信を行うとともに、井原放送を通じて取り組んだ内容の成果を発信している。(ハッピー園芸講座)

<問題点>

SNS だと若い世代のみが主なターゲットになってしまう。中学生などは SNS を通して高校の学習内容を把握していることが多いが、高齢の方などは詳しい情報を知ることが難しい。

<対 策>

ポスターを作成し、回覧板や地元スーパー、病院等の幅広い年代の方が利用する場所に貼る。また、地元ローカル TV への出演を増やす。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決や SDGs につながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

<現 状>

地域の課題や SDGs の知識・大切さについて理解できていない。何をすれば良いのかわからない。

<問題点>

農業クラブ員内で SDGs に関する詳しい内容について、意見交換（情報共有の場）が少ない。

<対 策>

資源や環境について学ぶ機会を増やし、その学びと SDGs のつながりを明確化する。また、今現在行っている活動が SDGs に向けてどのような役割を果たしているかを考える場面をつくる。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

<現 状>

スマート農業の発展により、農業は以前より労力が低減されている。しかし、スマート農業の導入前後でどのように農業界が変化したのかを、今の若者は知らない人が多い。

<問題点>

スマート農業のありがたみを知らないまま便利な農業のみを知るのではなく、どのような苦労を経て現在のようスマート農業が生まれたかを知る必要がある。

<対 策>

実際に事業所を見学するとともに、昔ながらのやり方を知る機会を増やす。また、現在スマート農業を導入したいけどできない、という場面をどのように導入し、労力を低減できるかを話し合う機会をつくる。

学校同士でスマート農業について話し合うことのできる機会を設ける。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 福岡県立福岡農業高等学校  
食品科学科 2年 辻彩花

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

実態として中学生対象のオープンスクールの開催やボランティア活動の実施が行われているが、その認知度が低いことがある。問題点としては、対象が限定されることや農業高校に関心がないと体験に来てもらえないため、魅力を伝えられる人が限られてしまう。その解決策として校外での販売会や、その販売物にQRコードをつける、地域の回覧板に記載してもらうなどの策を講じる。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

実態として現在SDGsの活動は出来ていることが挙げられた。しかし、問題点としてSDGsについての理解が乏しいためそのことに気が付けていないこと分かった。その解決策としてSDGsを学び、興味関心を高めるためポスターなど視覚的に分かりやすく提示する。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

実態として農家や私たちにスマート農業などの知識が乏しいことが挙げられた。他にも若い世代の農業に対するイメージが悪いことも挙げられた。さらに、スマートを導入する費用が高いことやスマート農業についての知識が無く、学びたいと思っても学ぶ場が無いことが問題点として挙げられた。その解決策として、まずは農業高校生がスマート農業などの知識をつけ、それを地域の農家さんに伝えることや、インフルエンサーなどと連携しその知識を広く伝えていきたい。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 沖縄県立北部農林高等学校  
熱帯農業科 2年 吉田 有輝

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

SNSでは機械に疎い高齢層の方々には情報を届けることが難しいという実態があり、問題点として、情報発信する取り組み自体が少ないことが分かった。ポスター作製や掲示板への貼り出し、新聞へ掲載してもらう。TVなどで活動を報道してもらうなど、高齢者の人にも目につきやすい方法を用いると良い。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

そもそも農業クラブとはなにをするものなのかという理解ができていない生徒が多い。プロジェクト活動を自主的にするのではなく、させられている感じで受け身の人がいる。

農クの活へ生徒がより密接に関わることのできる工夫が必要である。プロジェクト活動とは、元々地域課題解決のものであることを理解し、日々の授業の中、または日常生活の中で課題を見つけ、プロジェクト計画を立てるようにする必要がある。

### まとめ

実態・問題として、生徒自身が農業クラブとは何なのかを理解していない、プロジェクトに自主性がないという点が上がりました。そこで、農ク行事で生徒の関わりを深くする、プロジェクトの元々の意味を理解し授業、日常生活のなかで課題を見つけ自主性のあるものにすることが大事だと思う。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

実態や問題として、農業へのイメージは「3K」（きつい・汚い・かっこ悪い）というものが定着していて、現代の物価高騰で農業は危機に瀕しており、更に農業離れを加速させているということが分かった。

一般向けに農業機械のセミナーを大々的に開き、農業は3Kではなく、魅力ある仕事であるということを広める。実際にスマート農業をしている農家さんに話をさせていただき、現場はどのようなものなのかを知ってもらう、TVに報道してもらうと良いと思う。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 鹿児島立鹿屋農業高等学校  
農業科 3年 長峯 煌剣

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

### (1) 実態

販売会で地域の人と交流する機会にポスターやパンフレットを配布している。

### (2) 問題点

販売会に来てくれる人の年代が限られ、多くはお手頃価格のものを購入することが目的であり、私たちの学びを伝えることはあくまでも付属品のように感じることがある。取り組みをしても、鹿児島県は農業に関する学科への入学生が年々減少し続けている。

### (3) 問題点解決のための具体的取り組み

スーパーで野菜の販売会をするときも、値段で勝負するのではなく、私たちの学びの過程をチラシ等にまとめて配布する。また、幅広い年齢層が利用する場所（マーケット、保育園、学校）に掲示する。

### (4) まとめ

パンフレットには、私たちの学びの苦労や喜びを入れるようにすると、より農業高校の学びを伝えることができると思う。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

### (1) 実態

私たちがSDGsについて理解不足であるため、地域課題を考えることができていない。

### (2) 問題点

SDGsについて勉強が追いつかず、行動に移せていない。

### (3) 問題点解決のための具体的取り組み

地域交流を増やしたりするなど、各学校で取り組みを考え実行する。

### (4) まとめ

地域と交流する機会を増やし、そのことを他の世代に伝えるためのポスター作成やSNSを活用した情報共有などを行い、興味を持たせるような取り組みをして継承させていく。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

### (1) 実態

自動給餌器や牛温恵を使っているがスマート農業について詳しく知らない。

### (2) 問題点

校内ではスマート農業を取り入れていない。

### (3) 問題解決のための取り組み

スマート農業について詳しく知るためにも、見学に行く。

### (4) まとめ

一部ではスマート農業を取り入れているが、知らない生徒が多いので、見学や体験をする。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック連盟 宮城県農業高等学校

生活科 2年 川村 梓

生活科 1年 小松 杜愛

農業科・園芸科 1年 阿部 稜

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

若い人たちはSNSをよく使うので、農業高校の魅力を発信していく方法として学校のHPやSNSをうまく活用して行くことが大切です。しかしご高齢の方はスマートフォンなどの機器をうまく使えない人がいると思います。なので、このような方法がいいのではないかと考えました。

- ①農業高校新聞を作り、地域のスーパーや販売実習の際に掲示したり配ったりする。
- ②学校ファンクラブを作る！地域の方に学校のメーリングリストに登録してもらい、学校新聞やHPのリンクを分かり易く添付して、見てもらう。
- ③地元のテレビ番組にイベントや魅力的な授業活動を取り上げてもらう

私も「今日、宮農高校がテレビに映ってたね！すごいね！」と声をかけてもらったことがあります。テレビは広い世代の人が見ていると思いました。先生もニュース番組は地域や学校の魅力的な内容を撮影したいと、情報を求めていることを聞きました。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

私達の学校周辺は、県内有数のタケノコの産地です。ですが、タケノコ農家の高齢化により竹林が荒れてきている様子もあります。そこで私達は地域の資源活用と交流、竹林の整備を目的として、生活科の課題研究の授業で竹林とタケノコをテーマに活動しています。

課題研究では生活科の40人が、タケノコ農家の方にご協力してもらい、5月にタケノコ狩り、6月に竹の切り出しと竹材採取、7月に竹材を活用した玩具や道具作り、10月近隣小学校1・2年生との竹遊び交流会、11月竹林整備実習を行う予定です。

地域の魅力や、地域の方の要望を調べて、それを改善するためによく考えていく必要があると思います。そして、一番大切なことは、実際に現場に行き、見て、そして地域の方の話をよく聞くことだと思います。



## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

実際にスマート農業に触れてもらうことが、興味をもってもらいきっかけになると思います。

私達の学校では、保育園や小学校と交流学習会や中学校への出前授業、オープンキャンパスを行っています。このような機会を生かして、本校で行っている学習を分かり易く知ってもらったり体験してもらったりすることが良いと思います。私の学科ではまだ、スマート農業についてあまり行っていないようなので、出来るところから先生に提案していきたいです！

# 参加者課題レポート

## 第2分科会 第4会場

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第4会場	北海道静内農業高等学校	秋田県立金足農業高等学校

## 第2分科会 第4会場

### 【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	東北海道	帯広農業高等学校	農業科学科	2	松下 剛士
2	栃木県	宇都宮白楊高等学校	農業経営科	2	財川 蒼
3	群馬県	安中総合学園高等学校	総合学科	3	岩崎 權
4	埼玉県	羽生実業高等学校	農業経済科	3	野口 琉弥
5	東京都	瑞穂農芸高等学校	園芸科学科	2	広田 皇輔
6	山梨県	農林高等学校	造園緑地科	3	塩釜 優花
7	長野県	須坂創成高等学校	食品科学科	3	藤澤 麻衣
8	愛知県	渥美農業高等学校	施設園芸科	3	鋤柄 隼人
9	三重県	四日市農芸高等学校	農業科学科	3	日紫喜 幸太
10	滋賀県	甲南高等学校	総合学科	3	大家 涼
11	島根県	益田翔陽高等学校	生物環境工学科	2	門松 想奈
12	山口県	山口農業高等学校	生物生産科	2	堀 竜也
13	佐賀県	高志館高等学校	食品流通科	3	千住 伶奈

### 【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	南北海道	静内農業高等学校	食品科学科	3	石岡 悠那
15	南北海道	静内農業高等学校	食品科学科	2	田中 とわ
16	南北海道	静内農業高等学校	食品科学科	2	松本 彩楓

### 【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	秋田県	金足農業高等学校	生物資源科	2	佐藤 あやの
18	秋田県	金足農業高等学校	生物資源科	2	菊地 凜
19	秋田県	金足農業高等学校	生活科学科	1	神田 梨希

# 「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

北海道ブロック 北海道静内農業高等学校  
食品科学科 3年 石岡 悠那  
食品科学科 2年 田中 とわ  
食品科学科 2年 松本 彩楓

## 1 概要説明 北海道農業および北海道静内農業高等学校について

私たちの住む北海道は、広大な大地を活かし、稲作、畑作、酪農など生産性の高い農業が展開されています。また、北海道農業における1農業経営体あたりの耕地面積は、他府県に比べて約15倍と大規模で専門的な農業が特徴です。

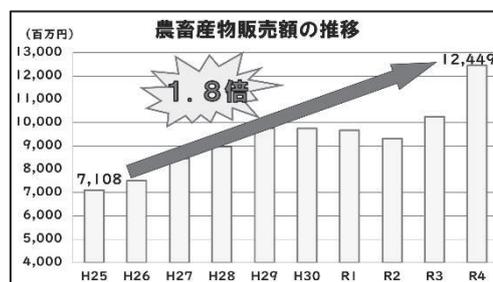
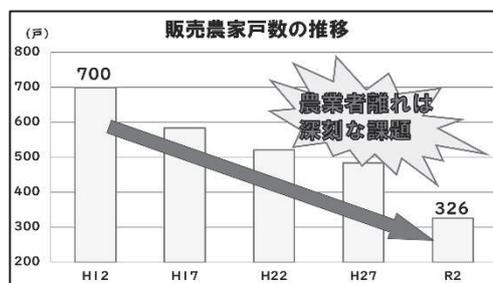
農業産出額は1兆円を超え、コムギ、ダイズ、バレイショ、テンサイなどの畑作物やタマネギ、カボチャ、スイートコーンなどの野菜、生乳や牛肉など数多くの農畜産物が全国第1位の生産量となっており、我が国最大の食料供給地域として重要な役割を果たしています。

このように北海道農業は広大な大地で行われるとともに気象条件や立地条件が大きく異なることから地域において特色ある農業が展開されています。そのため、それぞれの地域に即した農業技術の習得が求められ、日本学校農業クラブ北海道連盟では、大きく3つの地域に分かれており、合計28校が加盟しています。

その中で、私たちの住む新ひだか町は、北海道日高振興局管内に位置する町です。2006年に、静内町と三石町が合併して誕生しました。南西部は太平洋に面し、北東部には日高山脈を抱える、温暖で緑あふれる自然に恵まれた町です。新ひだか町の農業は、豊かな自然に恵まれた土地及び水資源を有効に活用し、サラブレッド生産、施設園芸、肉用牛、水稻、施設園などの幅広い農業が展開されています。

しかし、時代の変化が急速に進む中、近年の農業情勢は非常に厳しく、平成12年には700戸の生産農家があったのに対して、令和2年は326戸。約20年で半分以上の農家が減少しているほど、この町の農業者離れは深刻な課題です。しかし、このような厳しい現状にも関わらず、農畜産物販売額は10年前の1.8倍にあたる124億円。その背景には、トップレベルの生産技術はもちろん、ICTの活用や、持続可能な取組など、地域農業者が様々な努力をしており、こうした意欲が農業を活性化していることを校内リーダー研修会で学びました。

その後、会長が中心となり、「将来産業人として地域を



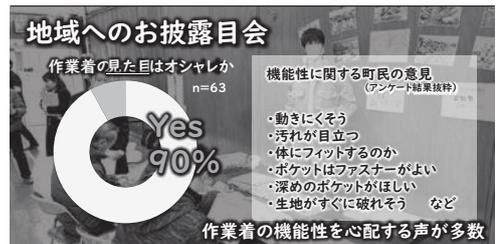
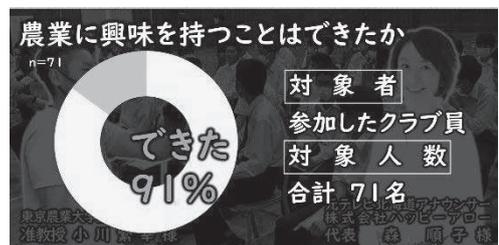
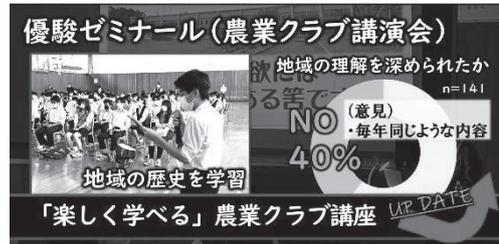
支える農業クラブを運営したい」と執行部が一致団結。そのためには、クラブ員の農業に対する「意欲」「努力」に加えて、未来につなげる「持続可能性」がキーワードになると分析した私たちは、活動テーマを「新時代への道しるべ～地域農業の未来を創る3つの戦略」としました。それでは、私たちの活動実践を報告します。

## 2 活動実践

### (1) アップデートでイメージアップ！～農業への更なる意欲向上～

毎年実施していた農業クラブ講演会「優駿ゼミナール」。全クラブ員を対象に、地域の歴史について講師を招いた講話を行っていましたが、内容が形骸化しており、クラブ員にとってあまり意味のないものになっている現状がありました。そこで、楽しく学べる農ク講座に内容をアップデート。東京農業大学産業学部の小川先生をお招きし「農業のトレンド」をテーマに、理想の農家について考えるゼミのほか、元アナウンサーによる相手に伝わる発表方法講座の開催など、クラブ員のニーズに答えた企画を実施した結果 91%以上のクラブ員が「興味を持つことができた」と回答してくれました。

また、「汚い」という農業の負のイメージを変えたいという思いで始めた「New-style-Project」。全クラブ員のアイデアをもとに、カジュアルウェアメーカーと連携して開発した、海外ブランド特注のオーバーオール作業着を新1年生に導入し、多くのメディアに取り上げられました。私たちは、活動をさらにアップデートさせた「New-Style- Plus」を企画。一般販売に向けて、地域住民へのお披露目会を実施しました。しかし、見た目の評価は高かったものの、農業者の方からは機能性を心配する声が上がりましたそこで、製造会社を交えた改善会議を実施。実際に着用しているクラブ員への意見聴取を行い、改善点を洗い出しました。そして、要望をもとにニューバージョンが完成。機能性とファッション性の両方を兼ね備えたこの作業着は92%のクラブ員が高評価したことから、アップデートをとおして更なるイメージアップに成功しました。



### (2) 新たな視点でボトムアップ！～全員が努力できる環境づくり～

本校の研究班で取り組むプロジェクト学習は、多くの研究が全道大会で入賞するなど、クラブ員の関心が高い活動です。しかし、大会に出場していないクラブ員の意欲が低くなる傾向があることを課題に感じた私たちは、視点を変えたプロジェクト運営を計画。3年生を対象に1人1課題について研究を行う個人プロジェクト制度を導入しました。全クラブ員参加の校内発表会では1年間かけて研究した50テーマを超える研究成果を3年生全員がポスターセッションで発表。全ての発表に質疑応答時間を設定したことで、下級生から様々な質問が飛び出し、3年生の約92%がプロジェクト活動をとおして成長できたと



回答してくれました。

また、クラブ員の人気が高い東京や大阪の商業施設で行う遠隔地での販売実習。本校の知名度が全くない場所での販売会は売れ行きが悪く毎回苦戦しますが、その分大きく成長できる一大事業です。しかし、わずかなクラブ員しか参加できないことから、ICT活用した遠隔販売を実施。大阪あべのハルカスで実施した販売会では、本校とリアルタイム中継を行い、学校にしながら、商品説明など、お客様に接客することができ、商品が完売。本校初の遠隔販売に成功しました。また、その様子をインスタライブで生配信。地域の方々にも活動をPRすることができました。

これらの活動が多くクラブ員の経験や成功体験につながったことで、新たな視点でボトムアップさせることができました。



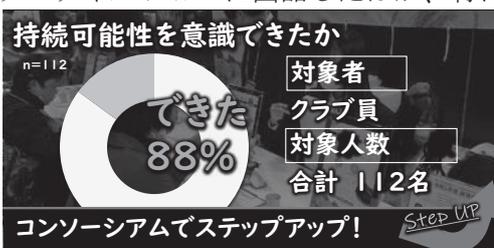
### (3) コンソーシアムでステップアップ! ~新時代に向けた持続可能な活動~

クラブ員が現在行っている学習やプロジェクト活動を、地域のSDGs促進につなげることで、クラブ員の更なるスキルアップにつながると考えた私たちは、学校×行政×地域を共同体(コンソーシアム)とした活動を実施しました。

生産科学科では、持続可能性をテーマに農林水産省が推奨しているバイオ炭栽培に着目。本校・役場・JA・農業改良普及センターが一体となった「新ひだか町みどりの食料システム推進協議会」が発足し、助言をいただきながらクラブ員が実施した栽培試験の研究結果が地域の栽培マニュアルとして確立。新たな栽培モデルを作り出すことができました。また、サラブレッド生産では、専門の技術を持つ装蹄師にしか治療できない馬の蹄にヒビが入る裂蹄について、3Dプリンターで作成したオリジナル樹脂プレートによる新たな治療法を確立。世界に発信できる研究として、英語発表を実施。北海道教育委員会主催「探究チャレンジジャパン」では1位にあたる英語部門賞を受賞しました。

食品科学科では、地域資源の活用をテーマに、企業と連携した新商品開発事業を展開。企業の要望をもとに、クラブ員がチームに分かれて開発を行いました。試行錯誤の末、7つの試作品が完成。東京ビックサイトで開催されたグルメ&ダイニングスタイルショーに出品したほか、特に人気の高い5種類の商品は、地域の特産品販売所で通年販売が実現しました。

これらの活動をとおして、88%のクラブ員が持続可能性を意識できたこと回答してくれたことから、コンソーシアムがクラブ員のスキルアップにつながりました。



### 3 活動成果

活動終了後に実施したクラブ員へのアンケート結果をテキストマイニングで分析すると、「SDGs」や「地域」など、私たち執行部の思いがクラブ員にしっかり伝わった結果となりました。

これらの経験をとおして、夢に向かって挑戦するクラブ員が増加。中でも、海外で勝負できる農業者を目指したクラブ員が、日本で20名しかいない高校生外交官としてアメリカに派遣されたほか、一流の畜産農家を目指すクラブ員がオーストラリアで研修を受けるなど、越境をテーマに大きな一歩を踏み出しました。

また、クラブ員のやる気は様々な外部コンテストへの応募につながり、コープさっぽろ主催「チャレンジグルメコンテスト」では地域資源を活用したザンギが北海道知事賞を受賞。そのほかにも9つのコンテストで入賞する成果につながりました。

この現状に満足せず、現在私たちは次のステージとして、フードロスの問題を地域に知ってほしいというクラブ員の意見をもとに、地域の基幹作物である規格外ミニトマトを活用したアイデアレシピコンテストの開催に向けて活動しています。振興局に企画を打診し、共催としてサポートしていただけることになったほか、入賞したレシピについては地域のホテル4社で朝食バイキングの新メニューとして提供されることが決まりました。クラブ員の思いをカタチにして、新時代への道しるべになれるよう、これからも私たちは努力し続けます。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道帯広農業高等学校  
農業科学科 2年 松下 剛 士

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

### ①「食べレア北海道」にて加工品販売を実施

本校の食品科学科ではeコマースの手法を用いて、地域の魅力を道内外に発信するスキルを磨きました。

### ② 社会福祉法人刀圭会と連携した子ども食堂を協働運営

ボランティア精神溢れる本校クラブ員が学科の垣根を越え、団結して事業運営を行いました。【図1】

### ③ FM-JAGA で帯農農クの活動を発信

北海道・十勝で支持率ナンバーワンを誇るラジオ局「FM-JAGA」にて、帯農農クの活動を発信し、大きく注目されました。

私たちの活動を地域の方に評価してもらい、76%が「帯農農クの地域貢献活動に満足している」と回答。こうした情報発信が幅広い年齢層に伝わる手段だと考えます。



図1：子ども食堂『すまいる』

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

主な該当項目【9産業と技術革新の基盤をつくろう 17パートナーシップで目標を達成しよう】

帯農は5学科の特色を生かした幅広い活動を展開していますが、クラブ員から「経営者として必要なスキルって何だろう？」という声があがりました。そこで、活動の充実を図るため「新規就農プログラム～農業の魅力発信コンソーシアム～」を実施。農業の魅力や新たな可能性を学びました。農業経営者を志すクラブ員の91%が「農業経営への意識を高めることができた」と回答。この取り組みを通して、農業科学科では持続可能な農業経営への意識が高まり、ASIAGAP 認証を取得。酪農科学科では酪農教育ファーム認証牧場認定の本校牛舎で食育プログラムを実施【図2】。地域農業の発展に貢献できる未来の経営者たちの資質を高める活動はクラブ員の87%が「農業への視野を広めることができた」と評価しています。



図2：帯農式食育プログラム

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

帯農農クではICTを活用した学習方法が浸透しています。日本農業技術検定に対応した問題集をGoogle Formsで配信。仲間とともに主体的に学び合える環境を整理したことで、81%のクラブ員が「農業学習に興味を持つことができた」と回答。また、地域関連企業と連携し、ICTスマート技術を活用した出前授業を先生と協働で企画して、ドローンや自動操舵トラクタの実演等を実施することで、若い世代に興味を持ってもらえるのではないかと考えました。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立宇都宮白楊高等学校  
農業経営科 2年 財川 蒼

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

・白楊高校では、産業教育フェアなどの校外での活動に参加し、環境整備や会場装飾など行うと同時に白楊高校についてまとめた学校紹介の展示を行っています。このような校外でのイベントは様々な年齢層の方々が参加するので多くの人に情報発信をすることができると思います。また、地域の方々とコミュニケーションを取ることができるので、会話を重ねて地域の方々との繋がりが強くなることでより、農業高校の魅力が伝わりやすくなると思います。このようなイベントに各農業高校が積極的に参加し、学校紹介の展示などを行うことでより多くの人に情報を発信できるのではないかと思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

・白楊高校では、地域の方々と交流目的での塗り絵の催し物を行っています。このような催し物は地域の方々と交流し、話を聞けるのと同時に話を聞く中でその地域に隠れていた課題やSDGsに関する問題に気付く場にもなっています。「問題に気付く」といった小さなことを重ねていくこと、それが地域課題解決やSDGsに繋がっていくのではないかと思います。私たち個人が出来ることはとても小さいので、まずは問題に気づき、それを仲間に伝えて協力し合い、先生方や学校、地域連携をしながら問題解決へと近づいていく、それが私たちのできる最大限の行動だと思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

・白楊高校では、校内意見発表会と校内プロジェクト発表会を通してスマート農業や農業に関する情報を発信しするなどのPR活動を行っています。これらの発表会は、まだ入学したばかりの新生も含めた白楊高校の農業クラブ員に対して、新しい知識や画期的な考えを与えてくれる場となっています。私も高校入学時、先輩や同級生の話を聞いてとても驚かされました。その時から農業に対する興味が強く沸き、農業クラブに入るきっかけにもなりました。農業クラブ活動での発表も大切にしながら、若い世代の集まる場などに出向きPRすることで若い世代にも興味を抱いてもらえると思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立安中総合学園高等学校  
総合学科 3年 岩崎 權

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

高校で行ったことやイベントを記載したポスターやプリントなどをつくり、地元の市役所や医療施設などや前から関わり・交流のある地域の店舗などに協力してもらい、掲示板などに貼って施設や店舗を訪問した方々に知ってもらう。

それらの場所は、地域の方々の幅広い年齢層が集まりやすいから、そのような場所に多く貼ってもらうのが良い。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

プロジェクト活動では、実際に地域が直面している課題について調査して、その原因を知るとともに、自分たちが日頃から学んでいる学習内容が、課題解決にどのように活かせるのかを対照・比較して、SDGsのどの項目に当てはまるのかを確認することが必要だと考える。

そして、自分たちが考えた対策について、地域の課題解決活動をおこなっている企業・団体に意見を伝える場をつくり、意見交換を行う。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

若い世代では、ほとんどの人がスマートフォンを持っているので、SNSを用いて、先端農業では、AIやロボット、ドローンなどを使っていることを動画で配信することが重要であると思う。紙面や画面で文字やイラスト、写真などで伝えるのも良いが、実際に使っているところを動画で撮影をして配信することによって、どのように使っているのか、どんな感じに動いているのかを伝えやすいし、受け取ってもらいやすいからである。

また、スマート農業について学んだ高校生が、実際に小学校との交流活動を通して、どのようにして使うかなど、説明をしたり体験をしてもらう場を設ける。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立羽生実業高等学校  
農業経済科 3年 野口 琉弥

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・高校で作られた農作物を飲食店などと連携して、新しい商品として販売する。
- ・イベントなどに参加して宣伝する。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・授業で取り組んでいるハチミツを羽生市の特産として販売することで羽生市の宣伝になる。
- ・農薬の使用を減らし、校内で回収した落ち葉を腐葉土にして畑に還元し循環型の栽培体系につなげる。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためには、どのような活動をしていくべきか。」

- ・スマート農業(本校ではドローンがメイン)を活用することで、農業に対するイメージを変え、興味を持ってもらう。
- ・栽培技術・機械等の発展により、負担が軽減されていることを伝えていく。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立瑞穂農芸高等学校  
園芸科学科 2年 広田皇輔

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

魅力を伝えるにはお祭りやイベントに参加したり、農産物を取り扱うお店や飲食店とコラボレーションしたりして幅広い年代に積極的に接点を増やしに行くことが必要だと考えました。

SNSは一度に多くの人に情報を発信できますが、画面越しになってしまうため、伝えられる情報は限定的で、見る年代も限られてしまいます。しかし、幅広い年齢層が実際に参加するイベントであればSNSと同じように多くの人によりダイレクトに農業高校の魅力を伝えることができると考えられます。

また、体験会などを企画するなどして、「どんな学校か知りたい」「興味はあるけどどんな学校かわからない」といった人に、魅力を知ってもらうきっかけや機会を増やすことが農業高校の魅力をアピールする上で大切ではないかと考えました。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

SDGsの17の目標や地域の課題について学び、同じ農業に関わる人々がどういった理由でどのような方法でその問題に対して取り組みを行っているかを調べ、自分達の学習やプロジェクト活動として何ができるのかを考えて実際に行動に移すことが重要だと考えます。しかし、本来の学校での学習の趣旨からかけ離れた活動を行っては本末転倒です。まずは、自分が学習を通して学んできた内容で何ができるのか、どのような活動ならプロジェクト活動として無理せず取り組むことができるのか調査し、確実に行動することが大事であると考えました。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業は休みがなく体力的にもきつい、安価な海外農産物との競争が激しく経営が厳しいといった悪いイメージを強く持っている若い世代は多いと考えます。

しかし、近年はアシストスーツの使用やドローンによる農薬散布、空調服による体感温度の調節など、日々技術は進歩しておりそれを活用すれば負担を減らすことができます。また、近年の農業は農産物の生産による経営だけではなく、農業体験を商品とした経営モデルもあります。

このような新たな農業の魅力を人の目にとまりやすいSNSなどで農業の良い面を積極的にアピールし続け、身近に感じてもらうことができれば、興味を持ってもらいやすくなるのではないかと考えました。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 山梨県立農林高等学校  
造園緑地科 3年 塩釜 優花

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

広い世代に届く報道媒体であることが前提であると考え。また、全国的に同じように情報が届くことも考えなければならない。このことを考え、私はテレビとラジオによる方法が最適であると考え。双方ともに、全国の農業高校について情報発信をする番組や企画、コーナーを作り、各校や都道府県の取り組み、地域との関わりについてなどについて発信することで農業高校での学習や活動内容についてPRできると考えられる。しかし、テレビやラジオなどの公共放送を用いる場合、権利の関係や放送における決まり事など、解決しなければならないことも多く、高校生が取り組むには敷居が高いとも感じている。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

まず、地域の課題をどのように解決していくべきであるか地域と共に考える必要がある。高校が主体になるのはもちろんであるが、地域も主体的に活動し、お互いの良いところを伸ばし、難しいことを手助けしあえるような関係性を構築していくことが重要であると考え。なぜその地域ではこのような問題が起こっており、またどのようにして改善されたのかなども調べる必要がある。また、農業生産だけでなく、流通や販売、地域資源の有効活用など様々な視点から活動していくためには、近隣の市町村だけではなく、県全体として取り組んでいくことも求められる。このことを踏まえ、地域や県民に情報を広く発信し、自分たちができることや困っていることを知っていただくことから始めていく。その中で、課題解決のために共に活動していただける農家や関連施設を募集する。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業に対するイメージを変えていくことが最も重要であると考え。スマート農業については、ICTを用いた労力の軽減がどのように行われていくかを主に説明し、農業=肉体労働という意識を変えていく。また、農業を行うことで生活ができる収入を得るということも大切であるため、施設・設備の投資費や実際の収益に関するデータを公表し、農業という職で生きていけるということをアピールすることが求められる。若い世代の方はお米や野菜など生きていくために必要な「食」の重大性について知らない人が多いので授業の一環として取り組んでいくことも必要であると思う。

現在、全国的な米不足も報道されているため、生活と農業を関連付け、その中でスマート農業や農業経済という選択肢があるということアピールしていくことも有効であると考えている。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県須坂創成高等学校  
食品科学科 3年 藤澤麻衣

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

農業高校の魅力を発信するうえで、まずターゲットを絞る必要があると考えられます。

- ・ SNS を見ることでできる世代はどのような魅力を求めているのか？
- ・ SNS を見るのが難しい世代はどのような魅力を求めているのか？

ここを考えていくと、考えられることがある。野菜や畜産など食料としての魅力。次に花や造園など見て楽しむ魅力である。まずこの部分を発信すると考えたときに、定期的なイベントを独自で行うのはどうだろうか？実際に栽培を行う。加工品を作る。フラワーアレンジをやるなど。自分たちが授業で楽しかったこと＝魅力である。そのような魅力をメディアをうまく使うことで、地域のイベントなどで独自イベントの告知を行ったり、SNS や HP などへ誘導できるようにし実際にイベントに参加していただく。

(そのためには毎月第二土曜日にイベント。のように定期開催するのがいいと思う)

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域の野菜や果物を利用し、地域のお店などと協力してスムージー開発をすることで地産地消も進む。このような活動を行うことで、目標8になっている「働きがいも経済成長も」は、生産的な完全雇用や「ディーセント・ワーク」の推進を目的に掲げられています。ディーセントワークとは「権利が保護され、十分な収入を得られ、適切や社会保護が与えられている生産的な仕事」を指します。地域の農産物を加工などで消費されることで6次産業化をしていく必要があると思います。

作る責任、使う責任から考えると『肥料』があげられる。簡単に購入できてしまう化成肥料だが、現状環境負荷の原因になってしまっている場合が多い。作る側としても環境負荷をできるだけ少なくしていかないといけない。例えば下水処理汚泥などの有効活用し、現状の原料であるリン酸鉱石の代替とできるようにする。このように現状に目を向けていく必要があると思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味を持ってもらうためにはどのような活動をしていくべきか」

高校という観点から考えると、これからの世の中でドローンが必要となってくる。・・・そのようなことから、農業高校としてスマート農業の授業、もしくはコースを作り、卒業後に即戦力となれるような勉強ができたらいいのではないかと思います。また、須坂創成高等学校は農業・商業・工業の三学科からなる総合技術高校です。そのようなことから、農業は栽培管理のデータ化を行い、工業はドローンをはじめとする機器や機器のプログラミング。商業は収支の管理。このようなことができる高校です。学科の枠を超えて学べるとしたら色々な方面から魅力を感じられるようにしていくべきだと考えます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立渥美農業高等学校  
施設園芸科 3年 鋤柄 隼人

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

本校の周辺状況を見てみると、高齢者の多い地域であり、マーケットなどに実際足を運んでいただけるのも、高齢の方が多い。そこで、様々な年齢層の方に知っていただく機会として、回覧板のような仕組みを利用すべきと考える。田原市では、市役所へ依頼することで地域への回覧にチラシなどを差し込んでもらえるようになっている。そこで学校をPRするようなチラシを作成することで、回覧が回ってくるすべての家庭へ知っていただけると考える。また、私たち自身も、各校の取組を知るきっかけの多くを、日本学校農業クラブ連盟が発行している「リーダーシップ」から得ている。そこで、学校それぞれのリーダーシップのような機関紙を季節の代わりごとに作成し、地域の方へ配布すると良いと考える。また、農業クラブ役員が中心となり、愛知県全体での機関紙を作ることも、地域へのPR、そして今後進路選択をする中学生へのPRにもなると考える。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

農業クラブ活動におけるプロジェクト活動に限らず、農業を学ぶことはそもそもSDGsの実現に繋がる。また、各校のプロジェクト活動を見ても、どの活動にも地域連携が含まれており、愛知県内では現在でも活発な活動が行われているといえる。それをさらに発展させ、地域やSDGsへの貢献度をより高めていくために、地域の生産者との連携が必要になると考える。農業高校が配置されているのは、どの地域であっても、農業地帯である。これからの農業の基盤ともいえる、農業高校生のプロジェクト活動がよりよくなるには、今の農業生産における課題を解決する必要がある。そこで、本校では「規格外野菜の活用」が盛んに進められている。規格外野菜の活用は、廃棄コストや環境負荷低減、さらに地域の農業の実情を知ることに関わり、地域課題の解決に直結する。各校それぞれの地域では、それぞれ特産の農産物が生産されていることから、それらの活用は各地域の地域課題解決に繋がる。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

現在、ドローンを授業で活用している学校も増えてきているため、そのデータや映像を学校HPなどにアップロードすることで、授業を受けていない生徒や、農業高校関わりのない人にも興味を持ってもらえると思う。さらに、若い世代を対象とするならば、学校HPだけでなくYouTubeなどの動画配信サイトを活用するのも良い。さらに、それぞれの学校で農産物販売等は行っているはずなので、その販売物を今の流行り物と関連づけた売り方をすると良い。今なにが流行っているかは、高校生である私たちが最も分かっているはずなので、農業高校生が考える販売戦略として実施することにより、農業に若い世代からの注目を集められると考える。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立四日市農芸高等学校  
農業科学科 3年 日紫喜 幸太

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

本校では、農産物や実習で加工した木工製品などを、イベントや学校の販売所などで販売しています。そこでは多くの農業クラブ員が地域の方々やお客さんと話す機会があり、そういった会話が、情報発信にとってもむいているのではないかと考えています。しかし、それだけでは農業高校としての情報発信には限界があると思うので、自分たちが主体となった商品開発や企業とのコラボをすることにより、もっと広範囲の方々に農業高校の魅力を伝えられると考えました。実際に本校では、育てた酒米を使い、地元酒造会社さんで日本酒の製造をしてもらい販売しました。コロナ後ということもあり、小規模な販売イベントからのスタートでしたが、このことがきっかけになり、いろいろな方が「農業高校ってこんな事もしているんだ」と知ってもらえました。またこれらのような取り組みを、広報や新聞などに載せてもらうことで、もっと情報発信ができると思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校がある地域は、古くから紡績が盛んです。そこで産学官が一体となり、ウールの廃材を有機質肥料として田畑に還元する活動をしています。実際に肥料としての効果が出てきており、これからブランド化などを進めることにより、地域産業が発展するとともに、ウールの廃棄量も減らせるのではと考えています。

また学校付近は、採卵養鶏農家の戸数が多いことを知り、近年高騰している輸入穀物飼料に代わる飼料製造に着手しました。食品メーカーから廃棄されるカステラと酒蔵から出る廃棄酒粕、地元農家の米ぬかを混合し、通常の配合飼料と一緒に給与した結果、飼料コストの削減と必須脂肪酸の含量が増加し高付加価値化につながる事がわかりました。この結果を受けて、持続可能な畜産の研究を進めています。このような取り組みのように、地域を巻き込んだ活動を、私たちのような農業高校生が主体となって行うことで、持続可能な農業ができると思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

正直、農業に対するイメージはあまり良くないと考えています。そこで、スマート農業などの、デジタル機器を用いた先進的な農業に実際に触れてもらうことで、農業の面白さを知ってもらえるきっかけになると思います。私たちは若い世代の範囲を高校生以下ととらえ、高校の入門講座でドローンの操縦体験や農作物の収穫体験などを行うことで、もっと農業を身近に感じてもらうことができ、興味を持ってもらえると思いました。また学校では体験しきれないことを、インターンシップや農家見学を積極的に推進していくことで、将来農業に何らかの形で関われる人が多くなると考えています。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立甲南高等学校

総合学科 3年 大家 涼

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

甲南高校では最近地元テレビ局から取材を受けニュースとして取り上げられたり、ほかにも新聞記事にさせていただいたりして、それらをみた方からお問い合わせをいただくことができました。そのため、学校で行っている活動などを多くのメディアに提供することが良いと思います。提供するために、自分たちの活動をしっかりと文章にしてまとめたり、写真を撮って記録に残しておくことも大切であると思います。ほかにも学校販売所やイベントの時に自分たちの活動やPRのプリントを作って配布してもよいと思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

現在、自分たちの農業クラブ活動では、滋賀で有名な和菓子店さんが食品廃棄物となる小豆の皮の処理に困っておられることを知り、その小豆の皮を使って家畜飼料にならないか研究を行っています。これも偶然、知り合いの方からの情報提供で知ることができました。知り合いの方がおられなければ、そのような困りごとに気が付くこともなかったと思います。ですので、地域のいろいろな業種の方と高校でつながりを持つことが必要だと思います。そうすれば、双方で困ったことがあった時に相談できたり知恵を出し合えたりもできると思います。そのようなつながりの場を持てる場（業種の交流会など）に積極的に参加するのもよいと思われます。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

ドローンでの農薬散布やトラクターの自動運転などの実演を実際に見てもらうことで、農業の「きつい」「汚い」「肉体労働で大変」というような印象を払しょくできるのではないかと考えます。また、最近のコメ不足など、最近の農業の話題について、高校生の視点での見解や、実際に栽培・収穫している高校生の意見などを中学生に伝えることで、自分たちよりも若い世代に興味を持ってもらえるのではないかと考えます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 島根県立益田翔陽高等学校  
生物環境工学科 2年 門松 想奈

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・多くの市民が目にする媒体などで高校の魅力を発信する  
→ 市町村が発行する広報誌、新聞（地方紙）、放送（国営，民放，ケーブルテレビ）  
など
- ・町の人が良く利用する場所等にポスター設置などで日々の活動の様子をアピールする  
→ 役所、公民館、スーパー、駅 など
- ・学校で町の人が来ていただくイベントを多く開催する  
→ 販売会、体験会 など

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・私たち自ら地域に出向いて地域の現状（問題点など）を知ってからプロジェクト活動の課題設定を行う
- ・SDGsについて理解度を深める  
→ テレビなどの媒体で“SDGs”の言葉は聞く機会が多くなったが、内容までは理解が出来ていない。まずはSDGsについて正しく理解し、行動を起こす前には“どの目標と関係あるのか”を考えてから行動する

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・地域の方々の力を借りる  
→ 農業に対してマイナスなイメージを持っている人が多いと思う。そこで、“スマート農業”などを実践されている地域の方を講師に講演会や体験会を行っていただいて、まずは私たちから興味を持ち、さらに私たちがSNS等で興味を引くような発信をする。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 山口県立山口農業高等学校  
生物生産科 2年 堀 竜也

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

本校では定期的に近隣の小学校と農業体験交流を行っています。交流内容は田植え体験や芋ほり体験です。これらの農業に関する体験行事には小学生だけでなく、中学生を対象としたものや、その保護者の方々にも体験していただくことがあります。校内での行事を大切に、継続実施していくことで農業高校について知ってもらい、興味を持ってもらえると思います。

他に、本校では地域のテレビ局の方によく取材に来ていただき、ニュースを通じて本校の特色ある学習活動を幅広く知ってもらうことができています。これに加えて、チラシなどの宣伝物を作り、地域の交流センターや人がよく集まるお店に配ることで高校生の活動を広げることができると思います。また、実習で生産した野菜や草花、果物などをお店に売ることによって農業高校について知ってもらうことができると思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

現在、総合実習で野菜の栽培に取り組んでいますが、規格外のため廃棄される農産物の量が多いと感じています。飲食店等で廃棄される食品に注目しがちですが、生産段階でのロスを減らすことを提案します。形の悪いものでも味はしっかりしているものもあり、これらを加工して廃棄物を減らしていくとよいと思います。加工した食品は賞味期限も長くもち、利点が多いのではないのでしょうか。また、売れ残ってしまった野菜などは、学校で行う調理実習や製造実習に活かし、近隣の小学校や中学校へ提供すると良いと思います。提供の仕方は直接販売、調理実習のイベントを高校生が主催するなどです。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

機械を使っていかに手間を掛けず、早く農産物を作れるのかを知ってもらいたいのではないのでしょうか。そのために、山口農業高校に来ていただき、本校が所有するドローンや大型農機の説明を行い、実際に機械を使って作業をしているところを見ていただくことで興味をもってもらえると思います。

また、安全に留意しながら機械を操作できる体験企画をひらき、実感をもってもらうことも必要だと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立高志館高等学校  
食品流通科 3年 千住 伶奈

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

○実態…Instagram や YouTube、学校ホームページで販売会の告知や学校でのイベントや実習、部活動など普段の様子を投稿している。

○問題点…本当に若い世代しか利用していないのか。販売会の告知を見て、学校に来るのは保護者か近所の人だけのような気がする。

○問題点解決のための具体的な取り組み…人が集まるお店にポスターを貼ってもらう。学校以外の場で試食会など交流の場を設ける

○まとめ…SNS を利用している世代数の調査が必要だと思う。情報発信の手段も重要だが、発信する内容を工夫しないと多くの人の目に止まらない。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

○実態…学校ではクッキーやビスケットの製造、トマトをはじめ多様な農産物を生産している。地域の問題となっている害獣被害に注目した、ジビエソーセージの研究に取り組んでいる。

○問題点…地域住民の高齢化が進んでいる。クッキーやビスケットの形や色が悪かったらロスとなり、販売できなくなる。人手不足や労働者不足がある。

○問題点解決のための具体的な取り組み…訳あり品として値段を変えて一般の人にも販売する。生産者の実態を知って相互理解が深まるような活動の場を設ける（アルバイト?）

○学校内でしている実習を校外で行う、実習で得た経験を生かして剪定など地域貢献できるような取り組みをする。

○まとめ…不良品でも販売したりして無駄を無くすことと、実習で得た経験を校外活動で生かすことは、より高度な技術の習得だけでなく環境整備は害獣被害の減少など地域に貢献できると考える。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

○実態…若い世代の農業従事者が年々減少している。農業について知っている若者が少ない。

○問題点…若い世代が興味を持っていない。人材確保（働き手）の確保が難しい。モノやサービスのコストが上がっており、新規参入が難しい。

○問題点解決のための具体的な取り組み…費用の解決策は国の支援を受ける。一家で農業機械を利用するのではなく、地域で共用する。SNS を用いて魅力を発信する（インスタグラム、TikTok）講習会を開催する。

○まとめ…若い世代にも、農業のおおよそのイメージはあると思うが魅力が伝わっていないと考える。したがって、SNS を通じて魅力や最先端の取り組み、現状を発信するとよいと思う。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道静内農業高等学校

食品科学科 3年 石岡 悠那

食品科学科 2年 田中 とわ

食品科学科 2年 松本 彩楓

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

私たちの学校では、様々な手段で情報を発信しています。まず、報道や地域の広報誌への掲載です。クラブ員の日々の活動や成果を数多く取り上げていただいております。多くの人に農業高校の魅力を知ってもらうことができている。また、農業に関連するコンテストにも積極的に応募しています。昨年度は、レシピコンテストで入賞したクラブ員考案のスイーツが、北海道のコンビニエンスストアで商品化されました。これには、普段SNSを利用していない方にもたくさん声をかけていただき、学習内容を知ってもらうことができました。

次に、イベントの企画です。本校では小学生を対象とした交流学習や、販売会を実施しています。その際に、プロジェクト活動の内容をポスターにまとめて掲示をしたり、イベントブースなどを設けて、1人でも多くの人に情報を発信しています。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

私たちの地域はミニトマトの生産が盛んで、道内でも有数の産地になっています。しかし、収穫される約8%のミニトマトは小玉や変形などで売り物にならない規格外品となり、廃棄されるという現状があります。そこで、この現状を改善したいという思いで、農業クラブ執行部が中心となり「規格外ミニトマトを使用したアイデアレシピコンテスト」を企画し、開催しました。地域の全ての小中学校にポスターを配布し、地域の課題について説明していく中で、この企画は多くの方から賛同をいただき、地域の振興局が共催としてサポートしていただけることになったほか、地域のホテルから入賞レシピのメニュー化が決定されるなど、高校生が主体となり地域を巻き込んだコンテストになりました。このように、まずは行動してみることが大切だと思います。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

若い世代の多くは、未だに農業に対してネガティブなイメージを持っている人が多いです。しかし、スマート農業の技術は驚くほどの速さで発達しています。私たちのプロジェクト学習では、野菜の栽培において、ハウス内に環境モニタリング装置を設置しています。この装置をスマートフォンと連動させることで、ハウス内の気温や湿度などの環境情報を端末からいつでも確認できるようになりました。また、データロガー装置でハウス内の気温を記録し続け、瞬時にグラフ化することができます。これにより、今まで休み時間に毎回記録のためハウスに行き、状況を確認する必要がなくなりました。

また、本校にはありませんが、自動操舵トラクターや、ドローンによる圃場管理を取り入れることで、農業者の負担になっていた作業の多くを楽にすることができます。この現状を多くの人に伝えることで、農業へのイメージが変わる人もいるのではないかと考えています。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック連盟 秋田県立金足農業高等学校

生物資源科 2年 佐藤 あやの

生物資源科 2年 菊地 凜

生活科学科 1年 神田 梨希

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段を取るべきか。」**

農業クラブ活動や学校独自に行っている事業をまとめたチラシやパンフレット・活動新聞を地域の回覧板で回してもらったり、地元紙やテレビ・ラジオに取り上げてもらうこと、農産物販売といったイベントへの出店を積極的に行うことで情報発信ができる。本校の活動事例として、単位クラブで行っている「金農便」、「買い物代行」を通じた情報発信について紹介する。

「金農便」とは、学校近隣の追分地区から会員を募り、本校の農産物や加工品等を農ク執行部が会員宅へ届ける事業である。この事業は10年程継続しているため様々な場面で紹介しており、地域の認知度も高く、本校の特色として認識してもらっている。また、地域の方々と交流する中で見えてきた課題である単身高齢世帯における日常の困り事“買い物”に対し生徒が代行する支援を行っており、ボランティア活動を通して地域へのPRも進めているところである。このような活動をSNS以外の媒体でも情報発信することで、農業高校のPRに努めていきたい。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

学習活動を行う中で地域や社会課題を知り、農業クラブ員としてSDGs達成に貢献できることはないか、身近な事柄から、考え、行動、実行し、検証していくこと、そして地域と連携していくことが必要不可欠であると考え。本校の活動事例を一部紹介する。

- ①外来魚「ブラックバス」を活用した魚醤“しょつつる”開発、“クマ肉”を活用した肉醤開発
- ②若者の“佃煮離れ”を解決するためのエダマメを莢ごと活用した佃煮開発（未利用食材活用）
- ③剪定や管理作業の際に発生した廃材の活用と環境教育を融合させた親子ワークショップの実施

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味を持ってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

出前講座やドローン等の操作体験を通じて、五感を使う体験型の機会をつくるのが挙げられる。また、農業高校生が自ら学んだことを、他の高校生や小・中学生といったさらに若い世代へ伝えることも効果的と考える。本校の活動事例を一部紹介する。

- ①ドローン出前講座（法令・ルールの説明、操作体験、自動追尾システムによる“鬼ごっこ”）
- ②農業センシング出前講座

- ・ドローンによる農薬散布、画像診断
- ・環境センサーによる気象データの収集、水田の水量・温度管理
- ・観察カメラを活用した家畜の発情や分娩の予測
- ・AIロボットによる草刈り
- ・パワーアシストスーツの活用による農作業の負担軽減



2の③親子ワークショップの様子↑

# 参加者課題レポート

## 第2分科会 第5会場

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第5会場	福井県立若狭東高等学校	秋田県立大曲農業高等学校

## 第2分科会 第5会場

### 【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	宮城県	小牛田農林高等学校	農業技術科	2	渡邊 重皓
2	栃木県	真岡北陵高等学校	生物生産科	2	諏訪 さくら子
3	埼玉県	熊谷農業高等学校	生物生産工学科	3	坂田 千夏
4	千葉県	旭農業高等学校	園芸科	2	小野寺 美羽
5	神奈川県	平塚農商高等学校	都市農業科	3	菅田 花
6	静岡県	静岡農業高等学校	環境科学科	3	吉川 美彩希
7	長野県	富士見高等学校	園芸科	2	鳥海 美月
8	愛知県	猿投農林高等学校	農業科	2	伊藤 勝道
9	三重県	相可高等学校	生産経済科	3	大東 龍真
10	兵庫県	山崎高等学校	森と食科	2	坂元 絢美
11	岡山県	新見高等学校	生物生産科	3	清水 優斗
12	愛媛県	伊予農業高等学校	園芸流通科	2	大西 愛莉
13	熊本県	菊池農業高等学校	園芸科	2	松下 翔

### 【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	福井県	若狭東高等学校	生活創造科	3	高田 栄
15	福井県	若狭東高等学校	生活創造科	3	仲村 美羽

### 【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
16	秋田県	大曲農業高等学校	食品科学科	2	鈴木 万葉
17	秋田県	大曲農業高等学校	生活科学科	2	佐藤 美音
18	秋田県	大曲農業高等学校	生活科学科	2	森本 美桜

## 「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、 地域の課題解決やSDGsにつながるためには、 どのような行動をしていくべきか」

北信越ブロック 福井県立若狭東高等学校  
生活創造科 3年 高田 栄  
生活創造科 3年 仲村 美羽

### 1 はじめに

北信越ブロック連盟は新潟県9校、長野県11校、富山県5校、石川県4校、福井県3校の5県32校で構成されています。福井県連盟には福井農林高等学校、坂井高等学校、若狭東高等学校の計3校が所属しています。

私たちの住む福井県は、石墨慶一郎農学博士が選抜したコシヒカリを生み出すなど、昔から第1次産業が盛んで、坂井北部丘陵地や福井平野では果樹や水稻等の大規模経営、奥越ではサトイモなどを特産物とした中山間地域農業が行われています。また水産業もよく発達し、若狭国（福井県嶺南地方西部）は、約1400年前の飛鳥、奈良時代に、皇室や朝廷に地域色豊かな食材を献上してきたため、淡路国（兵庫県）、志摩国（三重県）とともに、「御食国（みけつくに）」と呼ばれていました。現在でも、鯖をぬかに漬けた「へしこ」や「小鯛の笹漬け」など、全国に知られた水産加工品が生産されています。

本校は、1920年（大正9年）に遠敷郡立遠敷農林学校として創立し、以後、福井県立遠敷農林学校、福井県立遠敷高校、福井県立若狭高校、福井県立若狭農林高校と改称し、その後、1987年（昭和62年）に福井県立若狭東高校となりました。今年で創立105年目を迎えます。何回かの学科再編を経て、現在は、農業科、工業科、商業科をそれぞれ各学年2クラス有する総合産業高校となっています。ラグビー部やボート部、放送部などは、全国大会の常連校となっているなど、運動部や文化部の活動も盛んです。

農業科には、生活創造科と地域創造科があります。さらに地域創造科は、2年次より食農創造コースと地域開発コースとに分かれます。

生活創造科では家庭生活の質の向上と社会の発展を担う職業人としての知識・技能を身に付けます。具体的には「生物活用」「農業経営」「食物」「保育」「福祉」「被服」などを学習します。

地域創造科食農創造コースでは、植物の生産から食品加工、調理、販売までを行う「農業の6次産業化」に対応した知識・技術を身に付けます。具体的には「野菜」「草花」「食品製造」などを学習します。

地域創造科地域開発コースでは、農業土木施工や測定の基礎・基本を学び、国家資格の合格を目指します。さらに、地域の環境についても学びます。具体的には「測量」「農業土木施工」「農業土木設計」などを学習します。



## 2 若狭東高校農業クラブについて

私たち執行部は、農業クラブの活動をクラブ員や他学科の生徒により深く知ってもらうことを目的に校内で次のような活動に取り組んでいます。

### (1) タンポポ調査の依頼

クラスごとに見分け方や、間違えてはいけない植物例などを紹介してより取り組みやすく工夫しています。

### (2) 農業クラブ総会の開催

クラブ員としての意識づけを高めることを目的としており、農業クラブについての説明や執行部紹介、年次大会に出場する選手の紹介をしています。

### (3) 新聞の発行

活動内容をわかりやすくするために新聞を発行し、各クラスに掲示しています。活動内容や競技の説明、大会結果等を掲示し、他学科の生徒にも情報を提供しています。

### (4) 学校祭での展示

10月に開催される本校の学校祭では、展示ブースを設け活動報告や大会結果を掲示しているとともに、参加型のイベントとして「農業鑑定競技に挑戦！」と題して本校が出場している「園芸」「農業土木」「生活」の問題から5問ずつを出題し、校内外の方に何問正解できるかに参加していただきました。



## 3 事例報告1 生活創造科 課題研究食育班

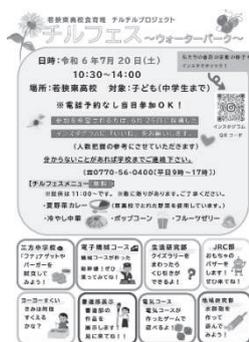
### 「子ども向けイベント〔 チルフェス (Children Festival) 〕の実施」

食育班では、子どもたちの豊かな未来につながる食育活動を行いたいと、これまでに様々な活動を行ってきました。その活動の一つが「チルフェス」の実施です。

「チルフェス」は子ども食堂とお祭りの要素が合わさった子どものためのイベントです。中学生までの子どもを対象として、焼きそばやピザ、炊き込みご飯、カレーなどの食べ物を無料で提供し、電子機械科が制作した新幹線の乗車体験や吹奏楽部による演奏など、他学科や部活動に協力を依頼し、ゲームや体験ができるように内容を工夫しています。また、メニューには若狭東高校で採れた野菜を使用して、子どもたちに野菜嫌いを克服してもらいたいと考えています。

4回目となる令和6年度のチルフェスは、7月20日(土)に実施し、80名以上の子どもたちとその家族が参加してくれました。夏の暑い時期の開催となったので、水鉄砲づくりのコーナーやヨーヨーすくいなど水をテーマにした企画を取り入れ、メニューには夏野菜をたっぷり使ったカレーを準備し、たくさんの方に喜んでいただくことができました。

令和6年11月には、5回目のチルフェスを実施予定です。これからもこのイベントを通して、親子や子どもどうしで一緒においしいものを食べて笑顔になり、年齢にかかわらずたくさんの人たちが交流する機会を作りたいと思っています。



## 事例報告2 生活創造科 課題研究調理班

### 「高校生レストランの取り組み」

地域の特産品や旬の食材を取り入れた献立を研究し、本校のゆずりは会館にて高校生レストランを実施し、本校生活創造科の取り組みをPRしています。

令和5年度は、7月に「カレーとナンのランチセット」を販売しました。チルフェス夏 ver.に参加されていたお客様に、お子さんと一緒に気軽に食べやすいオリジナルカレーを提供しました。また、11月に「秋の恵みランチプレート」を販売しました。地域の特産品や本校で生産した野菜、秋が旬の食材をたっぷり使ったランチプレート（デザート付き）を提供しました。



令和6年度は、7月に「☆のレストラン」を実施しました。揚げ野菜塩そうめんなど5品をセットにし、校内向けに販売しました。10月には、2回目の高校生レストランの実施を予定しています。地域の特産品や旬の食材を取り入れるだけでなく、栄養バランスや彩りを考え、お客様が食べてみたいと思う料理を、試行錯誤しながら考案しています。大量調理をする場合、どのお客様にも同じ味を提供できるように、使用する材料や分量を正確に決めていくことが重要です。また、料理がおいしく見えるためには盛り付けにも工夫が必要で、使う食器や料理を乗せる配置などを何度も検討しました。このように、料理をより良くするために試作を重ねることで、調理に関する知識や技術を向上させることができました。



## 事例報告3 地域創造科（食農創造コース） 課題研究薬用植物班

### 「薬用植物『コウギク』～産地化を目指して～」

コウギクは栽培が容易で効能にも優れています。地域創造科食農創造コースの課題研究では、コウギクを地元の農家に栽培してほしいと思い、産地化を目的として活動しています。

令和6年度のコウギクのPR活動では「薬用植物コウギクを育ててみませんか」という広告を作成して地域のコミュニティセンターに配りました。この成果もあり、地元の小浜市コミュニティセンターから問い合わせがあり、集まった農家25名と生産したコウギクの苗220本をプランターに定植し、効能や栽培方法を説明しました。また、本校の圃場において、コウギクの「収穫祭」を企画します。開花したコウギクの収穫体験や薬草パン、コウギクのブレンドティーなどをふるまう予定です。



「里山資源の活用法の研究」

里山とは、人の生活に利用されてきた、家や田畑に近い山や森林のことを言います。その里山の生態系は、人と生き物の複雑な相互関係で保たれてきました。しかし、今では里山を活用することが減り、以前の生態系が崩れ景観が悪くなり、獣害の原因にもなっています。そこで、里山資源の活用方法が広がれば、里山を利用する人が増えることで里山が整備され、明るい里山になると考え活動を行っています。

まず、アブラギリについてです。若狭地域は、アブラギリの実からとれる油である若狭油の有名な産地でした。しかし、現在ではアブラギリの油を利用することがなくなり、山ではアブラギリが放置されて荒れた里山の原因にもなっています。そこで、木の実から搾る油の利用、葉を使った葉ずし、幹を使ったキノコの栽培などアブラギリの活用法を研究してきました。



最近では害虫により実ができなくなり、温暖化が原因ではないかと考えています。



次に、オニグルミについてです。本校近くの遠敷川の河川敷にはオニグルミが自生しています。誰も利用しないため、イノシシなどのエサになっています。このオニグルミを地域の特産品に利用できないのか調査しています。核果（かくか）が複雑な形なので取り出し方が課題となっています。

4. まとめ

事例報告1～4の活動は、SDGsの17項目にある「貧困をなくそう」、「飢餓をゼロに」、「質の高い教育をみんなに」、「陸の豊かさを守ろう」、「パートナーシップで目標を達成しよう」に該当すると考えられます。

本校では、このように学科・コースの特色を活かした課題研究に農業クラブ員が取り組んでいます。地域の課題解決につなげるためには、クラブ員、学校、地域がそれぞれ協力して活動を進めていくことが必要だと考えます。また、その活動を継続することで農業クラブ活動へのそれぞれの意識が高くなり、活性化がより進んでいくと思います。

今後も農業クラブ執行部として、クラブ員の活動を支え、地域に、農業クラブや課題研究などの学習活動をPRしていく活動に取り組み、農業クラブをクラブ員とともに盛り上げたいと考えています。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 宮城県小牛田農林高等学校  
農業技術科農業科学コース 2年 渡邊 重皓

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

本校では「FAEC」という農業技術科と農業クラブの活動を発信している情報誌を農ク役員で作成しており、近くのスーパーや中学校などに掲示させていただいている。実際読んでくれている人が居るかは分からないがスーパーではたくさんの方が出入りしているので多くの年齢層の方に発信できている。



## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

まだまだ農業に関して知らないこと、分からないことが多い中では、なかなか判断がつかないので、農業がSDGsに対してどのようなことが関わるか、沢山勉強をしていく。

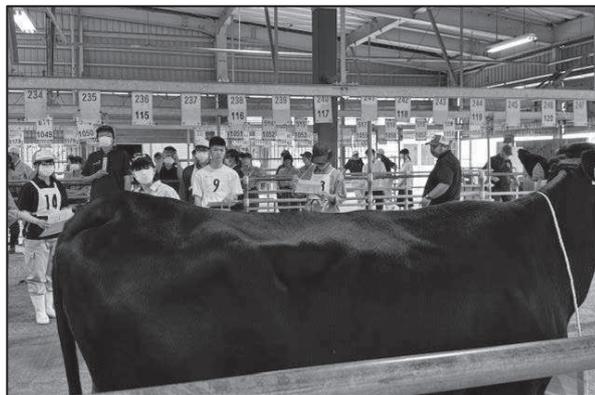
また、地域の課題を知るためには地域を知ることが重要となるため、地域と密な連携を行っていく。



## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

やはり農業という職種は力仕事が多く、どうしても過酷・辛いというイメージが強く、あまりよい印象が無いのが現状である。しかし、実際に農作業をしてみると、楽しく、特に機械を動かしているときはとてもワクワクしたので、今の農業はこんなに進化し、魅力がある事を伝えるため、農業体験のようなイベントを開催していく。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立真岡北陵高等学校  
生物生産科 2年 諏訪 さくら子

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

農業高校の大きな魅力として、他の学校にはないような実践的な学習ができるという点があるため、それを様々な人に実感してもらい、ワークショップやコミュニティイベントなど、農業の現場での体験ができるイベントを開催する手段がある。そこで、実際に私たちが学んでいる学習を様々な世代の方や親子で体験してもらおうのが良いと思った。

そして、その実践的な学びが、卒業後のキャリアでどう生かされるのかを知ってもらうため、卒業後に協力してもらい、講話を開くのも良いと考える。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・地産地消の促進→食料の安定供給や輸送による環境への負荷も軽減
- ・規格外の農産物の活用→フードロスの削減
- ・化学肥料や農薬の適切な使用方法を学ぶ→水質保全へつながる
- ・自身の学校だけでなく、地域の小学校や中学校と連携し、地域一帯で取り組むことが大切
- ・企業や農業団体と協力して、規格外の農作物などを使った製品開発
- ・地元の農作物を使った料理教室
- ・日本だけでなく、海外の学校と交流することで、国際的な問題に気付くことができ、パートナーシップを深めることができる
- ・学校で行った活動を学校のホームページ、SNSなどに発信し、全国の人々にSDGs問題について知ってもらう

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・ドローンや、AIによる最先端の技術など、テクノロジーの分野に触れてもらい、農業が身近で先進的な分野であることを理解してもらう。
- ・農業の経営について、シミュレーションゲームのような形で楽しく学んでもらう。
- ・若い世代が興味を持つような先進的なイメージをもってもらう。
- ・農業経営者の成功事例などを実際に聞き、より具体的なイメージをもってもらい、農業経営が魅力のある選択であると示す。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立熊谷農業高等学校  
生物生産工学科 3年 坂田 千夏

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・ポスターやパンフレットを作り、地域の広報誌や回覧板、スーパーなどの日常的に使うものや場所に掲載してもらう。
- ・学校に、地域の人や中学生を呼んで、収穫体験やパン製造などの農業高校ならではの行事を実施する。
- ・プロジェクト活動の成果や進め方を掲示板等で掲載する。
- ・地元のラジオ局を通じて農業高校のPR活動を行う。
- ・地元の催しもの（熊谷市では熊谷うちわ祭り、胎内くぐり）にて、生産物・加工品のサンプル品などを無料配布し、PRする。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・規格外などの理由で廃棄される食材を加工したり、子ども食堂に寄付したりする。
- ・自分たちの地域で何が課題とされているのか、そこから知る。
- ・地元・地域の特産品を栽培し、そのまま販売や、加工して販売する。
- ・地産地消を意識した食生活を行う。
- ・地元の食材を使ったレシピを考案する。
- ・プロジェクト活動や授業等で校外行事に積極的に参加し、より地域との関係を深める。
- ・廃棄野菜を家畜の飼料として利用する。
- ・学校主催で地産地消の料理教室を開催する。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・私たちがスマート農業や農業経済について学び、理解する。
- ・スマート農業や農業経済の凄さ・面白さ・魅力を幅広い年代の人々に分かりやすく伝え、興味を持ってもらう。
- ・私たち自身で農業に関する事柄をまとめ、地元誌の広報等に掲載してもらう。
- ・農業に関するマイナスイメージを払拭する。
- ・近隣の児童生徒を対象にスマート農業などの最新技術を活用した実習に参加してもらい、将来の職業選択として農業という選択肢を提案する。
- ・他の農業高校の文化祭などに参加し、どのような活動をしているのか知る。
- ・地元の小・中学校で出前授業を行い、農業がより身近なものだと理解してもらう。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立旭農業高等学校

園芸科 2年 小野寺 美羽

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ① 市町村の産業祭や文化祭で情報発信による発表会を行う。
- ② 市町村の広報誌や地区の社会福祉法人と連携し、福祉活動と農業体験等を組み合わせて取り組む。(福祉と農業プロジェクト) 体験を話し合い、地域の「かたりべ」活動を活かす。
- ③ 幼稚園・小学校・中学校生向けの情報交換(学期に1回)だよりを作成し、配布する。  
(お互いに参加しあえるものを考えて行う。例えば「草花や野菜の種まき・花壇づくり・野菜や作物の収穫体験・ブルーベリーのせん定・家畜のお世話体験など」)
- ④ 地域の教育関係機関の先生方(幼稚園・小学校・中学校・高校・特別支援学校等) 農業高校を体験してもらい、その体験や農業高校の魅力を話してもらう。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ① 農業クラブの発表大会(県大会・関東大会・全国大会)に児童や中学生を招待する。または、高校生が出前授業でプロジェクトの発表を行う。保護者にも協力してもらい地域社会へ発信する。
- ② より多くの発表場所へ赴き発表し、学校外への研修会や企業が行っている活動を見学する。
- ③ ひとり1つの卒業プロジェクトを作り、冊子にして介護施設や生涯学習センター等、各学校関係・公共の場で閲覧してもらい、アドバイザーになって共に交流する。
- ④ 農業実習を通じて、身近な問題(猛暑、異常気象など)やその対策を考えることで、よりよい農業の方法を考えられSDGsにつながる。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ① 農業事務所や県の農業大学校等の機関に相談し、スマート農業に取り組んでいる農家を紹介してもらう。最初は参加型で経験を積み、その後学校独自の参画型を実践する。
- ② 先輩農家や農業協同組合・農業法人に協力をもとめて、勉強会や見学会、体験学習を行う。
- ③ 農林水産省や農業経済界・県会議員に勉強会の協力をしてもらい、「人と農業・町と農業・国と農業」のつながりを学ぶ土台をつくり食の重要性を幼少期から教育をする。(食育活動)
- ④ 地域発農業物語と題して、テレビドラマをつくり、その地域ごとに「農業にまつわる」話題を取り入れて動画発信する。(良いところだけでなく、現実的な問題点も取り上げる。)
- ⑤ 農業以外の高校生と一緒に会談を行う。
- ⑥ スーパーなどで販売している農産物に関して、「使われているスマート農業」や「どのようなルートをとって消費者に届いているか」、「どのようにして値段が決定するのか」などについて、ポップをつくり展示する。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立平塚農商高等学校  
都市農業科 3年 菅田 花

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・地域の人に対してポスターを作る。回覧板などで販売会や体験会の開催をお知らせする。
- ⇒意外と地域の人でも農業高校の取組みを知らないことがあるため、見てもらえる機会を増やす
- ・地域の小学校や幼稚園を対象とした農業体験の場を設ける。
- ⇒農業体験で近隣の小学校と連携して田植え体験や、市内の盲学校から訪問を受け入れている

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・学校やクラスで毎月1回目標を立てる  
(例) ゴミの分別に気を付けよう
- ⇒月の始めと終わりで取り組めたかチェックし意識調査を行う
- ・既にある学校行事から取り組み内容を高める
- ⇒新しい取り組みを立ち上げるよりも、取り組んでいる学校行事やプロジェクト学習を地域課題やSDGsに繋がるような活動にしていく意識を持つことで行いやすい

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・スマート農業について理解していない人も多いため、「バイオテクノロジーとは何か」のテーマや「農作業の自動化」などをテーマにした体験会を開く。
- ⇒自分たちが気付いていないだけで技術を利用している部分はある。気付く機会になれば次の取組に繋がる。
- ・こんな「農業用ロボットがあつたらいいな」などで募集をかける。  
それに対して出たアイデアを農業企業に伝えることで、そのままでは実現可能でなくても、少なからずのきっかけとして期待できる。
- ⇒普段からICTを駆使している若い世代だからこそ考えやすいきっかけがあれば考えることができる。また、考えたことで自分にできることを見つける機会にもなる。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立静岡農業高等学校  
環境科学科 3年 吉川 美彩希

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

### 1 学校祭、オープンスクール、学校見学、生産物販売日を設ける。



学校祭、オープンスクールや学校見学、生産物販売日を設けて、中学生や地域の方を招いて、体験を通し学校を知ってもらうことが有力な手段であると考えます。特に体験することは、印象に残り、スマートフォンやディスプレイでの写真や動画では感じることはできない。体験してみても良い感覚が得られれば、学習意欲向上に繋がると考える。



また、学校での活動や生産物、成果物を見せることで、次も見たいという好奇心を高め、農業ならではの季節を感じ、人から人へと情報が伝達するのではないだろうか。

## 2 地域の教育機関との連携

本校では、農業の学習を通じた保育実習を実施している。生産系は草花をプランターに植え、環境系は木材や竹を用いておもちゃをつくり、食品系はお菓子作りなど各系列の特色を活かした内容になっている。園児はとても興味津々に取り組み、生徒と一緒に体験することにより、農業への関心が高まっていると考える。また、花やおもちゃなど、持ち帰りのものもあり、家に帰ってから保護者や近所の人に、「今日、たのしかったこと」として話を広げて、将来の進路選択の1つになってもらえたらと思う。



## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校のプロジェクトのひとつで、在来作物を用いて、在来作物の存続と地域との繋がりを目的とした研究がある。現状、在来作物の農家数も減少し、次の世代へ繋げるのが厳しい。そこで本校の生徒が在来作物を生産し、適した生育環境の調査などを研究している。農家との対話や交流を行ない、何を求めているのか、ニーズは何であるかを明確にし、利用方法などを模索している。また、在来作物を用いて、地域のコンビニと連携し、商品開発を行なった。学校や限定の店舗で販売を行なった。本研究ではSDGsという言葉は大きく掲げていないが、特に農業に関連する目標（例えば、「飢餓をゼロに」、「陸の豊かさを守ろう」など）に焦点を当てても、おもしろい研究になるかもしれない。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

スマート農業と聞くと、高度な機械やセンサーを用いて～～といった農業を思い浮かべるだろう。しかし、本校でも温度、雨量のセンサーで温室の調整を行なっている。風も何mに達したら窓を閉めるというセンサーを搭載した温室もある。ただ、実際生徒の反応を見ても、感激している様子はない。イメージしているものと違うからだ。まさにイメージしているものといえば、高度な機械やセンサーである。本校にはドローンがあり、それを用いた研究や実験を行なっている。実際に生徒がドローンを動かすと、目を輝かせている。このようにイメージをしているようなものを実際に触らせて体験させてみると、農業という入り口に立ってもらえるのではないだろうか。また、SNSの活用である。本校の卒業生で農業Youtuberがいる。農業の魅力をYoutubeで発信し、また本人もSNSを介して他の農家の方と協働することもあるという。このような成功例などの講演を通して聴いてもらう機会があれば、若い世代にも関心をもってもらえる礎になるかもしれない。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県富士見高等学校  
園芸科 2年 鳥海美月

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

農業高校の魅力や認知度を上げるには、様々なイベントに参加・出店して地域の方々と直接顔を合わせることが重要だと思います。また、特に年齢層の高い世代などSNSをあまり利用しない年齢層に情報発信していくには新聞への掲載や地域の広報誌、ラジオなども有効だと思います。

しかし、新聞やSNS等では一方的な情報しか伝えることができず、相手にとって本当に知りたい情報を満足に伝えられないという面で課題が残ります。よって、紙媒体での広告活動をSNSと並行で行いながら、販売会やイベントへの積極的な参加を通じてお客様1人1人とお話する中で満足のいく情報を発信していくことが必要だと考えます。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

まず、授業の中で「SDGs」や地域についてしっかり学ぶ機会を設けることが必要だと思います。聞き馴染みがある言葉ですが、その実態を改めて理解することでプロジェクト活動や現在の学習との関連性が深まると思います。

また、地域を理解する上でフィールドワークは欠かせないと思います。自分達が実際に感じた思いを学習にフィードバックすることで、課題解決に向けた効果的な学習や研究にも繋がると思います。そのためには地域との連携強化が必須となるので、日頃から地域社会と深く関わり、接点を増やす活動が重要だと思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業という産業が若い世代（特に中学生）にとって、畑作業というイメージで定着しているように感じます。この背景には中学校や小学校時代に行う農業体験が関係していると思います。

若い世代に興味をもってもらうには、スマート農業の魅力を存分に発信していく必要があると思います。体験入学や小学校との交流会などでドローンやスマート農業について学校で実践しているものをアピールし、既存の農業のイメージを払拭することが重要だと思います。

また、農業経済の基本について学べるシミュレーションゲームやアプリを通じて経営の面白さや課題を理解してもらうことも一つの手段だと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立猿投農林高等学校  
農業科 2年 伊藤勝道

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

教育方針や学校の特色、校風等を掲載したホームページを活用し、農業高校の魅力を効果的にアピールする。魅力を発信していくには、学校の日々の様子を伝えるためのホームページ上でブログを始めることが効果的だと思う。実習の様子や生徒の農業への熱意を感じられるように、写真や作業内容を掲載することはもちろん、農業クラブ執行部が生徒の視線からブログを書くことで、より親しみやすい文章となり、幅広い年齢層の方に農業高校の魅力が伝わると思う。

また、各農業高校がある地域の中学校に親やすいパンフレットの配布や出前授業を行うことで農業高校に興味をもってもらい、ホームページ閲覧人数の増加に繋げていきたい。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

日頃から学習している内容やプロジェクト活動の成果を地域と連携活動で発表することで地域の課題やSDGsの目標を達成するための方法を共有できると考えている。

また、学校で実践した研究活動の内容やその結果を農家に情報として還元することで課題の解決に貢献できると思う。さらには、社会情勢を考慮したプロジェクト活動を一般企業等が主催する、農業に関する発表会にも参加して発表することで、これからの農業のあり方を訴えることも必要である。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業のネガティブなイメージを払拭できるような活動が大切である。ネガティブなイメージとは、天候に左右され安定的な収益が得られないことや、初期費用が多くかかる等のイメージである。これらは、スマート農業に関する機器を導入したり、国や自治体からの支援を受けたりすることによって解決できる。そういった情報を発信していくとともに、農業高校の実習でも新しい農業の形を広く取り入れていくことが必要である。

また、新しい技術を導入することで負担が少なくなることも伝えていくべきである。例えば野菜栽培の場合、播種が完了したら収穫までは、水分の調整、薬剤散布や肥料散布などに多くの時間を要する。薬剤や肥料を散布・収穫タイミングは知識が必要で難いと感じる人も多くいると思う。しかし、今ではセンサー等を導入することで追肥のタイミング等がわかる。このような新しい情報等を農業クラブ員が身近な人に伝えることで、より多くの若い世代に興味をもってもらうことができるのではないかと考えている。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重立 相可高等学校  
生産経済科 3年 大東 龍真

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

農業高校とはいっても私的な活動に近い存在となっているのではないかと思います。第一段階としてまず農業高校について知ってもらうことが大事ではないでしょうか。学校で今、Instagramを始めだしたものの、これまではWebサイトや学校のパンフレット等しか情報を得る方法はありませんでした。情報の少なさから私たち自身が知ってもらう機会を少なくしているともいえます。そこで引き続き情報発信を続けていくとともに普段している活動や商品の宣伝を込めたオリジナルのパンフレットを作り、スーパーなどの買い物に来ていただいたお客さんに渡していくことが魅力を知ってもらう最善策だと考えます。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

課題解決に取り組むにも全員で同じことに取り組んでいては非効率といえます。そこで学習や研究を地域の人に向け、かつ互いに発表する機会を設けるといいと思います。ただ発表するときも賛否両論はあると思うので、最初から意見を押し付けることはせず、互いの意見を尊重しあうことで、地域の人々の考え、私たちなりの考えを共有しあえば一つのアイデアから派生して課題解決にこぎつけられるのではないかと思います。世間でよく耳にするようになったSDGs。取り組んでいる農業高校、農家は少なくありません。しかし取り組んでいてもそれぞれが具体的に何をしているかは知らない状態にあるのではないのでしょうか。常に地域の人と共有が可能な状態にあることが一歩進む鍵になると思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

私たち高校生はドローンでの演習、環境制御温室での遠隔操作による栽培などスマート農業についてとても興味があります。興味があることは学ぶことに対しても積極的になります。今までの体験から若い世代にスマート農業は「農業」に興味を持ってもらえるきっかけになると思います。しかし、農業経営にとってスマート農業だけでは成り立たないのが現状です。そこで、相可高校農業クラブでは農業経済の知識を生かせる活動にも取り組んでいます。その活動がSBP活動です。SBPとはソーシャルビジネスプロジェクトの略で地域の課題をビジネスの手法で解決していく取り組みでNPO法人の設立を皮切りに園芸福祉活動、地域農産物を使ったコスメ開発、芍薬の普及を目標にした芍薬プロジェクト、伊勢茶の復活を目標にした伊勢茶普及活動、バイオマスのまちづくりを目指したバイオマス栽培の研究など地域の企業や団体とも連携した活動を展開しています。また、地域の食と農業を考えるために食物調理科と協働し新しいメニュー開発にも取り組んでいます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 兵庫県立山崎高等学校

森と食科 2年 坂元 絢美

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・SNS を利用しない世代にもインターネットは根付いているので、各学校のHP 以外にも農業高校や農業クラブの活動などを紹介するHP を作成する。
- ・それぞれの学校で販売イベントやセミナー、体験教室を開催し、地域の方が誰でも参加できるイベントを開催する。
- ・新聞や地域誌、地域のケーブルテレビなどを活用し、地域の方に見ていただく機会を増やす。
- ・地域のイベントに参加したり、地域に出かけたりするイベントを増やす。
- ・イベントや行事等で魅力を紹介するパンフレットなどを作る。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・新型コロナの影響もあり、地域との交流が減ってきたため、学習の一環として農業高校らしい農業・林業の交流体験会や清掃、防災ボランティア活動を実施するなど、課題解決やSDGsの両方につながる活動を行う。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・農業に対するイメージとして、きつい、汚れるなどのイメージもあるので、AIやICTを使っている農業があることをもっと知らせることが必要。私たちが学校の授業で学んでいるようなことを農業高校や農業に関する学科に通っていない生徒にも農業に興味を持ってもらえるように、授業や講演会を実施するなど他の学校に出前授業を行う。
- ・小学生や中学生、高校生など若い世代を対象のスマート農業の体験会、農産物の販売会などを実施し、興味を持ってもらえるようにする。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立新見高等学校  
生物生産科 3年 清水 優斗

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

### 現状

新見高校では現状、HPやブログを用いた情報発信を行っている。これに加えて、新見市唯一の県立高校である強みを生かして地方新聞社、地方テレビ局への積極的な取材依頼も行っている。

### 問題点

新見高校関係者や、学校の周辺地域以外で目に留まりにくい。

### 対策

県内で行われる各種販売会や行事への参加を積極的に行うことで、より広い地域へ向けて新見高校や、農業高校の魅力を知ることができる機会を作る。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

### 現状

現在の新見市は、人口当たりの高齢者の割合が非常に高く耕作放棄地も多く存在する。

### 問題点

農家の高齢化や後継者不足、耕作放棄地の増加

### 対策

農業に関して幅広く学び、若者の農業への興味関心を高める狙いをもち、様々な団体及び学校との交流を通して農業の魅力を伝えていく。また、農業関連進路の選択者を輩出するという面でも地域の課題解決へ繋げていく。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

### 現状

授業で学習したスマート農業の事例など、本校での栽培管理への導入を検討したものもある。しかし、予算不足や経営規模に合わない等の問題点から、その多くは導入を断念している状況である。現在本校で取り入れている事例としては、自動灌水装置、家畜舎内の見守りカメラなどがある。

### 問題点

スマート農業を取り入れる際の金銭面、規模の面でのハードルの高さ。

### 対策

校内では導入が難しい設備は、県内の大規模農場への見学や、他校の事例を参考に学習し、活用可能なものについて再検討を行う。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 愛媛県立伊予農業高等学校  
園芸流通科 2年 大西 愛莉

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・野菜や草花の栽培を、学校近くの保育園や幼稚園の、子供たちとすることで子供を通してその保護者にも学校の魅力が伝わるようにする。
- ・学校外の販売などを行って、自分たちが育てているものを通じて、日頃の活動を近くの住んでいる人たちに伝える。
- ・自分たちの出身中学校に行き、自ら学校の魅力について中学生に伝える。
- ・夏休み中の学校体験に、実際の農作業の体験を増やして、農業高校の特徴がより伝わるようにする。
- ・校内販売だけになっている商品などを、期間限定などで定期的に校外にも販売をして、もっと必要としている人に手軽に届けられるようにする。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・フラワーロスの問題を減らすために、近くの花屋さんやタッグを組んで、お店で売れ残った花を、フラワーアレンジメントをして学校で売る。
- ・高齢者の農家さんに対して、学校の生徒が夏休み限定などで、農作業を手伝うことによって、自分たちの知識や経験も積みつつ少しでも、高齢者の農家さんの負担を減らす。
- ・フードロス減らすために、学校で育てたものの中で規格外のものなどを、自分たちで調理することで、少しでも廃棄する野菜を減らす。
- ・学校で作っている野菜や、草花・果樹などの一つ一つの品質を上げ、それを特産品化やブランド化などを行うことで、そのものを全国に発信することで学校の活動を伝えつつ、学校に入学したい人を集めることで少子化を抑える手助けをする。
- ・学校で育てた作物を、発展途上国や紛争の多い国に支援物資として贈る。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・20代や10代後半の人を中心に、農業に興味がある人を集めて1日、学校での農業体験を通して農業がどういうものか深く知ってもらう。
- ・農業に対して少しでも興味がある人に向けて、実際に自分たちが学校で使っていることを通して、スマート農業のデメリットとメリットを伝える。スマート農業の今の実態をもっと広めることによって、今までの農業の重労働であるというイメージを少しでもなくしていく。実際にスマート農業で使う、ドローンの操作などをして、実際にはどのような感じになるのかもっと現実的に考えられるようにする。
- ・20代の人向けに、自分たちで農業の魅力を伝えることで、若い人により興味を持ってもらう。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 熊本県立菊池農業高等学校  
園芸科 2年 松下 翔

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

定期的に農産物販売会を実施する。

本校の園芸科では、毎年7・8月頃にかけて、果樹園にてマスカット・ベリーAや巨峰など多くの品種のブドウを販売している。地域の方々に農産物を販売することによって、農業高校の魅力を感じてもらえると思う。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

「総合的な探究の時間」を通して、地域の課題解決に向けて調べ学習に励んでいる。熊本県菊池市では人口減少や鳥獣被害が増えている。私は以前に鳥獣被害対策研修会に参加し、被害状況や猟銃の使い方、箱罠の仕組み等を学んだ。また、阿蘇市へ出向き、キジの放鳥などを体験した。高校生の時にこのような貴重な研修に参加し、18歳になって狩猟免許を取得してはどうだろうかと考える。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

工業化が進み、農業を知らない若い世代の人々に、農業に興味を持ってもらうには、まずはAIやICTに頼らない“人”の手による農業を体験してもらうことがより効果的と思う。農業は3K（きつい、汚い、危険）のイメージがあり、農業未経験者にとって印象がよくないと思われる。今後の農業を普及させるには、まずは農業高校にも最新機械の導入を徹底し、精密化・省力化を実現させ、効率よく農業ができることを伝える。一連の流れを経験することで、今までの印象を変えていくべきだと思う。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 福井県立若狭東高等学校  
生活創造科 3年 高田 栄  
生活創造科 3年 仲村 美羽

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・地域に向けてポスターやチラシを作成しPRする。
- ・ケーブルテレビや地元のニュースなどの放送を利用して成果や取り組みを伝える。
- ・イベントを行う際に、地元新聞などで取り上げてもらう。
- ・実際に保護者や地域の方に学校に来ていただき、取り組みを見ていただく。



## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・タンポポ調査の依頼。クラスごとに見分け方や間違えてはいけない植物などを紹介し、より取り組みやすく工夫している。
- ・農業クラブ総会の開催。クラブ員としての意識づけを高めることを目的としており、農業クラブについての説明や執行部紹介、年次大会に出場する選手の紹介をしている。
- ・新聞を発行し各クラスに掲示したり、校内の掲示板を利用して活動内容や競技の説明、大会結果等を掲示したりして他学科の生徒にも情報を提供している。
- ・10月に開催される本校の学校祭では、展示ブースを設け活動報告や大会結果を掲示するとともに、参加型のイベントとして「農業鑑定競技に挑戦！」と題して本校が出場している「園芸」「農業土木」「生活」の問題から5問ずつ出題し、校内外の方に何問正解できるか参加していただいた。

地域の課題解決につなげるためには、クラブ員、学校、地域が協力して活動を進めていくことで、学校農業クラブ活動への意識が高くなり、さらなる活動の活性化が進んでいくと考えられる。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・食べ物（好きなもの、嫌いなもの）がどんな原料できているか、その原料はどこからきているのかを考え、小中学校で出前授業をする。
- ・自動走行トラクターやドローンなどの機械を実際に見たり操縦したりする場面をつくる。
- ・本校にある植物工場などの施設の中で、スマート農業ができないか考えてみる。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック連盟 秋田県立大曲農業高等学校

食品科学科科 2年 鈴木 万葉

生活科学科科 2年 佐藤 美音

生活科学科科 2年 森本 美桜

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

本校では、地元小学生との田植え・稲刈り交流実習や夏休みから2学期にかけて週に1度本校敷地内にあるアグリマーケティングハウスでの農産物販売、野菜部ではニコニコ農業塾と名付けて地域の方々を招待して播種から収穫まで行ったり、食品科学科ではジャム製造の講習会を行ったりしています。このような活動により幅広い年齢層の方々と交流するとともに私たちの日頃の学習を体験してもらっています。参加人数が限られてしまうことが難点ですが、各御家庭に戻って家族と体験した話をしていただけたら農業高校の魅力を発信することに繋がると考えています。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校果樹部の活動を紹介します。秋田県仙北市には世界的に有名な玉川温泉があり、源泉付近には湯の花と呼ばれる酸性硫黄の未利用資源があります。果樹部ではこの資源の有効活用法について研究をしています。イネの種子消毒方法として化学合成農薬や微生物農薬、温湯消毒や次亜塩素酸水による消毒法があります。この「酸」に注目し、湯の花をイネの種子消毒に活用しました。また、酸性度の強さと玉川温泉源泉付近に雑草が生えていないことに着目し、消毒後の廃液を酸性土を好むブルーベリー栽培の除草に利用しました。このことから地域資源への理解を深めるとともに、課題意識をもって日頃の学習に取り組むことが大切だと考えます。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

本校では水田の水管理システム、トラクタ等の自動運転システム、ドローンによる薬剤散布、畜舎のモニタリングなどでスマート農業を実践しています。生徒はこれまで経験したことのない機械の操作などに興味を持って勉強しています。またドローンや大型特殊の免許を取得している生徒もいます。スマート農業によりこれまで体にかかっていた負担が大幅に軽減され、作業時間も短縮することができ、大規模面積の農業経営を行うことが可能です。しかし、機械やシステム導入に莫大な費用がかかってしまいます。そこで、農業経営を学び、収支を安定させる算段をつけることができれば、「楽しい、稼げる農業」をかかげ若い人にも興味を持ってもらえるような産業にすることができると考えています。

# 参加者課題レポート

## 第2分科会 第6会場

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第6会場	岡山県立高松農業高等学校	山形県立置賜農業高等学校

## 第2分科会 第6会場

### 【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	福島県	相馬農業高等学校	生産環境	1	平井 美桜
2	群馬県	勢多農林高等学校	植物デザイン科	3	樺澤 詩織
3	埼玉県	秩父農工科学高等学校	農業科	2	山中 優那
4	東京都	園芸高等学校	動物科	2	石井 夢花
5	神奈川県	相原高等学校	畜産科学科	3	峰岸 果穂
6	新潟県	加茂農林高等学校	環境緑地科	3	渡邊 悠生
7	長野県	木曾青峰高等学校	森林環境科	3	竹澤士音
8	愛知県	鶴城丘高等学校	総合学科	3	加藤 春花
9	滋賀県	長浜農業高等学校	農業科	2	田中 そら
10	鳥取県	倉吉農業高等学校	生物科	3	土井 誠竜
11	岡山県	真庭高等学校	食農生産	3	松岡 悠太
12	福岡県	福岡農業高等学校	食品科学科	1	橋本 青依
13	沖縄県	北部農林高等学校	熱帯農業科	2	宮城 寧生

### 【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	岡山県	高松農業高等学校	農業科学科	3	杉山 怜菜
15	岡山県	高松農業高等学校	園芸科学科	3	市田 紗梨
16	岡山県	高松農業高等学校	畜産科学科	3	小河原 みゆり

### 【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	山形県	置賜農業高等学校	生物生産科	2	船山 優希
18	山形県	置賜農業高等学校	生物生産科	2	渡部 心真
19	山形県	置賜農業高等学校	食料環境科	2	植村 航大

## 「地域課題とSDGs達成に向けた高農の革新的アプローチ」

中国ブロック 岡山県立高松農業高等学校

農業科学科 3年 杉山 怜菜

園芸科学科 3年 市田 紗梨

畜産科学科 3年 小河原みゆり

### 1 はじめに

中国ブロック連盟は鳥取、岡山、広島、島根、山口の5県で構成されています。中国地方は中山間地域を多く抱えており、人口減少とクラブ員の減少が年々進んでいます。地域には若い力が乏しいため、学校に対してさまざまな要望が舞い込んでいます。

岡山県は、北部に中国山地と盆地、中部は吉備高原などの丘陵地、南部は平野に大きく分けられます。北部は山と温泉に、南部は穏やかな海と多島美に恵まれ、美しく彩られた瀬戸内海が広がります。この自然に恵まれた岡山県では、白桃、マスカット・



図1：県内の加盟校と特産品

オブ・アレキサンドリア、ピオーネなどの生産が盛んな他、岡山備南千両なすや黄ニラなど全国の市場でも評価の高い農産物が生産されています。岡山県連盟は井原高校、高松農業高校、高梁城南高校、新見高校、真庭高校、勝間田高校、瀬戸南高校、興陽高校の8校で組織されています。

### 2 高松農業高校について

明治30年(1897年)に本校の前身となる岡山県農事講習所が御野郡伊島村(現岡山市北区津島)に開所され、本年度で創立127年の歴史と伝統ある学校です。農業科学科、園芸科学科、畜産科学科、農業土木科、食品科学科の5学科で構成され、「礼儀正しい生徒の育成」「確かな学力の育成」「豊かな心の育成」を目指しています。



図2：高松農業高校玄関

### 3 高松農業高校の取り組み

- (1) ペレット化した植物残渣による雑草抑制資材の開発【研究のきっかけ】

学校近隣の吉備中央町の方々から「草刈りが大変」との声を聴き、地域の方々の助けになりたいとの思いから、雑草抑制資材に関する研究を始めることにしました。また、緑地管理や農業の現場では大量の剪定枝葉や栽培後の茎葉が植物残渣として排出されます。これらの2つの地域課題両方について対処することのできる効率的で実用的な解決策を見つけることを目指し、今回の研究を進めることに決めました。

(畜産科学科)



図3：畜産科学科の研究メンバー

近年は化学農薬の使用について厳しい目があり、環境問題の観点からも除草剤に代わる新たな資材が求められています。そんなとき、「農業と環境」や「総合実習」で「クスノキの落葉を畑にまいてはいけない」と学んだことから、我々は「アレロパシー」に着目しました。アレロパシーとは、植物が個体外に放出する化学物質が他の生物個体の成長を抑制する現象のことです。そこで「廃棄される植物残渣にアレロパシー活性がある場合、除草剤（化学農薬）に代わる雑草抑制資材として活用できるのではないか」と仮説を立て、検証に取り組みました。利用できる資材は校内で探し、本校のシンボルでもあるクスノキの落葉、栽培後のトマト茎葉、脱穀後のもみ殻、キウイの剪定枝、マウスの敷料に使用しているシュレッターダストを選定しました。

#### 【研究①】アレロパシー活性の検証

二層の0.5%寒天培地で各種資材を挟み、上層の表面にレタスの種子を5粒ずつ播種し、25℃で48時間培養した後に各区の発芽状況を調べました。シュレッターダスト、キウイ剪定枝、もみ殻では対照区と比較して有意差は認められませんでした。一方で、トマト茎葉とクスノキ落葉では対照区と比較して有意差が認められました。

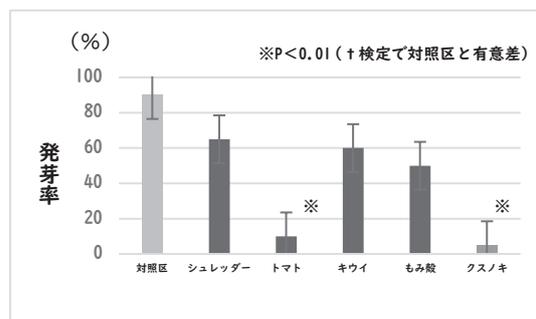


図4：植物残渣がレタスの発芽率に及ぼす影響

#### 【研究②】抽出液の抑制効果試験

各試験物質の抽出液でも同様の効果があるか調べるため、コマツナによる発芽抑制試験を実施しました。研究①の結果から、最も抑制効果が少ないシュレッターダストと比較材料のクスノキ落葉を除く4区で実施しました。各種資材を50倍の蒸留水内で30分間攪拌して抽出し、25℃で48時間培養しました。その結果、トマト茎葉、キウイ剪定枝で有意に低い値になりました。

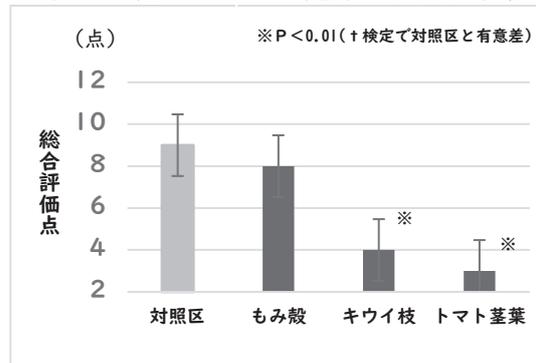


図5：植物残渣がコマツナの発芽に及ぼす影響

#### 【研究③】栽培試験による発芽抑制効果の検証

研究①および②の結果をもとに、扱いやすさを考慮した固形のペレットを試作し、栽培試験を実施しました。実験にはコマツナの種子を供試しました。水によるペレットの膨張率を調べるため、メスシリンダーに各資材を入れた後、水を加えて一日保持し、膨張率を測定しました。1週間後に各区の発芽状態、上胚軸長、根長を測定したところ、トマト茎葉区、キウイ剪定枝区で発芽抑制効果が認められました。また、膨張率試験ではどちらも2倍ほどに膨れ上がり、発芽抑制が期待できる結果となりました。



図6：栽培試験の様子

#### 【研究④】フィールド試験での実証

発芽抑制に確証が得られたことから、フィールド試験を実施しました。トマト茎葉ペレットとキウイ剪定枝ペレットを施用した後、1か月間放置し、状況を観察しました。キウイ剪定枝区では3週間ごろから数本のメヒシバが認められましたが、トマト茎葉区では4週間後も全く生えてきませんでした。こうして、廃棄資源によるトマト茎葉ペレットの雑草抑制資材が完成しました。

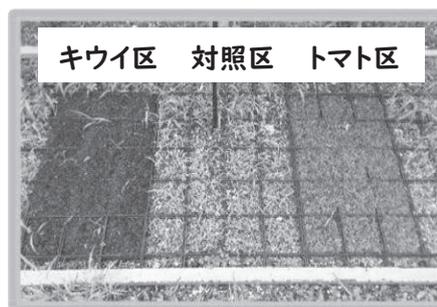


図7：フィールド試験の様子

## 【結論】

この取り組みを通して、廃棄される植物残渣を活用したペレットが、効果的な雑草抑制資材として機能することが分かりました。農業からの残渣を利用することで、廃棄物の処理問題を軽減でき、環境負荷の低減と作業負担の軽減が期待されます。この取り組みは、SDGsの「12 つくる責任、つかう責任」と「15 陸の豊かさを守ろう」に深くかかわり、持続可能な資源利用を行うことができます。ペレットの利点や使用方法、環境への影響については説明会を開催し、知識を共有する活動をしていく予定です。今回の研究は、吉備中央町の方からの声掛けをきっかけとして始まりました。学校がプロジェクトの成果や学習の成果を分かりやすく可視化し、地域に知らせることで、農業従事者とも情報を共有することになり、成果の普及や実用化を促進し、最終的には地域課題解決やSDGsにつながると考えられます。

### (2) 高校生食料自給率向上会議（コメット）（食品科学科）

#### 【研究のきっかけ】

食料自給率の低下に影響を与えている食材にはどのようなものがあるのか調べたところ、日本では、主食として小麦粉を使用した食品が多く、小麦粉の大部分は輸入を占めている事が分かりました。一方で、米は国内生産で賄えるため、米粉を使用することで米の消費拡大につながり、食料自給率を向上させる一歩になるのではと考え、研究を始めました。

このチームは、令和5年3月、食品科学科2年生の有志が集まり発足したグループで、「食品科学科の学びで社会をイノベーション！」を合言葉に始動しました。チームには、「コメット（主体的に関わる、結果を約束する）」と「コメ（米）」をかけて、「コメット」という名前を付けました。

研究開始にあたって参加したシンポジウムで全てのテーマに共通していたのは「SDGs」です。その経験から、チームの最終目標として掲げたのが「日本の食料自給率向上」であり、SDGsの17の目標のうち、「2 飢餓をゼロに」、「12 つくる責任 つかう責任」の解決に向けて、さらに具体的活動目標としてより貢献度の高い「米粉の消費拡大」を掲げ、短期的目標を「米粉加工品の商品化」としました。

#### 【研究①】 研究についてのアンケート調査

4月22日本校での春のふれあい市、4月30日造山古墳での古墳祭りにおいて、米粉に関するアンケートを実施しました。アンケートの結果は、「米粉加工品を食べたことがある」「自給率向上のためなら、もっと食べたい」という意見が大半で、「身近に加工品があれば、是非食べたい」という消費者ニーズを強く感じました。

#### 【研究②】 開発商品の選定

アンケートの結果をもとに、開発商品の選定を始めました。選定にあたり重視した点は、商品の安全性、製造の容易さ、若年層消費者のニーズ、今年度中に販売可能であることの4点です。主食に代わるような製品についても検討を行いましたが、まずは気軽に手に取れる商品を開発することにし、コメット第1号の商品を「米粉クッキー」に決めました。



図8：トマト茎葉ペレット



図9：関連するSDGsの目標



図10：食品科学科の研究メンバー

### 【研究③】米粉クッキーの開発

実際に試作を行う中で、米粉 100%では生地がまとまらず、商品としては製造不可能な状態に陥りましたが、試行錯誤を重ね配合を工夫することで、米粉 100%でも生地をまとめることが可能になりました。牛乳を加える配合の場合、逆に生地が流れる傾向がみられましたが、製造段階でバターをホイップする工程を極力抑えることで粘度と形状を保つことができたため、アイスボックスクッキーで商品化が決定しました。また、吉備中央町の郷土料理である「クサギ菜のかけめし」が令和 4 年度文化庁の 100 年フードに選ばれました。本校同窓会会長からの紹介もあり、吉備中央町のクサギ菜を使った米粉クッキーも作ることにし、地域資源の有効活用にも力をいれました。



図 11：製造の様子と完成品

### 【研究④】米粉マフィンの開発

米粉クッキーの開発がある程度軌道に乗ったことから、新商品の開発に乗り出しました。第 2 弾の商品はチームでの相談の結果「米粉マフィン」とし、さらなる米粉消費量の拡大を図ることにしました。開発の上では、レシピの 1 からの組み立てやフレーバーの検討などを行い、自校で製造したイチゴジャムを加えるなど試作品の製造を繰り返しました。その結果、プレーン、イチゴジャム、クサギ菜の 3 種類で米粉 100%マフィンの商品化を行うことができました。



図 12：米粉マフィン

### 【研究⑤】新商品販売

出来上がった商品の販売については、米粉の調査研究でお世話になった吉備中央町観光協会の紹介で、町内の施設、「道の駅かよう」と「道の駅かもがわ円城」で複数回実施しました。販売の際にはレシピを同封することで、家庭でも米粉を用いたお菓子づくりができるようにし、一般家庭への米粉利用の普及を目指しました。



図 13：販売会の様子

### 【結論】

この取り組みを通して、米粉 100%のクッキーとマフィンを開発し、商品化に成功しました。また、両方の商品について、吉備中央町の特産物であるクサギ菜を有効活用し、地域活性化に役立つ話題性のある商品を開発することができました。今後はより安心な商品を目指して成分分析などを行う他、この成果を広めるために、校内での販売会を開催し生徒に活動や米粉の良さを伝えることや、販売会だけではなく SNS でレシピを公開することで米粉を用いたお菓子を普及する活動を行っていく予定です。この事例から、地域の商業施設と連携し、近隣市町村の特産物を使った研究や商品開発を通じて地域全体の連携を深め、共に地域課題解決に取り組むことが地域課題解決や SDG s 推進のために必要であると考えられます。

### 4 終わりに

プロジェクト活動等や学習の成果を地域に実践的に還元し、地域社会との連携を強化することが、活動を行っていく上でも普及する上でも大事だと考えます。また、持続可能な方法を採用し、環境への配慮を行うとともに、資源の効率的な活用を心がけることで、SDG s の理念に沿った活動が実現できることが分かりました。クラブ員が一丸となり、単位クラブとして、あるいは県連盟、ブロック連盟で協力した活動ができれば、より効果は高まると考えられます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 福島県立相馬農業高等学校  
生産環境科 1年 平井 美桜

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

相馬農業高校では、学校ホームページやInstagramにて情報発信をしている。SNS以外の情報発信の方法として、新聞への記事掲載が挙げられる。本校玄関前に「フラワーアート」を設置した際には、多くの新聞社に取材を依頼し、概要や生徒の感想などが写真とともに掲載された。他にも南相馬市との連携協定では国の重要無形民俗文化財である「相馬野馬追」での市長の騎乗馬の提供や行列への参加に協力する様子がテレビで放送された。

今後もSNSへの投稿に加え、新聞社などへの情報発信を積極的に行うことで、多くの年齢層へ農業高校の魅力を発信していきたい。



## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校は13年前の東日本大震災により甚大な被害を受けた、福島県の相双地区にある。本校では復興を最先端の技術で後押しするイノベーションコースト構想により、先端技術が導入されている。なかでもスマート農業について実践的に学ぶことができる太陽光使用型植物工場ICT温室や古着を再利用・加工して作られるポリエステル媒地での作物栽培などの活動は、これからの農業を支えていく生徒たちにとって、有意義な学びとなっている。収穫された生産物は「相農ショップ」という地域の方々向けの販売会で販売され、これらの取り組みによる作物栽培を知ってもらうことができる。また、各学科では地域との連携事業を通して各科の取り組みを幼稚園や小中学校へと伝える機会が設けられている。相馬農業高校では、郷土芸能の伝承や相馬野馬追への協力などにも力を入れており、学校行事や部活動などを中心に学校をあげて協力し、南相馬市や地域との連携も図っている。これらの取り組みを通して生徒一人ひとりが先端農業や地域の復興を意識して学習していくことが重要である。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

本校の生産環境科、野菜班では、幼稚園との連携において「植育から始まる食育」活動を行っている。幼稚園の先生方に依頼し、古着を集めポリエステル媒地の原料を回収する。古着を加工したポリエステル媒地や野菜苗を幼稚園に提供し、一緒に栽培をすることで、本校での取り組みを知ってもらうことができた。秋には、幼稚園の園児たちを農場に招待し、高校生と一緒にサツマイモ掘り体験を行った。幼い頃に農業の体験を行うことで、農業や食に関する興味を持ってもらえるようにと想いを込めながら行っている。食品科学科では、「生徒が先生」の活動にて、食に関する興味・関心を高める活動を行っている。生徒たちが先生となり中学生に対し、食品加工の方法などを伝えている。若い世代でSNSを活用して、これらの取り組みを積極的に発信していきたい。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立勢多農林高等学校  
植物デザイン科 3年 樺澤 詩織

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

私は、SNS以外で情報発信をする手段として次のようなことが考えられると思う。1つ目は、地域にある高校生が利用する駅などで、多くの人に農業に触れてもらえるように学校の農産物や加工品の販売や、農業に関する体験コーナーを設けることだと思う。このことは、駅を常時利用している人だけではなく、地域を訪れる観光客にも効果があると考えられる。2つ目は、各県の農業高校が連携してお祭りや農産物の即売会などを開催することが挙げられる。このことで、より多くの人に農業の魅力を伝えられるきっかけにもなる。3つ目は、従来からあるラジオ、新聞のチラシ、テレビなどで多くの年齢層にPRできる媒体で魅力を発信することなどが挙げられる。この他にも、ショッピングモールやデパートなどの商業施設に「体験コーナー」、「学校の農産物の販売や体験コーナー」、「飲食店でのメニュー化」なども魅力を発信する手段として有効だと思う。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

現在、学校で様々な学習をしており、授業の中や上級学校の講義などを受け、廃棄物を出さないような農業についての学習をした。これらのことはSDGsにつながると私は考える。具体的には、現在使用しているビニール製のマルチから生分解性のマルチに変更し、土壌への環境を配慮することが挙げられる。また、食品の残りや食品廃棄物の再利用ができるようにコンポストの利用もよいと考える。食品廃棄物については、フードロス削減できるように、食材の提供方法やメニューの改善も検討する。この他にも、省エネルギー型の生産管理の着手などが挙げられる。地域課題解決には、人口減少・少子高齢化・地域経済の衰退への対策が求められている。また、業務削減や効率化、移住者の獲得なども重要視されていることから、これらについても取り組んでいきたい。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業は、兼ねてより、「泥臭い」というイメージがあり若い世代より敬遠されている。そのため、スマート農業による先端技術の活用による若い世代に良いイメージを持ってもらうことが重要であると考えられる。特に、若い世代に興味をもってもらうには、共感と共創が必要なことから、農業の先端技術について知ってもらうことや米ストロー等の話題性のある物を活用した体験をしてもらう必要があると考える。これらの活動から、農業という産業は、若者に対して身近な存在であると認識してもらい、後継者でなくても、新規就農または雇用就農ができる産業であると思えるような職業であるとアピールする活動をしていきたい。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立秩父農工科学高等学校

農業科 2年 山中 優那

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

情報の発信は、情報を受信する側がどのような人を対象にするかが重要だと考えます。今回のテーマである SNS 以外でとなっていますが、SNS を利用して情報を見ることのできる人はスマートフォンやインターネットを利用することができる人が受信者と考えられます。スマートフォンやインターネットを利用しない人に対して、農業高校の魅力を発信する手段について以下のように考えました。

①SNS を利用しない人が利用している場所へのポスターの掲示。

②町内会の回覧板。

③人と人との繋がりから農業高校の魅力を伝えること。

SNS を利用しない人に対しては、スーパーマーケットや公共施設などへ文化祭のポスター掲示などをして、情報発信することが効果的だと考えました。

また、農業高校は生産物などを百貨店や商業施設等で販売をする機会もあると思います。地域と連携しながら情報を発信していくことも必要だと思います。

農業は人と人との繋がりがとても大切な職業だと考えています。農業高校の魅力を様々な方法で発信することは大切だと思います。農業高校の取り組みや生産物が「良い」と思ってくれる方が増えることで、情報を受け取った方が様々な方法で広めていただけたらと思います。SNS を含め、様々な方法で農業高校の魅力を発信していきたいと思っています。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

各学校で取り組む内容は地域の特色にあった内容を行っていると思います。本校では、ブドウの栽培でこの地域特有の品種の栽培等に取り組んでいます。地域との方との連携や環境に配慮した持続的な観点で栽培に限らず取り組むことが必要だと思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

各学校でスマート農業が取り入れられている学校がどれほどあるのかわかりません。しかし、現在は SNS やインターネット等で情報を簡単に取り入れることができます。

スマート農業がどのようなものか理解して、スマート農業を取り入れている農家や施設等を見学する際に撮影するなどして情報発信をすればよいと考えます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立園芸高等学校  
動物科 2年 石井 夢花

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

都立園芸高校では、学校内外のマルシェでの販売活動を通して一般の方への情報発信をしています。マルシェでの販売では、農業高校生と一般の方が直接話すことで、農業高校に興味を持ってもらいやすくなると思います。また、販売したものについてのパンフレットを配ることでより理解が深まると思います。私は、このような販売活動だけではなく、体験学習を通して農業高校の魅力を発信して行きたいです。具体的には、学校内外の敷地で播種から収穫までを農業高校生と一緒に体験して貰うことです。これは、自分の畑を持つことが難しい人や、近くに畑がない人でも農業を手軽に体験でき、農業高校についても知ってもらう良い機会になると考えます。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

日本の農業は、後継者不足が最も深刻だと考えます。また、農家さんが減ると、生産物も減少してしまう可能性があると思います。そこで、中高生を対象にした数日間のインターンシップのような農業体験をしてもらうことを提案します。私の妹は野菜が嫌いなのですが、小学校でトマトやオクラなどを育てたことで野菜を食べるきっかけになり、野菜嫌いを克服することができました。このように、自分たちが食べているものがどのように作られているのかを知るだけでなく体験して貰うことで、食や農業に興味を持ってもらうきっかけになると思います。これらの活動は、SDGsの目標2「飢餓をゼロに」目標8「働きがいも経済成長も」目標9「産業と技術革命の基盤をつくろう」の達成に貢献できると考えます。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

私は、クラウドファンディングを活用したいです。スマート農業は導入コストが高いため、簡単には導入できないと思います。そこで、クラウドファンディングを用いてスマート農業を導入するための資金を集めます。スマート農業についても説明を書きおけば、若い世代に知ってもらうきっかけになると思います。そして、「農業は重労働である」というマイナスイメージを薄くすることにも繋がると考えます。また、スマート農業を用いて育て、収穫した野菜の一部を資金援助してくれた人にお礼として渡すことで、農業やスマート農業を身近に感じてもらうことができると考えます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立相原高等学校  
畜産科学科 3年 峰岸果穂

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

私は、より人の目につきやすいスーパーマーケットやバスなどに、農業高校についての張り紙を行うことや、農業高校で生産された生産物を地域の人向けに直売所やスーパーマーケットで、生徒が店頭で立ち販売を行うことによって、年齢層が限られずにより多くの人たちに農業高校の魅力を伝えられると思います。

実際に本校では生産された豚肉を「sagamix 相模大野店」で生徒が店頭で立ち、販売を行うことによって消費者の方たちに農業高校の魅力を知ってもらうことができている。また本校に設置されている直売所では、地域の方が購入しに足を運んでくださる姿をよく目にします。このような取り組みによって、まずは地域の方から農業高校の魅力を知ってもらうことが大切だと考えます。地域の人から少しずつ、多くの人に農業高校の魅力が伝わっていくと思うので、広告や販売の取り組みができればSNS以外でも魅力を発信できると思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

私は、プロジェクトⅡ類「国土保全・環境創造」の活動をSDGs活動に結びつけて研究を行っています。特にSDGsの「13 気候変動に具体的な対策を」と「15 陸の豊かさを守ろう」に着眼点を置いています。SDGs活動で学んだことを地域の人たちに伝えていく取り組みや、誰でもできるような簡易的なSDGsの取り組みを簡約化した研究キットやマニュアルを作成し、販売することで地域の人や、プロジェクト参加者以外の生徒に、SDGsについて考える機会を設けていくことが必要だと思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

Z世代の人たちは、生まれたときからインターネットが普及されている世代であり、仕事の価値観としても、「貢献」「成長」「やりがい」が上位を占めています。そのような価値観を刺激するような活動が必要であると考えます。例えば農家さんのところに取材に行き、現場の雰囲気ややりがいについて語ってもらうことや、スマート農業を用いたVTRの作成、農業科に在籍していない普通科の生徒向けに農業体験を行ってもらうなど、ITを活用した農業について興味を持ってもらうとともに、実際の農業経済はどのように回っているのか考えてもらうきっかけになると思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 新潟県立加茂農林高等学校  
環境緑地科 3年 渡邊 悠生

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

### (1) 販売する農産物の包装資材にQRコードを利用

販売する包装資材にQRコードを貼りつけ、読み込むと学校のホームページに繋がるようにします。ホームページに農業高校の魅力を伝える情報を掲載することで、農業高校や農業の魅力を発信できると考えます。

### (2) 農業高校の魅力を詰め込んだポスター新聞の作成

ポスターや新聞を作成して地域の様々な場所に張り出し学校や各専攻の様子、学習風景を記載する。

### (3) アグリスタディツアーの実施

本校では「アグリスタディツアー」という、地域の小学生を招き私たちが作物の定植方法や農業の魅力を伝える活動をしています。サツマイモとサトイモの定植だけでなくクイズ大会などを実施し、子どもたちが農業を楽しんで学べるように工夫しました。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

### (1) 竹の利用、食用化等に向けて

本校生物工学科では、地元の新潟県加茂市で課題となっている竹の活用と管理について、竹を肥料や竹カバーとして利用するプロジェクト活動を行っています。また今後は、竹炭や竹パウダーを使ったクッキー、竹水として飲料水や化粧水への加工などの計画もあります。

### (2) 食品ロスを減らす取組

本校の食品技術科では、食品ロスを減らすために、生産技術科が栽培した野菜や果物で、形が悪く売り物にならないものを利用した加工品を製造しています。例えば、野菜専攻で生産した形が悪いトマトをピューレに加工しています。その結果、ピューレにかかる生産コストを約1/4カットすることができました。今後こうした活動を他の専攻とも協力して、少しでも食品ロスが減らせるように取り組んでいきます。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

本校の環境緑地科では、ドローン検定（無人航空従事者試験）の取得に取り組んでいます。資格取得後にドローンに触れられる体験会等を、小中学生を中心とした若い世代に向けて開催することが良いと考える。

また、企業や先進的な技術を導入している農家と若い世代との交流会を行うことにより、農業の実情を聴くことができ、就農までのイメージがしやすくなることで農業に興味を持ってもらえるのではないかと考える。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県木曾青峰高等学校  
森林環境科 3年 竹澤士音

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

SNS以外で魅力を発信するとしたら新聞の掲載とラジオ放送をしてもらうことが一番多くの年齢層に届くと思います。新聞は多くの家庭で見ていると思います。その中でも比較的中年層の方がみており、実際私の家がそうだったように朝ご飯を食べているときなど家族に記事のことが話題に上がることがあると思います。ラジオも同じく、車の中で流している人や休憩中に聞いている人が多いと思うのでこの2つで農業高校の魅力を発信したいと思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

学校の中だけで活動の発表をするのではなく、学校に地域の方をお招きする、地域の人が聞くことのできるイベントを作る、また地域の企業に協力をしてもらい発表を実際に行動にすることが課題解決に繋がると思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

地域で農業を営んでいる農家さんに中学校などで農業の魅力を講演していただく、また実際に機械を動かす様子を見せていただいたり、実際にスマート農業は何かを体験してもらう事で、農業高校に興味を持つ人が多くなると思います。その結果農業に興味を持った生徒が農業高校に進学しスマート農業や農業経済をまなび興味を持ってくれると思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立鶴城丘高等学校  
総合学科 3年 加藤 春花

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

地域のイベントなどで、農産物を販売し、学校外での活動を増やすことが大切であると考えている。例として、マルシェの活用を考える。理由は、学生の親や高齢者をターゲットとし、高校生が育てた農産物や加工品を販売し、認知をしてもらう。また、販売をする際には、農業高校生が自ら販売することにより、農業高校の魅力を、会話を通じて直接アピールすることができる。と考える。

さらに、中学校や小学校、幼稚園・保育園などと交流し学ぶ活動を増やすことで、幼い時期から農業に興味をもつきっかけをつくったり、将来農業高校に進学したいという生徒を増やしたりすることができる。結果として子から親、親からその他の人へと農業や農業高校の魅力を伝えられることが可能であると考えている。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

学校内で育てた野菜や卵などを地域の方々に販売し、地産地消につなげることができていると考えるため、引き続き、学校内で育てた農産物は地域の方々に還元し続けたい。日々の学習では、自分たちで農産物を播種や定植から行い、責任をもって育てている。そのため、SDGsの目標12「つくる責任つかう責任」につなげることができる。

また、地域の方々に高校の敷地の一部を貸し出し、農産物をつくることのできる環境がある。地域の方々とは、手紙でやり取りできる機会があるため、この機会を用い、農業を長年続けている方々から、積極的に貴重な意見や知識をもらい、西尾市の課題である「農家戸数の減少」や「農業産出額の減少」の解決につなげていきたい。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

スマート農業では、ドローンやロボットを用いることがあるため、このドローンやロボットを活用していくべきと考える。若い世代は、農業など一次産業のような堅苦しく親しみにくいことには、関わる機会がほとんどない。少しでも興味や関心をもってもらうためには、スマホやパソコンが普及し、誰もが活用しているからこそ、ドローンやロボットといった、スマートフォンやパソコンに近いもので興味をもたせることが必要であると考えている。また、スマート農業では、スマートフォンから様々な情報を確認し、操作することができたり、トラクターの自動操舵システムを用いて容易に耕耘ができたりするということを伝え、実際に体験することで、農業へのハードルを下げる。と考える。

これらを実現させるためには、若い世代である高校生が自ら、実演や説明をすることで、若くてもできることを理解させていかなければならない。そのために、知識や技術を身につける機会に積極的に取り組み、地域の行事などで活動していくことがよいと考える。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立長浜農業高等学校  
農業科 2年 田中 そら

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- 地域での活動（販売、植栽、ふれあいスクール）を多く行う
- 新聞社に取り上げてもらえる活動をおこなう
- ボランティア活動を生徒が行う。
- 地域の方が生徒の活動を体験する企画を学校側が立案する。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- 家庭の生ごみを集めて、学校の堆肥と合わせて堆肥化し販売を行う。
- エコキャップの呼びかけ（今、何個集まっている。数の目標表示）
- 少子高齢化の問題を解決するために、高校生が農業の魅力を発信する（幼児の子にハーバリウム制作、押し花の体験）（本校で実施）

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- SNS等でのクイズ大会を企画する
- 農業のゲームアプリ作成
- 昔の農業と現代でのスマート農業の苦勞の違いを伝えるポスター作製

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 鳥取県立倉吉農業高等学校  
生物科 3年 土井誠竜

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

SNS等の魅力発信としては学校 Instagram等より学校行事などについて投稿、魅力発信に努めている。その他として地域みらい留学などで、県外生の中学生に対し情報発信、さらに様々なイベントや学校祭での販売を行うことで、地域の方に学校での活動を披露する機会を得ている。

この度の会議では、他校ではより幅広い年齢層に魅力を伝えるためどのように取り組みが行われているかを知る機会としたい。



図1 イオンモールで開催されたトットリハイスクールアドベンチャーの様子

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校果樹クラブでは、鳥取県で生産量の多い梨について、生産過程で発生する「剪定枝」に着目したプロジェクト活動を行っている。無駄になってしまう剪定枝から梨葉を生産、梨葉茶や染め物など作るなど、本来捨てるだけになってしまっていたものから新たな活用法を見出し、地域を活性化させようと努力している。

その他化成肥料の過剰使用を削減し作物栽培に取り組むプロジェクトや地域に防災用かまどベンチを普及する活動など地域課題に貢献するプロジェクトに取り組んでいる。他県でどのような取り組みが行われているか知る機会としたい。



図2 無駄になってしまう「梨選定枝」を活用した梨葉生産の様子

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

本校食品科、流通部門ではスマート農業の導入として自動操舵ができるトラクターの試乗や環境科でのドローンの使用など、最新の技術を授業内で触れる機会を作っている。この取り組みを中学校体験入学として中学生が本校の見学に来てくださる際には、見て触れる機会となり、より若い世代に興味関心を持っていただける機会提供を行っている。

さらに生物科でも高度な制御を行う「植物工場」での作物栽培にも取り組んでいる。農薬を使用せず養液栽培を行う清潔な栽培を実践しており新しい農業にも触れる機会が設けられている。



図3 環境科生徒がドローン操作について中学生に紹介する様子

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立真庭高等学校  
食農生産科 3年 松岡 悠太

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

**現 状**現在真庭高校では「まにこう新聞」を作成し学科での取り組みなどをまとめ、市役所に印刷したものを置かせてもらっており、HPでも公開している発信している。

**問題点**今は先生方が作成したものを発信していることと、3学科の活動をまとめているため、食農生産科・農業クラブ活動に限られた情報ではない。

**対 策**農ク役員が自分たちの言葉で、高校生目線の情報発信ができる新聞やポスターの作成を行い、中学校や市役所で配布してもらえるようにする。  
真庭市にはケーブルテレビの「真庭いきいきテレビ」があり、学校から取材依頼をすれば多くの行事に取材に来ていただける。他校のようにNHKなど一般のテレビ局や新聞などの報道による情報発信にも力を入れるべき。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

**現 状**総合的な探究の時間や課題研究、地域資源活用、生物活用で地域と連携した取り組みを継続して行っている。

**問題点**実際に地域の課題解決やSDG'sに繋がっているか意識してできていないこともある。

**対 策**自分たちの普段の授業や実習がどのように地域の課題解決やSDG'sに結び付けられるのか考えることも大切であると考えた。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

**現 状**真庭高校では先進農家研修やドローンの講習会などを行っている。その反面、農業関連の就職や進学については割合が少ない。

**問題点**実習や研修が進路選択にあまり結び付いていない。魅力が伝わっていない。学校では先生方、大人の目線での発信が多い。

**対 策**学校では圃場が限られるため、校内で使用できるスマート農業の機器を使った体験会と校外（地域の農家や機械メーカー）と連携した取り組みやそこで得た経験を伝えることで農業への興味を高められるのではないかと考える。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 福岡県立福岡農業高等学校  
食品科学科 1年 橋本 青依

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

現状として、農業高校に足を運ぶ人は限られているので、高校で魅力を発信することは難しく、より多くの人に広めるには不向きと考える。また、ラジオでの発信では若い年齢層の使用率が少ないため、多くの世代に魅力を発信できないのが問題点である。公民館や近所のコミュニティーセンターなどの公共施設にポスターや販売ブースなどを設置することで、広い年代層の人に魅力を発信できると思う。また、テレビは幅広い年代が視聴しており、議題として最適ではないかと考える。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

現在、SDGsの取り組みは世界規模で行われており、日本でも活動は盛んだが、みんなSDGsについて深くは理解しておらず、情報が発信されきれていないのが現状であり、問題点である。そのため、引き続き情報発信を継続しつつ、今までより分かりやすい図や文を使い発信していく。そうすることで、今までの発信と違う印象になり記憶に残りやすくなる。各自考えSDGsの広報活動や、身近なものでSDGsを実行できるものをポスターなどにまとめ、見た人が分かりやすいように発信していくべきだと考える。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

実態として、スマート農業について若い世代は理解がなく、農業にあまり興味を持っていない。また、スマート農業が身近で行われていないことや、設備投資にかかるコストが高いため、広く普及しておらず、若い世代を含む多くの世代にも知られていないのが問題点である。まずは私たちがスマート農業について学び、魅力や便利さなどを大衆に向け発信する。また、SNSを利用した情報発信も実用的ではないかと考える。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 沖縄立北部農林高等学校  
熱帯農業科 2年 宮城 寧生

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

実態として、SNS 以外での情報発信方法はあるがその認知度が低く、利用する年齢層も限られているため、多くの人に伝わっていないことが分かった。

より効果的に魅力を発信し興味を持ってもらう方法として、小学生や中学生は収穫体験を通して農業の楽しさを知る機会を作り農業高校へ興味を持ってもらう。また地域の方や親世代には地域行事や即売会において掲示板やポスターなどでの活動紹介や地域誌や新聞、テレビで発信することが提案された。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

実態として、「日本学校農業クラブ連盟」「農業クラブ活動」「SDGs」それぞれの知識、理解、認識が個人によって異なったまま、学習やプロジェクト活動が行われていることがわかった。

問題点として、「農業クラブ活動」は本来、地域課題を目的としているが、地域課題を世界的にまとめた「SDGs」が混在しているため、テーマ設定においてSDGs達成が目的になってしまっている。

解決策として、まず「日本学校農業クラブ連盟」「農業クラブ活動」「SDGs」について正しく理解する授業を行い、農業クラブ活動で地域課題を解決することが、SDGs達成に繋がることを認識することが必要である。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

実態として、農業高校生でもスマート農業について触れることがなく、知らないことが分かった。

問題点として、スマート農業の導入には多額の費用がかかり、田畑の面積も小さいため活用しにくい、国としてあまり普及していないため教育現場にも反映されていないことがあげられる。

解決策として、教育委員会で予算を組んでもらい、開発している会社や普及している国で学べる機会を通して得たことを、交流会や行事にて地域へ紹介、発信する。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立高松農業高等学校

農業科学科 3年 杉山 怜菜

園芸科学科 3年 市田 紗梨

畜産科学科 3年 小河原みゆり

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- 現状 SNS以外の広報手段としては、販売会での対面での広報や、新聞社、テレビ局による取材を用いている。
- 問題点 来校してくださった方にしか魅力が伝わらず、実際に取材に来てもらえる数が少ない。
- 対策 来校者に積極的に魅力を発信してもらえるよう、幅広い年齢層の目に留まるパネルやポスター（実習・活動等の様子）を活用する。  
昨年度の行事や準備の様子などをまとめ、生徒達で報道依頼を作成する。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- 現状 本校では地域課題解決やSDGsにつながる研究として各学科で有機農業や環境保全型農業、地域資源活用について様々な学習を行っている。
- 問題点 自分の課題研究が地域課題解決やSDGsにつながっていることに気がつかず、学習や研究を行っている。  
プロジェクト活動における課題選定を教員に任せている場合が多い。
- 対策 課題選定時に各自が、SDGsや地域課題について考えられる様、リーフレット（SDGsや地域課題）の配布などを行う。生徒が授業で学んだ知識をプロジェクト学習やプロジェクト活動に取り入れる。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- 現状 本校では、多くのスマート農業や農業経済の学習を行っている。また、近隣の幼稚園、保育園や小学校との交流学习を行っている。
- 問題点 実際に、スマート農業や農業経済について触れる交流活動はなかなかできていない。また、年間を通じた交流ではなく2時間単位の単発の交流が多いため、栽培・管理・消費までを一貫して学習をすることが困難となっている。
- 対策 学童保育の児童と放課後に交流しながら農作物の栽培・流通・販売・消費について年間を通じて実際の活動から学ぶことで農業経済や経営の知識を交流に活用し、それにドローンの操縦や自動かん水装置などスマート農業の観点を取り入れる。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック連盟 山形県立置賜農業高等学校

生物生産科 2年 船山 優希

生物生産科 2年 渡部 心真

食料環境科 2年 植村 航大

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

より多くの人に学校の魅力を伝えるためには、新聞やテレビなどのマスメディアを活用することが有効な手段になると考えます。私たちが普段何気なく行っている実習でさえ、地域の人からすれば珍しく、実習の内容を伝えるととても驚かれたりすることが多々あります。本校では地域の方との交流会や、販売会など際には積極的にマスメディアへ開催情報を提供し、取材依頼を行っています。

また、学校のPRポスターを作成し、地域のコンビニ・スーパー、小中学校、公民館などに掲示して、SNSを普段利用しない人にも学校の魅力が伝わるような手段が有効だと考えています。



## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

私は農業高校で行っている学習やプロジェクト活動のほとんどは、すでに地域の課題解決やSDGsで掲げられている多くの目標にリンクしていると認識しています。ただ問題点として、現在行っている活動がどのように社会へ貢献しているかが分かりづらいことが挙げられると思います。

今後の活動の発展のためにも、学習した成果やプロジェクト活動で得た研究結果および経験が、「地域や社会にどのように繋がっているのか。還元できているのか。」を、検証・評価していく必要があると思います。地域の方や大学等の専門機関など多くの関係者を巻き込んだプロジェクト発表会の開催などを企画し、学習内容やプロジェクト活動について遠慮のない意見を聞くことが重要だと考えます。



## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業をよく知らない若い世代の人たちは「農業は肉体労働で大変な割に儲からない」というイメージがあるように感じています。私は今後そうした「農業に対するマイナスイメージ」を払拭するような活動が必要だと考えます。

例えば、スマート農業の活用により効率的な農業を実践し成果（収入）を上げている農家と連携した活動（共同研究・普及イベント等）を行い、スマート農業のメリット・デメリットを正確に分析したり、若い世代の人たちにPRできる機会を増やすことが有効な手段だと考えています。そうした活動を続けていくことで、若い世代の人たちが「農業は大変だけど、儲かる仕事だ。」と思ってもらえるようになるのではないかと考えています。



# 参加者課題レポート

## 第3分科会 第7会場

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第7会場	青森県立名久井農業高等学校	山形県立新庄神室産業高等学校

## 第3分科会 第7会場

### 【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	北海道	静内農業高等学校	食品科学科	3	石川 緋奈子
2	栃木県	鹿沼南高等学校	環境緑地科	2	増田 球真
3	群馬県	吾妻中央高等学校	生物生産	3	青柳 詩
4	埼玉県	鳩ヶ谷高等学校	園芸デザイン科	2	村上 衣央菜
5	東京都	農産高等学校	食品科	2	國分 虎之介
6	山梨県	笛吹高等学校	食品化学	2	岡本 昂大
7	長野県	丸子修学館高等学校	総合学科	3	親松 友海
8	愛知県	安城農林高等学校	動物科学科	2	岩田 花
9	三重県	久居農林高等学校	環境情報科	3	増田 阿由
10	大阪府	園芸高等学校	バイオサイエンス科	2	木村 一樹
11	岡山県	勝間田高等学校	総合学科	3	井堀 志穂
12	山口県	田布施農工高等学校	生物生産科	2	河村 奈雄
13	佐賀県	伊万里実業高等学校	フードビジネス科	3	山口 優花

### 【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	青森県	名久井農業高等学校	生物生産科	3	川守田 めい
15	青森県	名久井農業高等学校	生物生産科	3	山形 葵
16	青森県	名久井農業高等学校	環境システム科	3	河門前 瑠壺

### 【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	山形県	新庄神室産業高等学校	農産活用科	3	矢口 瑠波
18	山形県	新庄神室産業高等学校	農産活用科	3	西田 夕夏
19	山形県	新庄神室産業高等学校	農産活用科	2	齋藤 翔汰

## 「NANO QUEST 80～未来へ舵切るセットプレー～」

東北ブロック 青森県立名久井農業高等学校  
 生物生産科 3年 川守田 めい  
 生物生産科 3年 山形 葵  
 環境システム科 3年 河門前 瑠壺

### 1 はじめに

本校は昭和 19 年、地元生産組合の根強い声から県立ではなく、組合立でスタートしました。あれから 80 年、地域とともに歩んできました。今回のテーマは、歴史と伝統を未来へ繋ぐ起点となる気がしています。というのも南部町は今、人口減少、担い手不足、農家の高齢化が差し迫った課題先進地域で、農業に興味を持つ若者の確保が喫緊だからです。

### 2 テーマの分析と活動目標設定

早速、役員定例会にてテーマを分析。解決に必要なポイントを「クラブ員の興味と知識レベル」、「興味の行動特性」、「農業への課題意識」の3つに整理しました。また、若い世代については、農業を学んでいる私達こそが、最も影響力のある若者と考え、クラブ員自身が興味を持つことを目指します。

まず、クラブ員の興味と知識レベルを調査。このとおり、低い状況にある上に、知っている項目にも偏りが見られます。スマート農業や農業経済がクラブ員自身に浸透していないことが明らかです。続いて、「パーチェスファネル」というフレームワークを学習。人が何かに興味を持つには、対象となるものを「認知」する必要があり、興味を持った後には対象外との「比較・検討」が行われ、納得が得られた後に「行動」に移るといふものです。

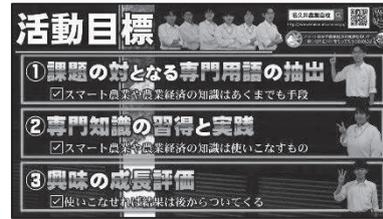
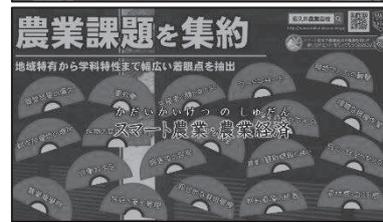
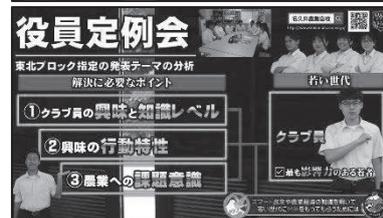
最後は、クラブ員が考える課題を集約。スマート農業や農業経済はあくまでも課題解決の手段です。このとおり、地域特有のものから学科特性等、多様な着眼点が挙げられました。

以上のことから活動目標は、①課題の対となる専門用語の抽出、②専門知識の習得と実践、③興味の成長評価の3つを設定しました。

### 3 活動実践①

まずは執行部にて、クラブ員が直面する課題の対になる専門用語をリストアップ。課題と対策を明確にすることで、活動の道標を示しました。それでは、これらに即した活動実践を公開します。

生産性がない割に労力を要する除草作業には、草刈りロボット講習を提案。ヤンマーのご協力のもと、圃場での実証試験を開始。傾斜地でも走行が可能です。GPS機能搭載のた



め、限られた場所での使用に適しており、安全面でも貢献度が高いことが分かりました。

人手も時間もかかる会計にはPOSシステムを提案。農産物販売ではA i r レジを導入。煩雑であった会計処理の効率化だけでなく、客層や時間帯、売上商品など経営分析にも活用しています。

現地に出向いた手作業による観測記録はクラウド気象センサーF a r m oにお任せ。携帯端末からのアクセスが可能で、現在の気象データはもちろん、過去のデータにも遡ることができます。積算温度からも求めることができ、農作物の生育予測に欠かせないツールとなっています。

これらの微気象データは温暖化など、将来の異常気象対策においても重要な手がかりになると考え、「地球規模の観測プログラム」に参画。気象データは日本だけでなく、世界の学生と共有。農業高校で唯一の「グローブ指定校」に認定されました。

開花日や果実の様子など些細な変化の見定めが必要な時期には、定点カメラを設置。こちらもクラウド管理しているため、携帯端末からの確認が可能となり、変化の見逃しを防いでいます。

作業負担は若い世代にも重要な問題です。クラブ員同士の体力差を補う支援として、アシストスーツを導入。これにより、農作業による身体的負担が大幅に軽減されました。

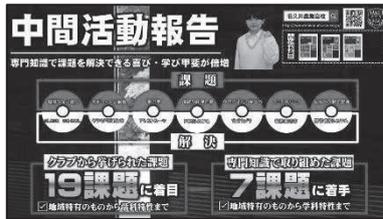
次は買い物弱者への支援。フードデザート問題は、間もなく全国の中山間地域に訪れるといえます。機械工作班では小回りの効く軽トラックの荷台をカスタマイズ。運搬だけだった軽トラックに販売機能も加えました。

常に作物の成長に適した栽培環境の制御は困難です。県内唯一、水耕栽培施設を完備する本校は、農業情報システムが充実しています。施設には、様々なセンサーが搭載されており、それらの情報は1台のモニターに集約され、環境変化を見逃しません。

#### 4 中間まとめと課題

以上ここまでをまとめてみると、高度な専門知識の味をしめ、興味を持つことに成功した私達ですが、激動の時代、教科書だけでは追いつけないことに気づきました。農場長に相談すると、高等学校農業教育の限界を教えてくださいました。産業構造の変化や教育評価の見直しによって、教科書は10年おきに改定されるそうです。そのため、教科書は基礎・基本は書かれていても最新情報ではないのです。そこで私達は、南部町役場職員とともに地域の未来を見据え、先端技術を学びに東京都調布市にあるN T T e - c i t y L a b oを訪ねました。





## 5 活動修正のヒント学習

ローカル5Gを活用し、4Kカメラや自動走行ロボット、スマートグラスなどから得られる圃場データをもとに栽培指導や収穫量を予測できる遠隔営農指導システム。

販売場所に近接して設置できるコンテナ式閉鎖型レタス栽培プラントは、鮮度や運搬コストなど様々な流通ロスを抑える仕組みです。

食材に高電圧を与えることで、長期保存と熟成を可能にする電圧冷蔵庫は、わずかな振動が水分の停滞を防ぎ、雑菌の繁殖を抑えます。

AIを活用してレジなしで決済を完了できる次世代型無人店舗スマートストアは、未来の直売所にも欲しい技術です。

生ゴミや食品残渣を再生可能エネルギーと液体肥料に変えるバイオガスプラントは、地域の資源循環を促進させます。

研修は衝撃の連続でした。しかし、私達はここで確信を得ました。集約的管理が求められる園芸主体の南部町では、大型機械よりもICTを駆使した農業が重宝されることを…。

## 6 活動実践②

真っ先に取り掛かったのが販売力の強化。名農には模擬農業法人を立ち上げ、農業経営の実践を学ぶ学校設定科目がありますが、せっかく作っても売れ残りがあるなど販売面で苦労していました。そこで、販売チャンネルを開設。これにより、栽培中や出荷前から消費者とのコミュニケーションが密になり、予約による契約栽培や事前注文が入るなど、農産物販売に革命をもたらしています。

続いて、遠隔作業の手始めにIoT灌水システムを導入。休日など登校しない日でも、天候を見ながら携帯端末から灌水操作が可能となりました。

アグリノートは、日々の栽培情報の記録を叶える営農支援アプリ。クラウド化されることで、管理作業や資材使用の記録、購入履歴などが次の学年に引き継がれていきます。

これらの蓄積は消費者への信頼にも繋がっていきます。いつ、どこでどのように作られたのかを透明化した本校初のトレーサビリティシステムです。2次元コードによる標示で農産物の生産から消費までの情報を追跡することができます。



最後は、Nano think tankの創設。昨年度、新設した農業クラブ図書館「本のはたけ」にはスマート農業や農業経済に関する最新情報が満載です。しかし、すべてを読破するのは困難。そこで、役員が気になる記事を見つけ次第、関係する課題研究班に素早く紹介。プロジェクトを始めとした農ク活動に反映されやすくします。

## 7 成果

活動検証1つめは、課題と専門用語のマッチング数です。役員のはたらきかけにより、多くの課題解決の道筋をクリアにしました。

活動検証2つめは、専門知識の学習成果です。課題に向かって知識を使いこなす体験をすることで、スマート農業や農業経済を学ぶ意欲と意義を繋ぎ合わせることに成功です。

活動検証3つめは、興味の成長評価です。アンケート調査から多くの方が興味を持つことに成功です。興味の観点の多くは、課題克服にポジティブな感情を抱くものでした。また、活動後の感想文からは、不満よりもアイデアを考えるようになった、工夫のしがいがあることが分かったなど、課題を前向きに捉える習慣が身につけていることが読み取れました。

## 8 まとめ

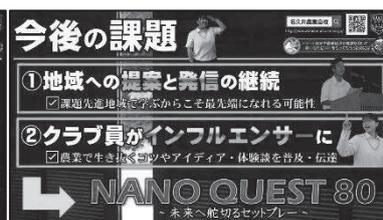
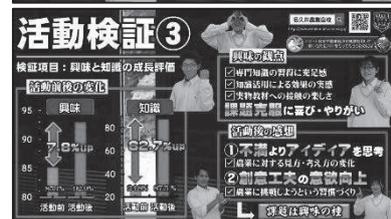
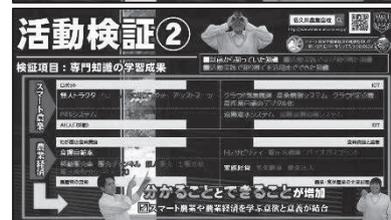
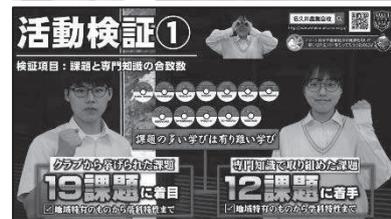
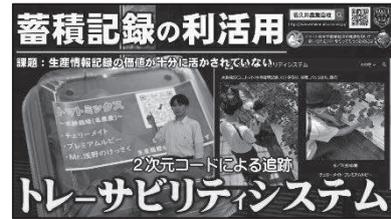
まとめてみると、次の3つのことが分かりました。1つは、課題から逆算して知識を得ることで認識が変わること、2つめは実践による認識は意識を高めること、そして、これらの蓄積こそが、農業にまっすぐに、未来にまっすぐな組織と化す、と結論づけました。

## 9 今後の課題

今後の課題1つめは地域への提案と発信を続けていくこと、2つめはクラブ員がインフルエンサーとなり、業界を盛り上げていくことです。

## 10 おわりに

先日、私達は開校記念日に合わせ、本校創設者の工藤清吾先生の自宅を訪ねました。ご家族からは、先生が地域農業の発展のために取り組んできた数々のエピソードを聞き、心を打たれました。私達も先生の「開拓魂」を引き継ぎ、今後あらゆるピンチをチャンスに変えていくことを誓い、発表を終わります。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道静内農業高等学校  
食品科学科 3年 石川 緋奈子

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

私たちの学校では、様々な手段で情報を発信しています。まず、報道や地域の広報誌への掲載です。クラブ員の日々の活動や成果を数多く取り上げていただいております。多くの人に農業高校の魅力を知ってもらうことができます。また、農業に関連するコンテストへも積極的に応募しています。昨年度は、レシピコンテストで入賞したクラブ員考案のスイーツが、北海道のコンビニエンスストアで商品化されました。これには、普段SNSを利用していない方にもたくさん声をかけていただき、学習内容を知ってもらうことができました。

次に、イベントの企画です。本校では小学生を対象とした交流学习や、販売会を実施しています。その際に、プロジェクト活動の内容をポスターにまとめて掲示をしたり、イベントブースなどを設けて、1人でも多くの人に情報を発信しています。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

私たちの地域はミニトマトの生産が盛んで、道内でも有数の産地になっています。しかし、収穫される約8%のミニトマトは小玉や変形などで売物にならない規格外品となり、廃棄されるという現状があります。そこで、この現状を改善したいという思いで、農業クラブ執行部が中心となり「規格外ミニトマトを使用したアイデアレシピコンテスト」を企画し、開催しました。地域の全ての小中学校にポスターを配布し、地域の課題について説明していく中で、この企画は多くの方から賛同をいただき、地域の振興局が共催としてサポートしていただけることになったほか、地域のホテルから入賞レシピのメニュー化が決定されるなど、高校生が主体となり地域を巻き込んだコンテストになりました。このように、まずは行動してみることが大切だと思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

若い世代の多くは、未だに農業に対してネガティブなイメージを持っている人が多いです。しかし、スマート農業の技術は驚くほどの速さで発達しています。私たちのプロジェクト学習では、野菜の栽培において、ハウス内に環境モニタリング装置を設置しています。この装置をスマートフォンと連動させることで、ハウス内の気温や湿度などの環境情報を端末からいつでも確認できるようになりました。また、データロガー装置でハウス内の気温を記録し続け、瞬時にグラフ化することができます。これにより、今まで休み時間に毎回記録のためハウスに行き、状況を確認する必要がなくなりました。

また、本校にはありませんが、自動操舵トラクターや、ドローンによる圃場管理を取り入れることで、農業者の負担になっていた作業の多くを楽にすることができます。この現状を多くの人に伝えることで、農業へのイメージが変わる人もいるのではないかと考えています。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立鹿沼南高等学校  
環境緑地科 2年 増田 球真

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

・鹿沼南高校では、小学生を対象に出前授業を行っています。普段私たちが学習している農作物の栽培方法や和牛についての勉強を小学生に教え、一緒にさまざまな活動をする時間になっています。小学生の皆さんも小学校の先生方も、いつも興味深く聞いてくださり、学校の良いPRの場になっています。こうした経験から、農業クラブ活動においても、小中学生を対象に、農業クラブ活動を紹介する会報誌を発行したり、農業クラブの大会や学校のイベントに小中学生や地域の皆さんを招待するなど、積極的に外に向けた活動をしていくのはいかがでしょうかと思いました。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

・鹿沼南高校では、地域の基幹作目である、盆栽や和牛など地域とかがわりの深いプロジェクト学習を行っています。今年度は、さつき栽培のプロジェクトを県大会で発表したところ、後日鹿沼市の市長さんやさつき栽培組合の方が本校を見学に来てくださり、農業クラブがきっかけで地域とのつながりを作ることができました。こうしたことから、積極的なPR活動をしていくことが大切だと考えます。また、プロジェクト学習に取り組む私たちも、将来は地域のリーダーになるという目標をもってプロジェクト学習や校外学習に取り組むことによって、積極的に地域に関わることになり、卒業後実際に地域の課題解決やSDGsにつながるような活動につながるのではないかと考えます。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

・鹿沼南高校では、ドローンを用いた栽培技術の学習をすることができ、実習の先生方が圃場で操作し、薬剤散布など見学することができます。ドローン操縦には講習や免許が必要ですが、実際に操縦してみたいと純粋に思います。農業クラブでも最新のICT機器や農業機械を用いた競技会などが開かれると興味を持つ人も増えるのではないかと思います。例えばドローンを使った農業技術競技会など、実際に触ったり、体験できたり、競技会として大会があったりすると、興味を持つ人も増えると考えます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立吾妻中央高等学校  
生物生産科 3年 青柳 詩

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

SNSでの発信は、中学生や若い世代の人たちにとっては、とても有効な手段だと思う。しかし、高齢者の方々は、インターネットやSNSを利用している人は多くはないと感じている。学校で行われる販売会では、高齢者の方々がたくさん来校する。そのため、SNSだけでは十分に農業高校の魅力を発信することはできない。そこで、SNSやインターネットに加えて、新聞やテレビに取り上げてもらうことも重要だと思う。地元の上毛新聞や群馬テレビに取り上げられると、イベントに来ていただけるお客様が多くなると先生が言っていた。また、紹介していただいた商品の売上も増えると、お店の人からも聞いた。このことから、農業高校の魅力を発信する手段として、インターネットやSNSに加えて、テレビや新聞にお願いすることも重要だと考える。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

学校の学習の中で、地域の課題について学ぶ機会がある。地域の課題を、栽培や飼育などに関わりを持って、課題研究の中で深めることで課題解決につなげることができるのではないかと考える。私の活動として、群馬県の育成品種であるトマト（あましずく）やイチゴ（やよいひめ）を栽培してる。認知度が低いという課題があり、より良いものを栽培しつつ、認知度を高めるという課題の解決に向けた取組を行っている。よいものを栽培することと同時に、規格外のものを利用して商品として販売することも目標にしている。企業に協力を頂くことで、カレーやジャム、プリンなどの商品化につなげることができた。地域の課題を知り、そしてその課題の解決に向けた取組を行う中で、また、栽培した野菜の規格外のものを企業にお願いして、商品として販売してもらうことで、SDGsにつながる人が多い。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

スマート農業について、今まで関わる事がなかった。本校には、ラジコン草刈機がある。先生や利用した友人に話を聞くと、体への負担が限りなく少なく、除草をできるという。また、ラジコンなので、操作することも比較的簡単であり、操作していると楽しく感じることも多いという。実際に機械に触れ、操作をすることで、これまでの農業へのイメージを変える機会になると思う。小学生や中学生などに、学校で体験してもらうことが大切だと考える。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立鳩ヶ谷高等学校  
園芸デザイン科 2年 村上 衣央菜

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

中高年代以上の方はあまり情報機器の活用が得意ではない。魅力発信手段として、その年齢層の人が情報を得ている、新聞の地方紙やTV地方局に高校の催事や取組みを取り上げてもらうことや、地域の催事に参加し学校で学んでいることを発表する場を設けること、また学校ホームページをより分かりやすいようにデザインすればよいのではないかと思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

今まで以上に各関係機関と情報交換を行い、全国各地域が抱えている様々な課題を把握し、学校で学んでいることを活かし、プロジェクト活動をとおして課題に取り組む。またそのプロジェクトの進捗や成果を定期的に地域や関係者と共有し、改善していけばよいのではないかと考えます。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

今後の農業を担う可能性のある若い世代の人にロボット、AI、IoTなど新しい農業技術や運用の実態を、授業や情報誌、報道等で取り上げ、今後の農業の魅力を感じてもらうとともに、講習会等を開いて、実際に体験してもらおうとよいと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立農産高等学校 全日制  
食品科 2年 國分 虎之介

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

農業高校の魅力をSNS以外で発信するには、地域のイベントなどへの参加、新聞や雑誌などで特集記事を組む、テレビやラジオでの紹介が効果的だと私は考える。また、オープンスクールや体験入学の開催、パンフレットやポスターの配布など、これらの方法を通じて、幅広い年齢層にアプローチすることで農業高校の魅力を広めることができると思う。本校の学校行事に参加される方の多くは、保護者の方、地域の方々が多い。しかし、地域の方々で考えたときに「幅広い年齢層」かと問われるとそうではない。よって、地域の方、特に若い世代へのアプローチが必要だと考える。SNSの発達で、テレビやラジオ離れ、タブレット等の普及で活字離れなどと言われている。イベント、特集記事、テレビやラジオなどを活性化させ、あらゆる手段で情報を得ることができるようになると良いと考える。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域の課題解決やSDGsに繋げるためには、まず地域の現状を理解し、具体的な課題を明確にすることが重要だと考える。その上で、自分の学習内容やプロジェクトの成果を地域に還元する方法を考えた際に、例えば地元の団体と連携して持続可能な活動を推進する参加型の講習会などを開催して知識を共有することや、デジタルツールを活用して情報の発信や問題解決のアイデアを広めることも効果的だと思う。具体的には地域の農家さんと協力をして作業の手伝いをしつつ、農業の楽しさをデジタルツールで発信することや地域の野菜を使って、学校祭などでレストランを営業するなど、1次産業から3次産業まで行う6次産業化を発信していくことが必要だと思う。もちろん、生徒が地域へ赴き、様々な活動をしていくことも重要である。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

若い世代にスマート農業や農業経済への興味を引くためには、ドローンやパワースーツなどを実際に操縦・装着してみる体験型のイベントの開催や、学校での講演・実演などが効果的だと思う。また、SNSを活用した情報発信やプロジェクトへの参加、実際に農家さんに訪問し、農業体験をしてもらうことでより「農業」へのイメージ向上につながる。さらに、「農業」を楽しく学んでもらうために、様々なジャンルにおける「農業」のカードゲームを作成するなど農業教材の充実を図ることができれば、若い世代の関心を引くのではないかとと思う。

そして、おもしろい、かっこいいだけでなく、農業はもうかるということを「儲かる農業」として成功している若い人たちの事例を紹介したり、来てもらったり、訪問する機会をつくり、認識が変わってくれば、若い世代が興味をもつようになると思う。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 山梨県立笛吹高等学校  
食品化学科 2年 岡本 昂大

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか」**

農業高校は、農業に関する専門的な知識と技術を実践的に学ぶ場として、農業に興味を持つ中学生にとって魅力的な選択肢です。農業高校の魅力を SNS 以外の手段で発信する方法として、まず地域の農業祭りやフェアに参加することが挙げられます。農業を学んでいる高校生が地域に出て参加すれば、直接、多くの人々に農業高校の学びの魅力を伝えることができます。

また、農業高校ブースを設けて、農業クラブ活動や授業の様子をパネルや動画で紹介したり、生産物や加工品を展示することで、来場者に実際の取り組みを感じてもらうことができます。さらに、体験型のワークショップを開催することで、農業を学ぶ楽しさや重要性を実感してもらうことができます。このように、SNS 以外の手段でも農業高校の魅力を多くの人々に伝えることが可能です。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか」**

現在、私たちのグループでは、「観光客を増やすために山梨県の特産品を使った食品開発」を進めています。この学習を通して、私たち高校生も地域経済の活性化に貢献していると感じています。このような探究学習では、まず地元の農産物を知ることが重要です。それを活用するためには、地域のことをきちんと理解する必要があります。

私たちが農業を通じて社会をフィールドに学ぶことは、地域の課題解決やSDGs（持続可能な開発目標）につながると考えています。地域の農家の収入増加や雇用創出、観光客の増加による飲食店や宿泊施設などの関連産業の活性化など、やりたいことはたくさんあります。私たちの食品開発を通じて、地域コミュニティの結束が強まっています。地域イベントやワークショップを積極的に開催し、持続可能な農業の実現に向けて取り組んでいきます。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか」**

私たちよりさらに若い世代に農業へ興味を持ってもらうことは、農業の未来を担う若者たちが増え、持続可能な日本の農業の発展につながると思います。農業科の授業ではスマート農業や農業経済に関する内容を学んでいますが、まず、私たちが最先端の農業技術や経済の仕組みを理解することが大切です。

私たちは、スマートフォンやタブレットを日頃から使っているため、デジタルに慣れており、スマート農業の技術への関心も高いです。学校の授業を基に地域の農業の実際も学びながら、最新技術を使った農業技術もどんどん体験したいと思います。私たち農業高校生がこれからの農業のあり方を真剣に考え、学んだことを地域へ発信する活動が大切だと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県丸子修学館高等学校  
総合学科 3年 親松友海

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

私たちの学校では、小学生との交流や自分たちが育てた野菜と製造したジャムの販売など地域の人たちが子どもたちに農業の交流を通して農業のことについて知ってもらうことを行っています。そういった活動を通して、地域の若い世代に農業の良さを知ってもらえるよい機会だと思っています。

また、コロナ禍で一度は途切れてしまいましたが、地域の幅広い年齢層が集まるコミュニティイベントに積極的に参加することも大切だと思います。他の世代間と交流が生まれ、農業高校の魅力を広く伝えることが出来ると考えます。このように、地道な活動を継続的に積み重ねていくことこそが、より多くの年齢層に魅力を伝える手段だと考えます。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

私たちの学校では地域の老人ホームに出向いて花壇の植栽活動を行っています。今は植栽活動をしているだけですが、今後は植栽に使用している花の苗を種まきするところから老人ホームの利用者さんと一緒に行ったり花壇のデザインを考えていただいたりと、できるだけ多くの活動に参加してもらいたいと思っています。そうすることで利用者さんの生きがいややりがいに繋がり、さらに街の景観を良くして人々が気持ちよく過ごせる街づくりができれば良いと思います。

SDGsの目標を達成させるために、私たち高校生一人一人がより主体的に活動に取り組み交流を通して地域の人たちと協力して暮らしやすい街にしていく必要があると考えます。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

まず、農業用ロボットを導入して重労働を減らし、農業についてのマイナスイメージでもある3Kの「きつい」、「汚い」、「危険」を無くしていくことをしなければいけないと思います。またAIの蓄積しているデータを活用して、高品質なものや生産性を上げるなど戦略的な経営につながるなどのメリットがあることを広く知ってもらう必要があります。そのためには、若い世代に向けて体験型のワークショップを定期的で開催し、実際に操作をして、ものを作り理解してもらいスマート農業の良さを知ってもらうことが大切だと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立安城農林高等学校  
動物科学科 2年 岩田 花

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

安城農林高校では令和5年度より地域交流部を発足し、地域の行事に積極的に参加している。地域のイベントに参加しつつ、農産物販売などを同時に行うことで、学校の存在を広い世代にPRできると考えている。また、愛知県では生産者と消費者がつながる農場開放日として「オープンファーム」というイベントを行っており、安城農林高校も昨年度から参加している。農産物販売だけでなく、寄せ植え体験や、プロジェクト活動の発表などを行い、学校での学びを実際に地域の人に体験してもらい、魅力を発信している。農業クラブ執行部も農産物販売をしたり、農業高校をPRするチラシの配布、スタンプラリーなどを行った。学校を訪れた小・中学生を対象に、農業高校ではどのような学習を行うかや、希望者がいれば夏季休業中など長期の休みを利用して、授業や実習の体験会が開催できるように企画した。また、文化祭では多くの方が農産物販売を訪れるので、そういった機会を利用して、販売だけでなく学校のPRにつなげられる場を設定するとよいと考えた。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

現状では、発表の機会や対象が一部に限られていると感じる。各研修班が地域の団体や地域の農家と課題を共有する必要がある。各学科や地域、日本の農業が抱える課題をまとめ、解決に向けたアイデアを農業高校が考え、それに地域と共にどのように協力ができるかを考える場を作る必要がある。

農業高校だけでなく、工業高校や商業高校など、地域の学校同士で協力することができれば活動の幅も広がると考えられる。それぞれの学校の特色を活かして、共通の課題を解決する体制ができるとよい活動につながると考える。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業に魅力を感じてもらうためには、①収入の増加、②勤務時間の削減や自由度の2点が不可欠だと考える。①については、規模拡大か支出の見直しで実現を目指す。新規就農者には判断が難しい。②については、機械の導入によって改善すると考えられる。これまで農業は、農家の長年の経験や勘に頼る部分が多かったが、ロボット技術やICT機器の活用によって、誰でもできる、その場にいなくてもできるといったように、時間を自分で調整できるようになると考える。あとは、高額な導入費用をどのように工面するかと、技術の体験の場として、農業高校でも実践できるようになると、農業に若い世代も興味を持てると考える。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重立久居農林高等学校  
環境情報科 3年 増田 阿由

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

現在の社会においてスマートフォンをはじめとしたSNSを活用している年齢層は拡大してきています。インスタなどを活用して積極的に魅力を伝えていく事も発信としては活用すべきではあるが、それ以外の手段としては高い年齢の層はまだ情報の入手方法としては新聞などの活字、テレビ、ラジオなどのメディアに依存している人たちが多数を占めていると思います。最近では朝、夕のテレビ番組の特集として専門高校とかが取りあげられ、いくつかの農業高校も放映され、魅力を伝えられていると思います。また、農業高校のイベントなどについては新聞等にも掲載され普通高校には無い魅力をたくさん伝えられていると思います。私たちが当たり前のように行っている事が世間には魅力的に映るものがたくさんあると思うので、積極的にメディアにアプローチして発信することで魅力は伝えて行けると思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校では10年以上にわたって「わくわく農林塾」という活動を行って地域住民、児童、生徒との交流を続けてきました。地域交流の中で課題を見つけそれを一緒にプロジェクト活動通して解決に向けて進んでいく活動を行っています。一例として食品コースが津市榊原地区との連携を進め「榊原地域活性化計画～高校生からできること～」というテーマで地域を盛り上げる計画を進めています。また、家庭科と共同で地域環境を花で豊にする「花いっぱい運動」を年2回行っています。そのほか、津市が2050年のカーボンニュートラル達成を目指して立ち上げた津市地域脱炭素プラットフォームに参加し、その中の「未来創造会議」のメンバーとなっています。この活動を多くの人たちに広め地球温暖化やSDGsに関心を持ってほしいと思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

本校では果樹でGAP取得に取り組んでいましたが、イチゴでのGAP取得に着手することになりました。このような取り組みを広げ、またその活動の意味を知ってもらうことで、古い時代の農業経営から新しい時代の現代農業を理解してもらうことで、企業で働くのと変わらない魅力的な仕事であるということ伝えられるのはそれを学んでいる私たちだと思います。農業高校では生産物販売、イベント参加など様々な外部の人たちと接する機会があります。その際に新しい農業について紹介するなど農業の魅力を伝えるチャンスもあると思います。私たち農業高校生も学校にある最新機器を積極的に活用して行くことはもちろんですが、先進的な農業に取り組んでいるところもたくさんあると思うので、先進農家見学、インターンシップなどに積極的に参加して身をもって先進技術を体験することで、より具体的に説明でき新しい農業を伝える事ができると思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 大阪府立園芸高等学校  
バイオサイエンス科 2年 木村 一樹

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

広報誌やホームページ等を作成したり、新聞社やテレビ局を積極的に利用しコツコツと農業高校の魅力をPRするのが一般的な方法である。インターネットやSNSの普及に伴い、テレビ、ラジオ、新聞の影響力は下がりつつあるもののこれらの影響力は大きい。

そこで、あえて時代に逆行した宣伝手段を取っては考える。例えば、アドバルーンや飛行船の利用などである。建物の高層化や航空法などの懸念材料もあるが、注目を集めるには十分な方法であると考えた。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域の課題として、農業従事者の減少や高齢化があげられる。その1原因として考えられるのが農業に従事するためのハードルの高さだと思う。具体的には農作業の厳しさや圃場の確保の困難さである。

この解決策としては、高校でドローンを使用した農薬、肥料散布を行い、それを一般に公開、体験してもらう企画を実施することで農作業のイメージチェンジを図る。また、農地が余り農業者を公募している地域があれば、そこに農業高校生が赴き、参加者に農業のPRを発信することができれば少しずつ解決に向かうのではと考える。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業従事者の減少や高齢化の課題解決には、若い世代が農業に興味と関心を持つことが重要である。そのためには、スマート農業による農作業に対するイメージの改善や農業が儲かる産業であることを若い世代に伝えることが重要である。

ICT活用やロボット技術などの利用で、農業の生産性や作業効率が各段に上がっていることを体験してもらう機会を多く設けたり、高校で私たちが効率の上がる農業経営の在り方などについて講演会を開くことも効果があると思う。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック連盟 岡山県立勝間田高等学校

総合学科 3年 井堀 志穂

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまう SNS の他に、より多くの人に SNS 以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

【現状】 幼児・児童で田植えや芋ほりなどの農業は体験するが、一つひとつの作業の意味や仕組みなどを体験している子供たちが理解しづらい。なぜ、それをするのかが、体験している子供たちにその仕組みが分かりづらい。近年、子供の TV 離れにより、農業について知る機会が少ない。

【問題点】 農業に関する情報発信の為には、情報発信する生徒の農業知識が不足しているのではないか。生活の中で幼少期から大人になるまでの期間に農業に触れる機会が少ないのではないかと。

【対策】 中学校に訪問してプレゼンをする。中学生と一緒に農業を体験する。その中で先に知識として、農作業の手順を説明し、この手順でやらなければいけないのかを実際に体験してもらう。テレビだけではなく、YouTube への発信を増やしていく。小さな子供たちには『紙芝居』を作る。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決や SDGs につながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

【現状】 現在本校では、未来の農業従事者増加のために、ドリームファームという勝央町役場前の耕作放棄地を利用した農業ボランティア交流活動を行っており、サツマイモ、トウモロコシ、タマネギ、ジャガイモ、白菜などの冬野菜を、年間を通じて栽培し、年に5回ほどイベントも開催し、幼児・児童とその保護者を中心に多くの参加があります。ドリームファームの取り組みを継続していくためには、様々な課題もありますが、多くの意義があり、農業の魅力を若い人たちに伝え、地域の農業従事者の減少の問題の解決につながると思います。

【問題点】 現在のイベントでは、幼児・児童を中心に少しずつ参加人数が増えてきておりますが、中学生以上の子供立に参加して欲しいです。あまり幼いと将来農業をしたいと夢物語となるので、具体的に物事を考えることのできる年代の中学生の参加がないのは、問題と考えています。

【対策】 宣伝ポスターを作り、中学校や地域の公共施設に貼らせてもらうなど、知り合いの中学生がいる保護者の方への案内などを実践する。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

【現状】 若者の農業従事者の数は2000年では約13,4万人でしたが、2020年には約6,7万人と約半数に減少しています。しかし、若者の65%が農業に関心があるというデータも確認されています。農業に関心がある人が多く存在しても、実際には農業に携わっていないのが日本の農業の現状です。スマートが進むことで若い世代が農業に関心を持つ可能性はあると思います。

【問題点】 若者が農業をしない理由は、立ち上げ時の資金や農業収入や土地の問題、機械購入資金や機械代金などのさまざまな面で困難が多くあり、特に、スマート農業の設備投資には高額な資金が必要なので、興味があったとしても、若い世代では手が届かない場合が多いです。

【対策】 スマート農業で使用する機械・道具などの展示や、ポスターを作り、スマート農業の前向きな情報を広める。若者が投資できる低額のスマート農業が発展させ、学校で生徒に業者からも学び、知識を深め、農業のイメージを楽しいものに変えていくことも必要だと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 山口立田布施農工高等学校  
生物生産科 2年 河村 奈雄

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

本校では、11月に「農工祭」として、本校の生産品販売や学習成果の発表を行っている。コロナ禍の影響で、令和2年度からの3年間は、開催規模を縮小するなど制限した中で開催をしていたが、昨年度は制限を解除して開催した。約2,000の方が来校されて、活気あふれる農工祭を実施することができ、多くの方に本校の魅力を知っていただいた。今年度も、昨年度と同様に開催する予定である。

また、本校の教育内容を生かして、地元田布施町の行事に積極的に参加している。その活動の様子について、町の広報誌に掲載されており、地域に向けて本校の魅力を発信している。



【広報「たぶせ」の表紙】

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域の課題を把握するためには、生徒だけで活動するのではなく、地域の方々と対話を重ねることで、具体的なニーズが発見できる。

そのような機会として、昨年度、田布施町役場主催の「田布施View会議」に参加した。会議では『田布施町の未来を考える』ことをテーマに、役場、地方創生検討委員会の方と共に熟議を行い、田布施町を魅力ある町にしていくための案として、駅前の活性化、イベントやスポーツの出来る施設などたくさんのアイデアが集まることのできた。今年度も参加する予定である。



【熟議の様子】

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

都市緑地科では、ドローンを用いて空中撮影を行い、撮影された写真からソフトを用いて3次元点群データにするなど、DX化に対応した取り組みを行っており、その成果を農工祭や地域の行事で紹介している。

また、山口県教育委員会が教育を通じた「ふるさと山口」創生プロジェクトの一環として、令和2年度から実施している「やまぐちハイスクールブランド創出事業」に参画している専門高校等が設立している模擬株式会社山口魅来（やまぐちみらい）に、本校の商品（ジャム）を提供し、ホテルやネットショップで販売されている。



【模擬株式会社山口魅来の販売】

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立伊万里実業高等学校  
フードビジネス科 3年 山口 優花

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

### 1. 実態

農業高校の魅力が十分に発信できていない。

### 2. 問題点

農業高校を知る機会が少ない。

### 3. 解決策

ポスターの作成やチラシを配布、生産物販売会などの行事を積極的に行い、農業の魅力を発信する。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

### 1. 実態

SDGsや地域活動の課題解決に向けた取り組みを発表する場で意見交換や意見発表が行われている。

### 2. 問題点

学校が行うプロジェクト活動の認知度が低い。

### 3. 解決策

子ども食堂や生産物販売会などを行うことで地域の人との交流を深め、食品ロスを呼びかけるなどして、本校のプロジェクト活動を認知してもらう。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

### 1. 実態

スマート農業や農業経済に関心のない若者が多い。

### 2. 問題点

若者が一次産業に興味を示していない。また、少子高齢化による慢性的な人手不足である。

### 3. 解決策

SNSやテレビ、新聞などのメディアで農業の魅力を発信したり、体験型の農業イベントを定期的で開催するなど、若者がより農業に興味を示すような行事を行う。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック連盟 青森県立名久井農業高等学校  
生物生産科 3年 川守田 めい  
生物生産科 3年 山形 葵  
環境システム科 3年 河門前 瑠壺

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

本校の所在地である青森県南部町の広報誌に、本校のコーナーを設けてもらっている。月1回のペース南部町民の皆さんに、現在学校で取り組んでいる事や行事について知ってもらえる機会を得ることができている。また、情報発信の方法として、メディアの活用も有効だと考えている。新聞や地元テレビ局などはもちろんであるが、リーダーシップ等にも掲載・報道してもらえる様に、活動に特色を持たせる創意工夫をするように努めている。

メディア「読むものではなく、掲載されるもの」という意識で活動し、メディアが取材しなくなる農業クラブ活動を展開していく必要がある。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

「名農版 SDGs モデル」を作成している。現在それぞれの研究班で行っているプロジェクト活動が、SDGs17の目標のどの項目に当てはまっているかを一覧にし、クラブ員が意識づけるように可視化している。その他にフィールドワーク等を実施した際には、振り返りを感想などの文章に起こすだけではなく、課題を見つけ出すことも大切にしている。SDGsのどの目標に当てはまり、どういった活動が必要になるのかを考える機会を創出している。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

人口減少、少子高齢化、担い手不足、農家の高齢化など、学校のある南部町は課題先進地域と言える。スマート農業や農業経済は課題解決の手段になるものと考えている。下記の活動を行った。

まず、クラブ員から農業に関する課題を集めた。その中で、スマート農業や農業経済で解決できそうなものを選び、対となる専門用語を探し、得られた専門用語に触れる学習体験を先生や課題研究に提案し、実際に使いこなす経験値をクラブ員一丸となって高めた。

### 【取り組み内容】

ラジコン型草刈りロボットによる省力化、POS システム：エアレジによる販売改善、農業情報システムによる栽培環境制御、定点カメラによる農作物の変化の見定め、クラウド気象観測機による気象データの記録蓄積、アシストスーツによる身体的負担の軽減、買い物弱者を支援する移動販売車など

※詳しくは会議資料の第3分科会第7会場事例発表【東北ブロック】の発表資料を参照

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック連盟 山形県立新庄神室産業高等学校

農産活用科 3年 矢口 瑠波

農産活用科 3年 西田 夕夏

農産活用科 2年 齋藤 翔汰

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

・年齢関係なく参加できる体験（栽培体験や食育活動など）を開催するなどして、多くの人に知ってもらう機会を増やす。

・多くの人に農業を体験してもらう機会を増やしていくことで、農業の楽しさ、達成感などを伝えることができるのではないかと。それが、学校のPR、魅力発信につながるのではないかと。

・チラシを作成し、配布する。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

・まず、地域課題やSDGsについて、しっかりと理解することが重要である。そして、自分たちの取り組みがSDGsのどの目標につながっているかなどが確認できるチェックシートを活用するなどして、進めていくことがよいと思う。

・SDGsを意識した活動を心がける。

活動例として、廃棄予定の農作物からバイオエタノールを作製する（二酸化炭素減）、規格外品の利用促進の実践など。

・学習やプロジェクト活動を行う際から、SDGsについて考えた取り組みの実践。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

・現在ある農業のイメージ（大変、キツイ、汚れる、暑いなど）を、ICTやIoT技術などを活用することによって払拭できるのではないかと。導入費用などの問題がある？

・SNSの利用や出前授業を実施するなどし、スマート農業についてなど若い世代を中心に情報を発信する。

# 参加者課題レポート

## 第3分科会 第8会場

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第8会場	三重県立相可高等学校	福島県立岩瀬農業高等学校

## 第3分科会 第8会場

### 【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	宮城県	小牛田農林高等学校	農業技術科	2	高橋 桜
2	栃木県	那須拓陽高等学校	農業経営科	2	國場 悠希
3	埼玉県	杉戸農業高等学校	生物生産工学科	3	門 秀哉
4	千葉県	大網高等学校	生物工学科	3	木村 有里
5	神奈川県	中央農業高等学校	畜産科学科	3	茂木 七海
6	静岡県	磐田農業高等学校	生産流通科	2	草川 心優
7	長野県	上伊那農業高等学校	生物生産科	3	大塚 穂波
8	愛知県	佐屋高等学校	生物生産科	2	岩田 真広
9	三重県	愛農学園農業高等学校	農業科	3	門田 鷗介
10	和歌山県	南部高等学校	食と農園科	2	細谷 慧
11	岡山県	興陽高等学校	農業科	3	中村 美鈴
12	高知県	春野高等学校	総合学科	1	須夜崎 美月
13	大分県	日田林工高等学校	林業科	2	馬場 充希

### 【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	三重県	相可高等学校	生産経済科	3	内山 栞那
15	三重県	相可高等学校	生産経済科	3	森 恋雪
16	三重県	相可高等学校	生産経済科	2	長岡 明日香

### 【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	福島県	岩瀬農業高等学校	アグリビジネス科	1	我妻 恵治
18	福島県	岩瀬農業高等学校	園芸科学科	2	片桐 花乃
19	福島県	岩瀬農業高等学校	ヒューマンサービス科	2	力丸 紗里奈

# 「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、 若い世代に興味を持ってもらうためには どのような活動をしていくべきか。」

東海ブロック 三重立相可高等学校  
生産経済科 3年 森 恋雪  
生産経済科 3年 内山 葉那  
生産経済科 2年 長岡明日香

## 1 はじめに

東海ブロック学校農業クラブ連盟は愛知県、岐阜県、三重県の東海3県の農業関係高等学校23校、クラブ員7,190名（愛知県10校、3,077名、岐阜県7校、2,628名、三重県6校、1,485名）です。東海ブロック連盟は3県からなる小さなブロックですが、農業クラブに対する意識はとて高く、全国大会でも優秀な成績を収めています。小さいブロックならではの団結力のあるブロックです。

その中の三重県連盟を組織するのは6校（四日市農芸、久居農林、伊賀白鳳、明野、愛農学園、相可）の単位クラブで、それぞれ地元の関係機関との連携や行事に参加するなど、地域に密着した農業クラブ活動を展開しています。

東海ブロック学校農業クラブ連盟 単位クラブ所在地



三重県農業クラブ連盟 単位クラブ所在地



## 2 相可高校の概要

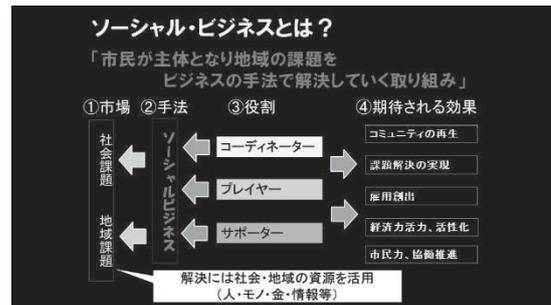
相可高校は松阪牛や本居宣長で有名な松阪市、伊勢神宮で有名な伊勢市、世界遺産のある熊野古道に囲まれた三重県の中ほどにある自然豊かな多気郡多気町にあり、今年が創立112年目になる伝統のある学校です。そんな相可高校には、普通科、食物調理科、環境創造科、生産経済科の4つの学科があり、それぞれの科が地域と連携した特色ある取り組みをしています。



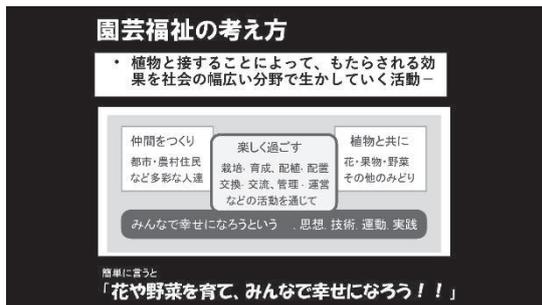
### 3 活動報告

相可高校農業クラブは生産経済科と環境創造科の2科、約230名のクラブ員で活動しています。環境創造科は主に測量士などの農業土木を専門に学ぶ科であり、普段よりドローンによる演習にも取り組んでいます。生産経済科でも、環境制御温室での遠隔操作による温室管理や外部講師によるドローンやIOTについて学ぶ機会も多くあります。

今までの体験から若い世代にスマート農業は「農業」に興味を持ってもらえるきっかけになると思います。興味があることは学ぶことに対して積極的になります。しかし、農業経営にとってスマート農業だけでは成り立たないのが現状です。そこで、相可高校農業クラブでは農業経済の知識を生かせる活動にも取り組んでいます。それが、SBP活動です。SBPとはソーシャルビジネスプロジェクトの略で地域の課題をビジネスの手法で解決していこうという取り組みです。具体的には、私たち高校生がヒト、モノ、自然などの地域資源を見直し、活用してまちづくりやビジネスを提案し、そしてその取り組みを地域で応援し支えあっていこうという活動です。その原点となるのが園芸福祉です。



園芸福祉とは簡単に言うと、「花や野菜を育て、みんなで幸せになろう」ということです。今から約20年前、高齢者施設のために花壇を造ったのが相可高校での園芸福祉のはじまりでした。その時の皆の笑顔から、植物が持つ不思議な力を感じ、その力を福祉に役立て農業と福祉のつながりを深めようと園芸福祉に取り組みました。



しかし、高校生によるボランティア活動には資金不足や活動範囲の制限など、一部の活動において支障が出るがありました。そこで、当時の先輩がNPO法人を設立し、円滑な運営が図れるように事業部、経理部、人材育成部、普及・啓発部の4つの部を作り、各理事を務める生徒が責任者として就任し活動を展開しています。



NPO設立後も園芸福祉の活動を地道に行う中、転機が訪れました。それが地域農産物を使ったコスメ開発です。NPO法人を運営することも農業経済の知識を生かすこともできますが、より学べるのがこの取り組みでした。今までに13種類のコスメの開発に成功しています。例えば最初に開発したまごころteaハンドジェルは地域特産物のミカン、柿、伊勢茶を入れることにより地域色豊かな商品を完成させることができました。リップクリームの開発では

大手製薬会社と協働することで、まごころシリーズのブランドとしての基礎を築くことができました。2種類の日焼け止めの開発ではミルクを入れることにより牛乳の消費拡大を目指しました。ゆず香るまごころハニークリームの開発では、ゆずとはちみつを入れ、料理人でも使えるハンドクリーム開発に成功しました。昨年度には耕作放棄地の茶畑から拾ったお茶の実を压榨し、ヘアオイルの開発にも成功しました。これらコスメの売り上げが1億2千万円を達成し、経済産業大臣賞やモンドセレクションなど多くの賞を受賞し高い評価を受けました。また、このビジネスの特徴は売り上げの3%が園芸福祉活動に使われることです。この活動はソーシャルビジネスの一つの成功事例だと考えています。



この取り組みから今は幅広いSBP活動へと展開しています。伊勢茶の普及活動では宇宙大豆と伊勢茶を組み合わせることで7つの葉を使ったなの茶や安価で皆さんに飲んでいただきたいとほうじ茶とブレンドしたまめ茶を完成させました。

芍薬プロジェクトでは、三重県南部に芍薬産地形成を目標に活動し、栽培の成功だけでなく、芍薬の花を利用したデオドラントスプレー相可オリジナルの開発にも成功しました。



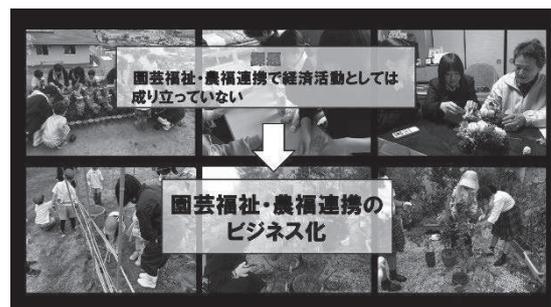
これら商品を開発する流れです。開発の大切な考え方として基本コンセプトを明確にすることを教えていただき実践しています。全て園芸福祉活動を行うための取り組みでもあり、私たちは6次産業に幸せ、つまり4を足す10次産業として提唱しています。園芸福祉活動とは違う取り組みの1つとして「バイオマス産業のまちづくり」をテーマにした活動をしています。バイオマスプラントから排出される消化液を農業利活用できないかと相談を受け、調査を開始し、葉菜類の栽培に肥料として効果があることを確認することができました。さらに、秋田県立大学にあるバイオマスプラントを相可高校総合農場へ移設にも取り組みました。しかし、莫大な移設費が必要となります。そこで考えたのがクラウドファンディングの手法で資金を集めることに挑戦しました。タイトルや金額、リターンなどを考えスタートです。地元企業への訪問はもちろんのこと、

SNS などを使っての PR 活動により個人、企業、団体 64 件の方から目標金額 350 万円を超える 400 万円の資金を融資していただくことができました。そして、そのバイオマスプラントから排出される消化液でバジル栽培に取り組みました。そのバジルを使って開発したのがバイオバジルオイルです。バイオバジルオイルと名付け販売をスタートさせました。バジルの配合量は 15%。オイルもオリーブオイルではなく松阪産菜種オイルを使用し、洋食だけではなくこのように多くの料理にも合うオイルにしました。価格は 270g 入り、1,100 円です。販売についても PR を兼ねる意味も考え、多気町ふるさと納税返礼品として人気のある商品となっています。

#### 4 まとめ

いくつかの商品開発には成功しましたが、相可高校生産経済科のソーシャルビジネスの礎は園芸福祉です。売り上げの一部から活動資金を得て、より活動の幅を広げています。しかし、園芸福祉や農福連携として経済活動を展開するまでには至っていないのが現実です。今後は園芸福祉、農福連携をビジネスとして取り組めればと考えています。

若い世代が興味を持てる活動としてスマート農業も興味を持つきっかけとしては最適ですが農業経済を知らないと興味も半減してしまいます。そこにソーシャルビジネスを取り入れるととても面白い活動につながると思います。農業高校は自然を材料に多くの方々や団体と交流でき地域づくりの手段としても最適です。農業だけでなくあらゆる産業の最終目標は地域づくりです。この地域づくりに向け、これからも継続した活動をしていきたいと思っています。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 宮城県小牛田農林高等学校  
農業技術科農業科学コース 2年 高橋 桜

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

○学校説明会や体験授業を開催する。

来てくれた人に野菜や花をプレゼントしたり、消毒などしっかり対策をした上で豚や牛の見学をしてもらう。

○学校行事である稲章祭（文化祭）の一般公開で学校をPRする。

学校に興味を持っているから文化祭に来校してくれているので、各部活動の紹介とともに、校内の日常を感じてもらう。在校生は一般公開にたくさんの方が来てくれるようにポスターを掲示するなど情報を広める活動をする。



## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

○農林水産省が推進しているジビエとして利活用の推進。

本校農業クラブでは実際にジビエ料理をつくり役員や先生方で試食しました。しかし、まだジビエ料理が完全に普及したわけではないので、どう普及させていくかを考え行動していくべきだと思う。

ジビエ料理のレシピを増やすことで興味をしめしてくれる人がいるかもしれないので校内で良い案がないかをアンケートすることも良いかもしれない。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

○若者が農業から離れていく理由として、「資金、収入、体力などさまざまな面をクリアしなければならないから。」という理由が挙げられた。でも、実際は農業に従事している人たちが減少しているため農業をする人の需要は高まっている事実を高校生に広めていく。

○地域の人たちも参加出来るような農業体験を実施する。すでに先進的な高校や大学などではスマート農業体験を企画しているので、本校でも取り組んでみたい。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立那須拓陽高等学校  
農業経営科 2年 國場 悠希

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

高齢者の人たちは新聞や広報などを活用することが多いのでそのような方向で発信することで、より多くの人達に見てもらえることができる。他の方法としては、少し難しくなってしまうが、自分たちのポスターを作成し、地域の方々の協力のもと、様々な場所に掲載するとよいと思う。学校などで地域の人も参加できる農業の体験などのイベントを催すことも有力だと考える。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

栃木県は自然が多く、目標15である「陸の豊かさを守ろう」ととても深いかわりがある。しかし、近年では農業従事者の高齢化に伴い、1農家で管理できる田畑が少なくなり耕作放棄地が増加している。これは、景観が悪くなるだけでなく、生態系の破壊にもつながってしまう。地域の課題の点では、土砂崩れなどの災害の危険性が、耕作放棄地が増えることにより高まってしまふ。そのため陸の豊かさを守ること、地域を災害から守るなどの観点から、耕作放棄地を有効活用できるようにまだ栽培面積に余裕のある農家に貸し出す架け橋になったり、農業をやりたいけど田舎過ぎるところにはいきたくないというような条件付きで移住して農家をやりたい人たちに宣伝したりするなどし解決に向けた行動をとっていきたい。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

SNSを活用し、若い人たちが参加できる体験学習やイベントを開催する。具体的な内容としては、YouTubeやツイッター(新X)などでアカウントを作り、イベントの参加者を募る。そして、農業機械やICT技術などを駆使した農業を体験してもらうことで、農業に対して多くの人を感じているとても大変なものという考えを、より身近なものだと実感できるようなイベントにしていく。また参加者の人たちに魅力的なプレゼントを用意し、それを目当てにしてきた人にも農業について興味を持ってくれるような活動をしていきたい。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立杉戸農業高等学校  
生物生産工学科 3年 門 秀哉

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

育てた野菜を売ったりするときどんなことをして育てたのかを書いた紙をいれる

駅や学校などにポスターや張り紙を掲示

電車やバスなどの公共交通機関にポスターなどを展示する

地域新聞やテレビなどで紹介してもらう

回覧板に広報誌として載せる

学校外でイベントを開く。

小中学校や小中学生が参加する地域行事での販売会・体験会の開催

スーパーなどに張り紙をお願いする

即売会などで宣伝する

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

積極的に動く

課題について話し合う機会をつくる

自分たち(学生)だけで話を進めず、積極的に企業や地域の方々の力を借りる

より多くの人に知ってもらいできる限りの事はしてもらうこと

地域との交流を増やし問題点を見つけ、話し合う

周りのゴミ拾いをする

まず地域の課題を把握する。そして地域との関わりを増やす。

個人での活動だけでなく、企業・地域や学校・学科全体と連携した大規模な活動を行うこと

まず地域の課題を理解する

意見交換会などに積極的に参加する

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

体験してもらう

実際にやっているところを見せて興味をもたせる

農業高校以外の普通高校でも、授業の一部で農業について学ぶ

驚くようなことをして目を引く

農業高の生徒と農業従事者が協力し、小学校や幼稚園に出向いて、一緒に農業体験をする

無印良品の広場などで地域の人と交流会的なのをする

今の農業にはAIを使った技術があることを見たり、体験したりして興味を持ってもらう。

スマート農業や農業経済の知識が若い世代に広まることで、社会にどのような利益をもたらすのかの情報を発信する

SNSの活用ゲームをつくる

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック連盟 千葉県立大網高等学校  
生物工学科 3年 木村 有里

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

農業高校は、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成しているが、必ずしもその実情が中学生や保護者等に明らかになっていないことから、専門高校に対する中学生や保護者等の理解・関心を高めることが求められている。そこで私は出前授業を通して農業高校では何が学べるのか、何が身につくのかなど、実際に体験してもらうことで魅力が伝わるのではないかと考える。

また、農産物販売会を通して、幅広い年齢層とのコミュニケーションや、購入していただいた商品と共に農業高校の魅力を伝えるチラシ等を配布することでより広範囲にPRできると考える。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

教科の学びを地域等の社会で深めることが大切であると考え。SDGsの17の目標の中で様々な目標に関連性のある農業だが、特に1（貧困をなくそう）、2（飢餓をゼロに）、3（すべての人に健康と福祉を）の3つの目標に対して、学校で栽培された野菜などを福祉施設や子ども食堂に寄付することでSDGsの目標に貢献できるのではないかと考える。

また、食品ロスで困っている農業従事者と連携を図り、福祉施設や子ども食堂と繋げることで地域の課題解決にも貢献できると考える。このように教科の学びを社会の中で実践できるプロジェクト学習は、地域の課題解決やSDGsに貢献できると考える。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

スマート農業とは、ロボット技術やICT（情報通信技術）、AI（人工知能）やIoT（モノのインターネット）などの先端技術を活用し、超省力化や生産物の品質向上を可能にする新しい農業である。農業は重労働のイメージがあるが、様々な作業の自動化による農作業の負担軽減や作業時間の削減が期待でき、若い世代の農業に対する見方が変わるのではないかと考える。まずは、農業高校に所属している私たちが率先してスマート農業を実践し、メリット・デメリットを把握することから始めることが大切であると思う。

学校行事を活用し、若い世代が特に集まる文化祭等を通じてスマート農業に触れる機会を設け、農業をさらに身近に感じてもらえるような活動を展開したい。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

西関東ブロック 神奈川県立 中央農業高等学校  
畜産科学科 3年 茂木七海

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

私が農業高校の魅力を発信する手段として SNS 以外でより多くの人に情報を発信するために考えることは、3つあります。1つ目は近所のスーパーマーケットや飲食店などにポスター掲示をすることです。仕事帰りなどでお買い物や食事などでも好きな時間に見ることができるため効果的だと考えました。2つ目は小中学校に農業高校生が訪問や夏休みなどに研修会を行うことです。実際に農業高校生が経験などを説明することによって、小中学生が家族や友達と農業について話すきっかけとなり農業の魅力を多く発信できるのではないかと考えました。3つ目はショッピングモールや道の駅などでイベントを開催しそこで農産物の販売を行うことです。このイベントは誰でも参加することができるため、ショッピングモールや道の駅の前を通ったときでも気軽に見ることができるため、農業を詳しく知らなくても立ち寄って詳しく知れると考えました。これら3つのことは農業のことを知らなくても知るきっかけとなり、今後に繋がると考えます。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

私達が行っている活動をより多くの人に知ってもらい SDGs に繋げるためには、多くの人たちに活動に参加してもらい、実際に活動を通して意義を理解してもらう必要があると考えます。中央農業高校では現在フードバンク活動に取り組んでいます。この活動は SDGs の「1, 貧困をなくそう」、「2, 飢餓をゼロに」、「3, すべての人に健康と福祉を」、「12, つくる責任 つかう責任」、「17, パートナリーシップで目標を達成しよう」の5つに大きく関係しています。これらを達成するために私達中央農業高校農業クラブ本部が取り組んでいることは、月1回～2回のフードバンク活動への参加や校内フードドライブ、文化祭などでの呼びかけを行っています。すべてのことを達成するのは難しいかもしれませんが少しでも多くの地域の課題解決や SDGs につなげるためには、校内で活動するだけでなく、多くのイベントに参加し、参加者も一緒に取り組める活動をする必要があると考えます。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

若い世代に興味を持ってもらうためには、私達に取り組む活動が3Kと言われている、「キツイ、汚い、危険」のマイナスイメージになるのではなく、「楽しい、嬉しい、農業は生活に必要」などのプラスなイメージを思ってもらえる必要があると考えます。そのためには種から収穫までの農業体験を一年間をかけて行ってもらい、農業は3K のイメージだけではないということ知ってもらえる活動や、授業などで農業の話を学ぶ機会があれば若い世代にもっと興味を持てると考えます。

## 4. クラブ員代表者会議への抱負

中央農業高校ではフードバンク活動に取り組んでいますが、全国の高校では違うことの活動について取り組んでいることが多いと思うので、短い時間ですが、様々な活動をして今後活かせるようにしたいです。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立磐田農業高等学校  
生産流通科 2年 草川心優

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・新聞やラジオ
- ・チラシ
- ・説明会
- ・体験会
- ・軽トラ市（地域活動）
- ・駅の掲示
- ・誰でも行くようなスーパーなどに掲示
- ・公民館や老人ホームなど年齢層関係なく見れるところに掲示
- ・他校の購買や文化祭時に磐田農業高校の商品を売る

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・何のために行っているか理解する
- ・SDGsについてより深く知る
- ・SDGsを意識して生活する
- ・SDGsの方針に沿ったボランティアに参加する
- ・地域の人の協力を得る

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・農業用品を見て知ってもらう
- ・SNS活動（動画の作成、CM活用）
- ・学校を通しての体験
- ・地域の人や農家さんに農業体験をしてもらう（身近な場所：磐田農業高校）
- ・オープンスクールでポスターを作成し農業を身近に感じてもらう
- ・農業高校生によるスマート農業のイベントの開催

# クラブ員代表者会議 参加者課題レポート

北信越ブロック 長野県上伊那農業高等学校  
生物生産科 3年 大塚穂波

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

私たちの学校の農業クラブ員は日々の授業や課題研究などを通じて、商品開発や地元のイベントへの参加、近くの保育園や小学校との交流を通して農業高校で学んでいることや魅力を発信し、今まで以上に地域の方々に知ってもらえる活動を行っています。例えば、コミュニティデザイン科 GL コースでは、地元伊那谷にある天竜川で昔から行われているザザムシ漁に着目し、主に佃煮として食べられるザザムシの新たな利用として地域の方々の協力を得ながらふりかけの商品開発をおこないました。地域の様々な方から協力をさせていただきクラブ員の学びの一部となっていると思います。これからも地域との関わりのきかいを増やしていきたいと考えています。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校の動物コースではプロジェクト学習の一環として、地元で産業廃棄物として処理に困っているキノコの廃菌床を題材として研究を行っています。動物コースでは家畜の飼料価格が高騰している問題にも注目をし、これらの問題を同時に解決させるため、「廃菌床を使った飼料を作成できないか」研究を進めています。これらの研究を3年間継続して行うことで、廃菌床の飼料化が可能となりました。このように、私たちが行っている研究を地道に進めていくことや地域に出向いて情報収集を行うことで、地域の課題を解決することができ、SDGsの目標達成にもつながると考えています。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

若い世代の中には、農業に良いイメージを持つ人は少ないと思います。実際に私も農業高校に入学する前は、きつい・つらい・土まみれなどといったイメージを持っていました。しかし農業高校に入学し、スマート農業というものを知りました。本校には、植物工場が導入されており、播種から収穫まですべて室内で行うことができます。従来の農業のイメージとはことなる感情を抱くことができました。このように、最先端のスマート農業などを若い世代に伝えていくことで、興味を持つ人が増えると考えます。そのために私は、中学生体験入学や農業クラブの行事を通して、様々な若い世代と交流をしていきたいと考えています。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立佐屋高等学校  
生物生産科 2年 岩田 真広

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

多くの年齢層に見ていただく為にはマスメディアなどの情報機関と協力して情報発信するという手段を取るべきだと考える。ただ、マスメディアという物は個人がいきなり取材の申し込みをただけでは取材していただけない事が多いと考える。そこで日頃の実習や農業クラブでの活動を自慢できるように行い、マスメディアが取材してみたいという環境を作る事が必要。また、佐屋高校のモットーでもある「普通じゃできない経験をしよう」をもっと大々的に発信できるような環境を作る事も大切。そこで地域連携活動を沢山行い、あまりSNSを見ない地域の年齢層にもアプローチする事で情報発信を行って行く事が大切であると考ええる。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

今できている農業高校ならではの活動を認め、そこから地域の課題は具体的に何があるのかSDGsにつながる活動は何なのかを考えていくべきだと思う。今できている学習といえば、各専攻の教科書で学び、実習でさらに動物の世話や花の販売等で自分も携わっているのだと実感を深められていること。これらを勉強に例え、基本的な部分をまずは完璧にする。そして、応用として現在自分が住んでいる市にはどんな課題があるのかを考えていくのが大切だと感じる。例を挙げると、愛西市の公式ホームページでは第2次愛西市総合計画で、愛西市が目指す理想像へ向かっていくというのがある。記事全64ページで、SDGsについて何が求められているのか等細かく書かれている。課題等をすぐに解決できることの方が少ないから、今自分たちができていることを大切に、経験と知識で向き合うのを確立していく。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

現在の農業では、技術の修得に時間を要し、マニュアル化が難しく、ノウハウ的な技術が多いため、次世代に継承されにくいという問題がある。これらの問題を解決し、若者や女性など、様々な人々に農場に参加してもらうためには、作業を楽にするとともに、経験の少ない人でも農業を取り組める環境を整えていく必要がある。また、スマート農業と言っても様々あり、ICT、IoT、AIドローン、ロボット技術等があるが、高額な初期投資が必要となり、手を出すのに難しいところがあるだろう。現在の日本の農業では今も伝統的な手法に依存しているところがあり、多くの作業が人の手によって行われているが、作業の自動化による業務効率の向上で人間が行っていた作業・判断などを機械・ロボットやAIがサポートすることで、大幅な農作業の効率化が期待できる。スマート農業をはじめするには、手軽に手を出して行えることが重要だと思う。最先端の技術のため難しいところがあるが手軽にはじめられる方法を考えていきたい。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 私立愛農学園農業高等学校  
農業科 3年 門田 鷗介

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

外部販売の機会を増やすことが重要だと感じます。愛農高校は果樹・野菜・作物・養鶏・養豚・酪農と6つの部門があり、生徒は全員どこかに属しています。そのため生産に関する知識や技術は身につきますが、何を伝えたいのか、何を理解してもらって買ってもらいたいのかを考えるクセがつきにくいのが現状です。消費者や企業の方に直接説明して販売する。高校生だからではなく、きちんと生産者として生産物の特徴と想いを伝えることを考えながら、繰り返し外部販売の機会を経験するべきだと思います。

愛農高校では奈良県や三重県内で一般の農家さんや生産者さんに交じってマルシェに参加し、「高校生」ではなく「生産者」として農産物や加工品の販売を行っています。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

私たちの強みは地元を中心になれる可能性があることです。つまり農家と非農家、農村と都市を繋ぐことのできる立場にいることを十分自覚する必要があります。コロナ前愛農高校では軽トラで農産物の移動販売を実施し、その次に学校内のログハウスで行われているカフェの一般参加も可能にしていました。コロナ過では「愛農で暮らす」ことをテーマに学内にある山菜などの資源や、学校の自給率の高さを利用したピザなどの振舞、またエネルギー自給に関する取り組みなど、自分たちにある資源を最大限利用することを考えて活動してきました。

昨年の収穫祭から地域からの一般参加もOKにして、交流の場としての学校を作り上げようと農業クラブ員が中心に活動しています。また毎年中学生対象の夏期生活学校や体験入学の際には幹部が中心となり学校の案内や農業に関する情報の周知を行っています。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

まず自分たちが楽しそうに農業に取り組む姿勢が重要です。次に自分たちの姿を見てもらうことが重要だと思います。愛農高校では就農率40%を超える状態ですが、それは農家実習を住み込みで1~2週間体験することや、先輩の農家の方の話や生き方を見る中で「農業が尊い仕事だ」「カッコいい」と強く思えるからです。私たちが経験したことは私たちの農業に取り組む姿勢に反映されて来ていると思っています。その姿をどうしたら見てもらえるのか。それは外部販売や校内マルシェや、学校内行事報告をSNSなどで広く知ってもらうことです。自分たちが大切だと思うことを、確かに伝えていく。機会や伝える力や想いが必要な仕事ですが、それに取り組む価値はあると思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 和歌山県立南部高等学校  
食と農園科 2年 細谷 慧

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

私が考える農業高校の魅力を発信する手段として、新聞であると思う。理由として、この20年間で新聞の発行部数が40%減少している。新聞の発行部数は減少傾向にあるが、現在新聞は2800万部発行されており、この数字からも幅広い世代の方々に読まれていることを理解することができる。幅広い世代の方に読まれている利点を生かし、農業高校の魅力を特集する紙面をつくるなどを考える。具体的には、全校の農業高校の取り組みを紹介し活動をアピールしていくことである。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

SDGsにつながるための取り組みとして本校では、プロジェクト学習として、生ゴミを有機肥料にするプロジェクト学習が行われている。このプロジェクト学習が始まった背景として、昨今肥料などの価格上昇や和歌山県の1人あたりのゴミの排出量が全国平均より多いという部分から本校の調理コースの実習で廃棄される生ゴミに着目し「食と農の循環システム」について考案できないかという部分から始まった。

調理コースでは、生ゴミなど廃棄するものが毎回多く発生しているのが現状であるため、生ゴミを有機肥料し、果樹や野菜の栽培に活用することで生ゴミの発生を軽減することができ、SDGsの活動につなげることができるのではないかと考える。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

若い世代に興味を持ってもらうための活動として、スマート農業を導入した際の利点を伝えることであると考え。スマート農業と一言でいってもドローンを活用した農薬散布や圃場のセンシング、温室などで活用する環境制御など様々である。それぞれのスマート農業には様々な利点がある。そのような利点を若い世代に伝えることが重要であると私は考える。

具体的には、労働力の削減や効率化などが挙げられる。また、データ化し作業の見える化を行うことで、日々の栽培管理をしやすくなるなどの利点を伝えることであると思う。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック連盟 岡山県立興陽高等学校  
農業科 3年 中村 美鈴

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまう SNS の他に、より多くの人に SNS 以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

私たち興陽高校は魅力をさまざまな人達に発信する手段としてHPやブログ、Instagram、YouTube などを中心に日々の出来事や活躍した人、クラブ活動などを情報発信しています。問題点は、特定の人（フォロワーや興陽に興味のある人などに限られる）にしか見て貰えないことです。対策一つ目は地域連携を通じ、ニュースや新聞、広告などマスメディアの活用です。老若男女を問わず広い範囲で情報を伝えられるメリットがあり、多くの人に短時間で情報が伝わるからです。二つ目は魅力的なチラシやポスターなどの作成です。インターネットが苦手な高齢者層も集客しやすく、インターネットを利用していなくても高い広告効果が期待できるからです。これらのことからそれぞれのメリットを生かして老若男女問わず情報発信が出来る方法でアピールが出来たらもっと良くなるのではないかと考えました。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決や SDGs につながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

現状は、各学科、類型でプロジェクトには取り組んでおり、ファミリー稲作や収穫体験など地域の人たちとの交流があります。その中で、里海米のプロジェクトで地域連携し、牡蠣殻などの産業廃棄物になるようなものを利用し循環型のプロジェクトに取り組んでいます。課題としては、SDGs につながるプロジェクトに取り組む人は一部の生徒で動いること、SDGs についてよく理解している人や説明できる人が少ないなどがあります。対策は何のためにプロジェクト活動を行うべきかについて理解し、自分たちに興味がある分野でできる範囲のことをする。より多くの人たちに興味関心を持ってもらい地域連携により地域が良くなっていくようにみんなで取り組むことが大切だと思います。地域との繋がりを大切にしている所も興陽の魅力だと思います、これからも守っていきます。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

現状は、若い世代が農業に触れる機会がないことです。農業系の学校に通っていない人はどうやって農業に携われればいいのかかわからないと思います。問題点は、興味が無い人が多いことです。対策は小さい子に対して農業体験でふれあう機会を設けることや、小中学生、普通科の高校でも農業に関する授業があれば、興味を持つ人が増えると思いました。まずはきっかけ作りが大切です。働く人の姿を通して農業に魅力を感じると思います。農作業する姿が生き生きと楽しそうに見えると、自分もやってみたいと思うように、農業をめざす若者を増やすためには、農業の魅力を伝えることが重要です。私たちに出来ることは日々の学びを伝えることできっかけを作ることができます。地域の人との交流活動を積極的にしていくべきだと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 高知県立春野高等学校

総合学科 1年 須夜崎 美月

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

テレビやラジオに取り上げてもらうことは方法の1つだと思います。インターネットの普及で影響力が下がっていることは確かですが（実際にあまり見ない友だちも多いです）、テレビ取材があったときの学校で行われるショップ花時計の来場者は、いつもの倍以上になると先生方がおっしゃっていました。情報発信の重要な手段の一つであることには変わらないのではないのでしょうか。また、自治体や地域の広報誌に掲載する方法もあります。SNSを活用しない高齢者の方は、このような紙媒体を利用していることも多いと聞きます。それぞれの方法にメリットデメリットがあるので、効果的にすべての世代にいきわたる様にするためには、SNSだけに頼らず、多方面から活用することが重要です。ターゲットを明確にして、その世代が共感できるようなコンテンツやものを調査することが必要だと思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域課題の解決のためには、まず地域の資源を探すことだと思います。その資源を有効活用することが重要です。地元の農産物や自然や文化などを、私たち高校生の視点で捉えることができましたと思います。地域資源を学び、活用して、地域の課題解決につながるようなことを提案し、地域で応援してもらえるような仕組みを作っていくことではないのでしょうか。そのためには、地域と私たちをつないでもらえるような方と出会い、力を合わせて取り組むことも大切です。学校を核に、地域の方々の参加意識を高める取り組みが必要です。春野高校では1年次の「産業社会と人間」で地域探求を行っています。地域の魅力と課題を発見し、その解決について考え発表する内容となっています。活動の中でFW（フィールドワーク）があり、地域の方々から直接情報を集めることも行います。地域の情報を収集し、主体的に考えることも大切ですが、人との関りもこの活動には大切なことだと思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業高校の生徒はスマート農業がどういうものか、授業で学ぶのでわかりますが、ほとんどの若い世代の人はスマート農業という言葉も知らないかもしれません。高知県は施設園芸が盛んな地域ですが、高齢化も進んでおり、スマート農業を使いこなしている印象はあまりありません。機械や設備の値段、メンテナンスに多大な費用がかかることも聞きます。国や県などの支援策も十分に周知されていないこともあるかもしれません。「農業を知る機会を増やす」ことが重要だと思います。まずは、わたしたちが発信者になることです。授業で習ったことや知ったことを家族や友だちに話すこと、SNSで情報発信することから始めてはどうでしょうか。私たちの世代は動画を見ることが日常にあるので、Youtube等に発信することも方法の1つです。若い世代が利用するコミュニケーションツールを活用していくことはとても重要だと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 大分県立日田林工高等学校  
林業科 2年 馬場充希

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- (1) 実態：近年農業高校の魅力発信はSNSや学校HPの活動報告が多く、それでは見る人が限られてしまう。
- (2) 問題点：農業クラブの活動が少なく、そもそも知っている人が限られているため、情報を得る機会がない
- (3) 具体的取組：チラシ、ポスターを行事ごとに作り、学科新聞を毎月発行し、小学校・中学校に配布し、地域の回覧板にも入れる。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- (1) 実態：地域の課題…急速な高齢化や人材の不足。地域の課題や困りをしっかりと把握できていない学校がある。  
SDGs…ある学校では、製造したみそを道の駅で販売
- (2) 問題点：地域の課題の深刻さについて理解できていない、また地域によっては課題や困りを聞くチャンスがあっても聞いていない。一部の生徒だけしか参加していない。学ぶ地域や企業の有無によって差や難易度が変わってくる。
- (3) 具体的取組：SNSや農ク新聞の作成。企業との連携。小中学校へ出前授業を行う。道の駅の販売だけでなく、スーパーで販売する。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- (1) 実態：農業のサイクルを知らない人が多いのではないか？  
スマート農業が広まっていないのではないか？
- (2) 問題点：・儲けがすくないと思われている。・農家の仕事を具体的に知らないのではないか？・テレビ、本で力作業のイメージがついている。・農業機械の高騰（コンバイン約1千万円）している。
- (3) 具体的取組：現在、機械化が進んでいるが、若い世代に知られていないのではないか。また、力作業できつい、汚い、暑い、ダサいのイメージがあると思われる。そこで、小、中学生にドローンを使った出前授業を行い、すこしでも農業について興味・関心を持ってもらう。さらに、収穫した農産物を自ら食べ美味しいと感じ、そこから、その農産物を販売し購入者が喜ぶ笑顔を見ることが必要である。農業のサイクルを知らない人が多いと思われるため、SNSに農家の暮らし方や仕事の取組みを紹介し、若い世代に知ってもらう（工業との違い）

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重立 相可高等学校

生産経済科 3年 森 恋雪

生産経済科 3年 内山 葉那

生産経済科 2年 長岡明日香

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

農業高校とはいっても私的な活動に近い存在となっているのではないかと思います。第一段階としてまず農業高校について知ってもらうことが大事ではないでしょうか。学校で今、Instagramを始めだしたものの、これまではWebサイトや学校のパンフレット等しか情報を得る方法はありませんでした。情報の少なさから私たち自身が知ってもらう機会を少なくしているともいえます。そこで引き続き情報発信を続けていくとともに普段している活動や商品の宣伝を含めたオリジナルのパンフレットを作り、スーパーなどの買い物に来ていただいたお客さんに渡していくことが魅力を知ってもらう最善策だと考えます。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

課題解決に取り組むにも全員で同じことに取り組んでいては非効率といえます。そこで学習や研究を地域の人に向け、かつ互いに発表する機会を設けるといいと思います。ただ発表するときも賛否両論はあると思うので、最初から意見を押し付けることはせず、互いの意見を尊重しあうことで、地域の人々の考え、私たちなりの考えを共有しあえば一つのアイデアから派生して課題解決にこぎつけられるのではないかと思います。世間でよく耳にするようになったSDGs。取り組んでいる農業高校、農家は少なくありません。しかし取り組んでいてもそれぞれが具体的に何をしているかは知らない状態にあるのではないのでしょうか。常に地域の人と共有が可能な状態にあることが一歩進む鍵になると思います。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

私たち高校生はドローンでの演習、環境制御温室での遠隔操作による栽培などスマート農業についてとても興味はあります。興味があることは学ぶことに対しても積極的になります。今までの体験から若い世代にスマート農業は「農業」に興味を持ってもらえるきっかけになると思います。しかし、農業経営にとってスマート農業だけでは成り立たないのが現状です。そこで、相可高校農業クラブでは農業経済の知識を生かせる活動にも取り組んでいます。その活動がSBP活動です。SBPとはソーシャルビジネスプロジェクトの略で地域の課題をビジネスの手法で解決していく取り組みでNPO法人の設立を皮切りに園芸福祉活動、地域農産物を使ったコスメ開発、芍薬の普及を目標にした芍薬プロジェクト、伊勢茶の復活を目標にした伊勢茶普及活動、バイオマスのまちづくりを目指したバイオマス栽培の研究など地域の企業や団体とも連携した活動を展開しています。また、地域の食と農業を考えるために食物調理科と協働し新しいメニュー開発にも取り組んでいます。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック連盟 福島県立岩瀬農業高等学校

アグリビジネス科 1年 我妻 恵治

園芸科学科 2年 片桐 花乃

ヒューマンサービス科 2年 力丸沙里奈

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ①各種広報誌への活動掲載→JAや自治体広報誌に学校のコーナーを持ち、魅力を発信。
- ②マスメディアへの取材案内→新聞やテレビで魅力を発信。
- ③イベント等での学校紹介→パネル展示により活動を発信。



学校の活動が紹介されている広報誌



テレビ放送の様子

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ①地域自治体との連携→直接的に地域の課題を捉え、解決に向け働きかける。
- ②GAPの取得→適切な農業生産により、SDGsへつなげる。



規格外品を使用した自治体と連携した商品開発



GAP取得審査の様子

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ①企業との連携→最新の農業機械・施設を体験し、古いイメージを払拭しつつ、興味を喚起。
- ②グローバル化→生産した農産物の海外輸出を通し、流通面からの興味を喚起。



企業を招いてのドローン講習



輸出に向けパッケージした「福数多」

# 参加者課題レポート

## 第3分科会 第9会場

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第9会場	愛媛県立大洲農業高等学校	福島県立修明高等学校

## 第3分科会 第9会場

### 【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	茨城県	水戸農業高等学校	食品化学科	3	山崎 このか
2	群馬県	伊勢崎興陽高等学校	総合学科	3	向谷地 博樹
3	埼玉県	いずみ高等学校	生物サイエンス科	2	二瓶 晴輝
4	東京都	園芸高等学校	園芸科	2	工藤 鞠花
5	神奈川県	三浦初声高等学校	都市農業科	3	佐藤 薫平
6	新潟県	新発田農業高等学校	生物資源科	3	飯田 智大
7	長野県	南安曇農業高等学校	グリーンサイエンス科	3	芝 穂花
8	愛知県	半田農業高等学校	農業科学科	3	廣本 椎那
9	滋賀県	八日市南高等学校	農業科	2	中島 正尋
10	鳥取県	鳥取湖陵高等学校	緑地デザイン科	2	戎崎 温心
11	岡山県	高梁城南高等学校	環境科学科	3	綱島 光耀
12	佐賀県	唐津南高等学校	生産技術科	2	青木 颯飛

### 【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
13	愛媛県	大洲農業高等学校	食品デザイン科	3	神山 玲音
14	愛媛県	大洲農業高等学校	生産科学科	3	清水 悠生
15	愛媛県	大洲農業高等学校	生産科学科	3	中野 康誠

### 【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
16	福島県	修明高等学校	食品科学科	3	菊池 流星
17	福島県	修明高等学校	食品科学科	2	高松 凜
18	福島県	修明高等学校	食品科学科	2	橋本 林奈

# 「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味を持ってもらうにはどのような活動をしていくべきか」

四国ブロック 愛媛県立大洲農業高等学校  
食品デザイン科 3年 神山 玲音  
生産科学科 3年 清水 悠生  
生産科学科 3年 中野 康誠

## 1 はじめに

四国ブロックは、愛媛県、香川県、徳島県、高知県の4県で構成されており、農業クラブの目標を達成するための各種活動を行っています。大洲農業高校がある愛媛県は、大小多くの島々が点在し、東洋の地中海と呼ばれている瀬戸内海や、リアス式海岸が続く宇和海、そして西日本最高峰の石鎚山とそれに連なる山々など、豊かな自然に恵まれた県です。柑橘の生産は特に有名ですが、キウイフルーツの生産も非常に多く、昼夜の寒暖差を利用したブドウ栽培、ビワやモモ、ウメ、ナシ、カキなど様々な果物も栽培され、どれも高品質なものばかりです。おいしいお米もとれる地域もあり、それぞれの地域で特色ある農業が展開されています。

大洲農業高校がある愛媛県大洲市は、周囲を多くの山々で覆われており、その間を流れる清流「肱川」が育んだ肥沃な土地で、野菜栽培を始めとした、果樹の栽培が盛んな地域です。大洲農業高校では、栽培管理を始めとした食品加工についても学ぶことができ、地域に根差した学習に日々励んでいる学校です。



## 2 大洲農業高校の取り組み

大洲農業高校は、大きく2つの学科で成り立っており、農産物の生産について学ぶ「生産科学科」と食品の加工や衣服について学ぶ「食品デザイン科」があります。それぞれの学びを通して、地域の課題解決や連携を深め地域に貢献できるよう日々、様々な活動に励んでいます。



## (1) スマート農業を学ぶ研修

本校では、令和2年度からGPS機能が搭載された田植え機を導入しており、これまでまっすぐ植えることが難しかった田植え作業も、簡単かつまっすぐに苗を植えることができるようになりました。この田植え機の導入をきっかけに、よりスマート農業への興味が湧いた私たちは、大洲市でお米農家を営む沖野さんの圃場を視察に伺いました。

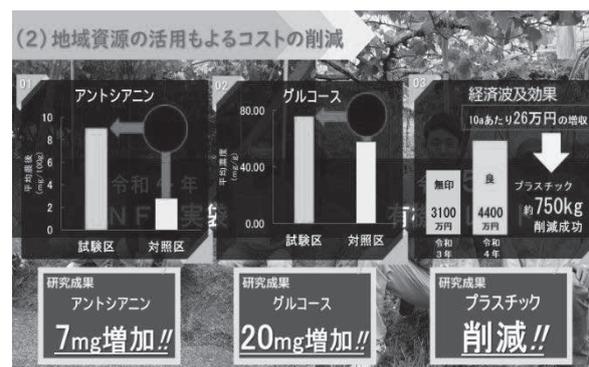
沖野さんは、大洲農業高校出身で私たちの大先輩にあたる方です。沖野さんの圃場内では、GPS機能の搭載されたトラクターや田植え機を始めとした、ドローンや色彩選別機の利用はもちろん、アプリを利用した各圃場の栽培管理を行っています。視察に伺った際には、トラクターやドローンの簡単な操縦などを体験させてもらうことができました。沖野さんは「普段から、いかに楽をして利益を出すかを考えている。そして、農業のマイナスなイメージをプラスに変えるために情報発信にも力を入れている」と教えてくださいました。

視察に参加した生徒は「普段触れることができない、農業機械に触れることができとても楽しかった。実際、トラクターの中は冷暖房が搭載されておりとても快適だった。」「農業は暑くてしんどいイメージがずっとあったが、沖野さんの農園を視察して、誰でも快適にストレスも少なく作業ができると聞き、実際に体験することで、農業の進化を改めて実感することができた。」という意見が多々ありました。しかし、中には「学校にある田植え機だけではスマート農業とはいえないと思いました」という意見もあり、学校だけでは気づくことができないことにも気づくことができた、貴重な体験でした。

この視察で学んだことを、もっと多くの人にも知ってもらいたいと思い、毎年7月に開校する中学3年生の体験入学時に農業機械の試乗体験を実施しました。多くの中学生が体験に参加し、楽しそうに試乗する姿を見て、もっと農業の魅力を知ってもらいたいと思いました。

## (2) 地域資源の活用によるコストの削減

大洲農業高校果樹班では、地域資源である「バショウ」を用いた果実袋の開発や肥料の開発に取り組んでいます。バショウとは、バナナに似た大型の多年草の植物です。私たちの住む大洲市では、お盆の棚飾りとして多く利用されています。しかし、近年では利用されることも減り、地域の景観に悪影響を与えていました。そこで、大洲市の隣町である内子町特産の大洲和紙の技術を使い、バショウ和紙の開発を始めたことをきっかけに、今ではバショウ和紙を使った果実袋の開発をはじめ、バショウを使った肥料の開発にも取り組んでいます。果実袋は、バショウ和紙を青く着色することでブドウの着色不良の改善



やプラスチック量の削減に繋がるとして、テレビから取材を受け、その動画はYouTubeでも配信されており、今では1万回再生を突破するものになりました。

地域資源を見直すことや地域で活用されていた動植物の利用を再発見することで若い世代や、研究機関との協力が深まったと感じています。このような地域の伝統行事や今は利用が減ってしまった地域資源の掘り起こし、新たな資材開発や、農業の魅力の拡大に繋がるのではないかと感じるようになりました。

### 3 県内高校の取り組み

次に、同じく愛媛県の農業高校である伊予農業高校と野村高校の事例を紹介します。

#### (1) 愛媛県立伊予農業高等学校の取り組み

伊予農業高校では、米の選別機を始めとした、農薬散布ドローンやラジコン草刈り機、木材レーザー加工機などの設備が導入されています。これらの機器を用いて、生徒に魅力をPRしながら、生産性・品質の向上・省力化といった新たな農業技術を示す授業が実践されています。

中でも、ドローンは様々な授業で活用されています。果樹園（柑橘、栗）の農薬散布はもちろん、水田での種もみ散布やレンゲの播種作業にもドローンが活用できないか、研究中です。実際に生徒がドローンを体験し、日々技術の向上に向けて練習に取り組んでいます。また、測量にも活用し、水稻の生育状況の予測や調査にも活用する方法を模索するなど、現在研究活動が進んでいるそうです。

実際に、授業でドローンについて学んだ生徒からは、「ドローンについて詳しく知ることができ、思った以上にドローンは賢く驚いた。この経験を今後の実習や進路に生かしていきたい」「ドローン講習会を通して、農家や企業の方とも交流ができとても勉強になった」などの声が多数ありました。実際、この授業を通して農業に関わるような企業や学校に就職・進学する生徒が増加したそうです。授業を受けながら、知識を深めるだけでなく、自身の進路に繋がっていることが分かりました。



#### (2) 愛媛県立野村高等学校

野村高校では、牛飼育管理装置 フィードステーションが導入されています。これは、牛群管理を数値化し、データをもとに的確に判断することで事故の軽減や経営のロスを縮減することに繋げる一連の施設や装置です。的確で集約した作業を実現することができ、省力化や労働力の削減にも繋がります。また、先進的な酪農経営の現場では、経験の浅い社員等にも個体管理をさせることが可能にもなります。このシステムの導入によっ



て、乳量や濃厚飼料の制限、体重、発情期の有無まで誰でも簡単に把握することができるようになったそうです。

野村町は愛媛県を代表する畜産地域です。これまでは、多くの乳牛農家が点在していましたが、後継者の不足や飼育管理の課題から、乳牛飼育をやめ肉牛生産に取り組む農家が増加傾向にあるようです(繁殖和牛飼育は乳牛飼育の技術が応用でき、体力的にも負担が少ない)。野村高校では、地域の先進的な役割を果たす重要な機関として、人為的問題の解決や先進的機器の導入によって、高度な教育機会の役割を果たせるよう、日々研究活動が展開されています。

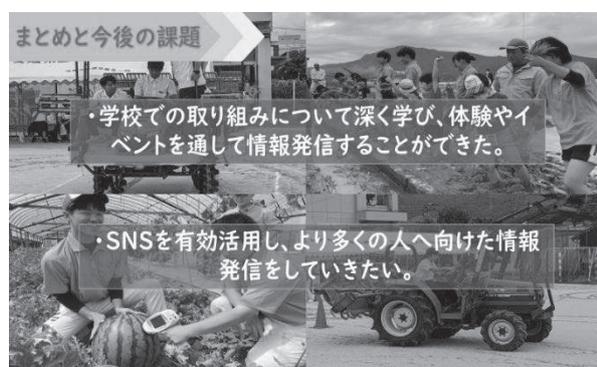
#### 4 まとめと今後の課題

今回、大洲農業高校をはじめ、伊予農業高校・野村高校で実践されているスマート農業や農業経済に関わる取り組みについて紹介しました。他にも、愛媛県内の多くの農業高校で様々な活動が実践されています。これらの取り組みを通して、農業高校生の農業に対するイメージの改善や将来の進路に繋がる取り組みができていたことが分かりました。また、それぞれ学んだ内容は地域との交流会や講習会を通して情報発信や体験活動を実施しています。

体験を通して、「農業高校に入学したい」「将来、農業に関わるような仕事に就きたい」と考える人たちをもっと増やしていけるよう日々の研究活動に力を入れていきたいと思います。

また、近年情報化が進む中、体験イベントだけでなくホームページの活用や SNS を活用した情報発信も視野に入れていかなければならないと思います。特に若い世代が一番情報を仕入れている先はインターネットです。多くの人目を引くようなタイトルや、楽しそうな作業の様子を発信することも今後は必要になってきます。それができれば、今以上に多くの人に農業高校の取り組みについて知ってもらえると思います。

これらの取り組みをまとめたり、調査したりする中で課題と感じたのは「導入コスト」の問題です。便利になることや効率的になることはよく理解できました。しかし、農家への普及は導入コストを上回る利益や労働時間の削減、品質の向上が確実に望めることが条件になると感じます。これまで農家は、自分たちの経験に基づき、人件費を無視（頑張って働くことで売上金額を向上させる）するような体質があったのではないかと思います。設備の充実により作業時間の短縮や生活のゆとりが生まれている先進農家の事例を紹介し、課題解決を図る必要性を感じるようになりました。そして、他の産業と同様、高品質で従事者が誇りをもって、儲かる仕事として認識されるような活動を展開したいと思います。



# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 茨城県立水戸農業高等学校  
食品化学科 3年 山崎 このか

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

自校で栽培をした農作物、またはその加工品の販売を定期的に行うことで、SNS以外で情報を発信することができると思います。また、学校、商品の宣伝にも繋がると考えられます。年齢層については、販売する場所、時間、販売する商品を工夫する必要があると思います。我が校では、様々な場所で販売会を行っており、そのおかげで我が校の商品を多くの人が認知してくれるきっかけを作っていると考えます。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

はじめに、農業SDGsのどの分野に密接に関わっているのかを知る必要があると思います。たくさんの課題がある中で農業の発達で解決することができる分野は「環境面」だけではなく、「食糧供給」「生物多様性」などにも関わりがあると思うので、それぞれの課題解決に向けて、知る、調べる行動が大切だと考えます。また、自分たちが学んでいることや行っている活動にはどんな意味があるのかを考えながら行動することも大切だと考えます。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

若い世代の人たちが、農業に触れる活動を活発にさせる必要があると思います。我が校では小学生や特別支援学校の方々と田植えを行うことで農業に触れる体験を行っています。そのような活動を今後、増やしていき、農業の大変さを知ること、スマート農業や農業経済に興味を持つきっかけづくりになると考えます。様々な技術を農業にどういかすことができるか考えることにも繋がると思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立伊勢崎興陽高等学校  
総合学科3年 向谷地 博樹

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

伊勢崎興陽高校では、年2回の農産物販売会を行っています。その際には、伊勢崎市の広報や町内会の回覧板などで日時を周知しています。毎回非常に人気で、校内や校庭が埋め尽くされてしまい、学校前の道路が渋滞してしまうほどです。創立100年を超えた学校のため地域住民の方々には本校の魅力が伝わっていると感じています。しかし、中学生やその保護者にまだ本校の魅力が伝わっていないように感じます。そのため、今年度より中学生や保護者対象にしたSNSアカウントをつくり、日々の学習内容を投稿しています。また、伊勢崎興陽高校では6次産業化プロジェクトとして、学校産の農産物や地域の農産物の規格外品を利用したピクルスの製品開発・生産を行っています。群馬県内のショッピングモールなどで定期的に販売活動をし、学校の魅力を伝えています。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域の課題について詳しく調べ、現在行っている学習やプロジェクト活動で学んだ知識を地域の方々にも知ってもらうことが大切だと思います。学校の活動を知って頂くことで、地域の困っていることや課題を明らかにし、解決する課題を決め、活動に移していくことが理想だと思います。

伊勢崎市には認知度アップを考えている伊勢崎完熟牛蒡「甘久郎」という地域ブランド野菜があります。本校の食と経済を考える系列が認知度アップのためのプロジェクト学習の一環で広告宣伝活動を行っています。また、地域の牛蒡農家の方々に規格外品を譲って頂き、6次産業化プロジェクトの牛蒡ピクルスとして生産・販売し、地域全体のフードロス削減に取り組む活動を行っています。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

総合実習や課題研究のなかでスマート農業に関する技術・製品や農業経済に関する知識・技法を使い、地域農業の問題点を見つけ、解消していく活動とすることが大切だと思います。地域の課題を解消するためのツールとして認識されることで利点や魅力が伝わり、中学生や高校生などの若い世代にも興味をもってもらうことができます。また、その成果を地元農家の方々に伝え、地域の取り組みとして活用してもらえよう実践的な活動として継続していくことが重要だと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立いずみ高等学校  
生物サイエンス科 2年 二瓶 晴輝

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

私達にとって、高齢者から小さい子供まで数多くの人と多様な年齢層との交流ができる手段は、文化祭だと思います。SNSのような文字だけの交流とは違い、実際に地域の人と話せるので、私達の活動の説明や物品の販売、体験会など体がなければできない情報を発信・提供できるので、文化祭に重きを置くことが大事だと思います。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

地域の課題を解決するには、まず、地域の課題を認知しなければ行っているプロジェクトが課題解決に活用できるかできないの判断ができないと思います。地域との密接な交流を行い、地域の方々から自然に課題を聞けるような環境を用意することが大事であると思われます。そのためには、行っているプロジェクト活動を地域の方々に発表する機会を、文化祭や学校説明会などで用意したり、プロジェクト活動により生産される生産物を、販売や提供し、地域の方々との交流を深め、私達の活動の認知をしてもらうことが重要だと思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

まず行うべきだと思うことは、農業などの一次産業でよくみる「3k」の認識を取り払うことだと思います。

近年では農作業の大部分が、機械化やAI技術の発展により短時間の作業で済むようになりました。確かに、初期投資にはまとまった金額が必要になりますが、それでも「3k」問題となっている「きつい」や「くさい」ということは解決できていると思います。

次に私が若い世代の方に知ってもらいたいのは、別に農業を始めるきっかけは、「植物が好き」や「野菜が食べたい」などだけでなく、「蝶が好き」や「ミツバチが好き」などでも良いということです。いずみ高校の農業クラブでは、花を育てており、かぼちゃなど花が咲く農作物にも挑戦しようと思っているのですが、こう思ったきっかけはミツバチでした。ミツバチのために充実した植物の環境を作ることが、結果として畑を作り農作業を行なうことにつながっています。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立園芸高等学校定時制

園芸科 2年 工藤 鞠花

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

東京都では、主体的に学習に取り組み、予測できない社会の変化や新しい課題に対応するために、課題の発見と解決に必要な知識や技能を身に付けることを目的に、独自の学校設定教科「人間と社会」を設定している。特徴の一つは、体験活動や演習を取り入れ、道德教育とキャリア教育の内容を一体的に学習することである。

本校では、この「人間と社会」を活用し、余剰実習生産品を地域の方々へ配布する活動を行っている。配布する実習生産品に関する栽培情報や、定時制の魅力を発信するチラシも併せて配布し、小さいお子さんから年配の方まで、地域の方々へSNSではなく直接情報発信を行っている。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

本校では「GAPする」を合言葉に、農業クラブの役員がプロジェクト活動として取り組んでいる。具体的な活動として、毎月1回学校農場の安全点検と実習用具の確認を行っている。安全点検では、危険箇所や整理整頓、清掃状況の確認。実習用具の確認では、ナンバーリングした用具が、指定の箇所に数どおり収納されているかチェックシートをもとに点検、確認を行っている。

また、この活動とは別にSDGsの取り組みとして、実習生産品の持ち帰りにエコバッグを持参することや、食品ロスを減らすために予約した給食は残さず食べる等、クラブ員に呼び掛けている。学期の終わりに取り組み状況のアンケートを実施、次の学期初めにアンケート結果を提示し学期の目標をクラブ員と共有している。自分たちのできるところからGAPやSDGsの活動につなげて行きたい。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

本校が実践しているスマート農業は、学校農場に設置された気象センサーの活用と圃場毎に、栽培する作物並びに種々の作業内容を記録し、その作物への農薬や肥料等の投入状況をクラウド上で管理できるアプリケーションソフトの導入の2点である。日々の実習記録として授業内で活用しているが、そのスマート農業の知識を用いて若い世代に興味を持ってもらうための活動は行っていない。

今回のクラブ員代表者会議で、各校の事例を本校に持ち帰りクラブ員と情報を共有する中で、スマート農業や農業経済の知識をどう若い世代に興味を持ってもらうための活動につなげて行けるか考える材料としたい。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立三浦初声高等学校  
都市農業科 3年 佐藤 薫平

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- (1) 校内新聞にまとめる
- (2) 校内掲示板を活用する
- (3) 校内および県内農業クラブ活動で行われる交流会で伝える
- (4) 校内農ク役員でチラシを作成し、地域に配布する

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- (1) 校内・県内でのプロジェクト発表後に発表内容の意見を話し合い、深く学ぶようにする
- (2) 一人一人の学習環境とフードロスについて話し合い、行動する

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- (1) 校内のSNSを活用して、情報発信を行う
- (2) 近隣や出身校である中学校へ直接行く機会をつくり、農業の魅力を伝える

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 新潟県立新発田高等学校  
生物資源科 3年 飯田 智大

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ① 農業実習の様子を、ホームページやチラシなどを使って発信する  
ホームページはインターネットを通じて全世代の方々が手軽に閲覧することが可能であるため、定期的に更新していくことが有効だと考える。また、地域・学校の回覧板などを活用することは高齢者向けへの情報発信源として有効だと考える。
- ② 簡易直売所の設置  
農作物の簡易販売所を校内に設置することで、地域の方たちとのコミュニケーションの場が広まり、直接的な情報発信が行えると考えられる。また、販売所の近くに看板など設置することで一般の方の目にとまりやすくなる。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ① 地域コミュニティ参加  
学校だけで課題発表を終わらせずに、地域の方々が集まる場所で発表することで、地域の農家の方々の意見を多く取り入れることができる。また、このようなコミュニティに参加することで地域の現状を知ることができ、地域に根ざした研究のきっかけづくりに繋げることができる。
- ② 地産地消に向けた地域の商品のPRや販売  
地元の食品メーカーなどと連携し、地域や学校で生産した農産物を活用して商品開発から販売まで行うことで、地域のPRと活性化へと繋げる。
- ③ 有機質肥料などを活用した循環型農業の実現  
SDGsの目標の一つである「陸の豊かさを守ろう」の実現のため、化学肥料や農薬を使用せず農作物を栽培し、農業生産における環境汚染を緩和する。  
また、循環型農業（廃棄される農産物や食品製造時に生まれる副産物を肥料に還元など）を実現することで様々な資源を活用した持続可能な農業生産の実現に繋げる。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ① 各専攻の体験  
小学生、保育園児向けに各専攻の体験活動を実施することで幼少期から農業に触れる機会が増え、農業に対して強い思いを抱く人材が増加すると考える。
- ② 学校でICTを活用して農業をし、就農後の実務に活かす  
学校での実習にICTを活用することで、「農業の3K」の一つである農業のキツさを若い世代から払拭するとともに、就農後のICTを活用した農業経営に繋げる。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県南安曇農業高等学校

グリーンサイエンス科 3年 芝穂花

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

本校では、昨年1年生の「農業と環境」の授業で育てたダイコンとハクサイ、約180kgを地元の企業2社から野菜提供の依頼を頂き、社食の食材として提供しました。野菜を提供した1年生は野菜を収穫したとき、農業高校の魅力の一つ豊かな実り、そしてそれをもたらした自然に触れ、生徒も「おーいい感じ、太いね」「結構重たい！嬉しい」と目をキラキラさせながら収穫をしました。また、社員食堂で提供されたとき社員の皆様から「シャキシャキしておいしい」と温かい言葉をもらい、さらにその様なことを数多くのメディアに取り上げてもらい、SNS以外で情報を発信しました。私たち自身も情報発信は必要ですが、地域に目を向けて真剣に取り組めばメディアなどで情報発信し農業高校の魅力を発信できると考えました。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

私たちは、地域の農家や会社または地域の方々と連携そして協同しながらみんなが元気になる活動をこれからも行っていきたいと考えています。そしてこれからの南農の向こう側のために日々の活動や文化祭などを通じて、より多くの人に私たちの活動が広く知れ渡るようにします。そのために、今年の文化祭では新たな試みとして、長野県全体の問題である放置竹林の問題について知ってもらうために、県内企業で放置竹林の竹と廃棄プラスチックを材料にして制作したうちわを配布したいと考えています。私たちはこれをきっかけにより資源の再利用やSDGsといった循環型社会、持続可能な活動に取り組んでいこうと考えました。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

私の家は専業農家で実際にスマート農業を活用して農業をしています。そんな私が同じ世代に興味を持ってもらうための行動として、「アグリノート」というアプリを使って日々の農作業記録まとめています。紙の作業日誌は一切使っていないため常に情報が見られるようになります。また、最新のGPS搭載大型農機を導入し効率的に作業を行っています。このように、日々スマート農業を活用しながら農業をしていると、たまに小さい子が田んぼに機械を見に来て「かっこいい」と言ってくれます。現在の農業機械はデザインも追求されており、とてもかっこいいです。そんなかっこいい農業を若い世代にもっと知ってもらう必要があります。そのために、実際にスマート農業に触れてもらう機会を作ることが大切だと考えています。昨年度から本校では文化祭で農業機会展示を行っており、実際に機械に乗り込んでもらう体験ができるようにしています。今後もこのような農業が身近なものになるような企画を考えていきたいと思っています。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立半田農業高等学校  
農業科学科 3年 廣本 椎那

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

農業高校での学習内容は、普通科にはない魅力にあふれています。

そして学習活動で培った知識や技能を活用して、産業や地域および環境に関する課題解決に取り組むことが、まず必要なアクションです。活動を進めていくと、様々な結びつきが発信に繋がっていきます。成果が上がれば、各種発表やメディアへの情報提供が生じてきます。さらに、繋がった先の方からも別の方面に発信されます。

積極的に発信方法を検討しなくても、頑張ることが大事だと考えます。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

個々の思いが出発点だとしても、個々だけでは地域の課題解決やSDGsの取り組みへの発展にはなりません。共感を得てこそその地域の課題解決やSDGs活動だからです。

最初から答えはありません。なので私たちは学校の環境・生き物を調査することを始めました。

「名前を知る」ということはその対象を認識すること。そして、その「名前」を言語として活用することでその対象が存在する世界を共有できる。と、先生からお話がありました。

半田農業では、この取り組みを広げていこうと考えています。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

近年、気候変動の影響からか野菜の価格高騰がニュースになることが多いです。また、治安やモラルの問題なのか農産物泥棒も頻発しています。そして、国際情勢によって穀物価格・原油価格・資源価格などさまざまなものが値上がりしています。

農業は生き物を目の前にし、自然環境に左右されアナログで牧歌的な側面を持ちつつ、精緻でデジタルな統計に基づいたグローバルな経済活動にも繋がっています。若い世代が関心を持つ多くの社会課題や科学技術の先端に農業は近接しています。

答えなき課題に高校で学び実践することは難しいですが、農業クラブ活動の端々に少しずつより良い世界になるようなメッセージを込めることはできると思います。例えば、農産物販売では「農業高校の野菜は安くておいしい」だけではない「食べ物への感謝」とか「農業問題への誘い」などを感じてもらおう仕掛けを施すといった、普通のお店とは様相の違う「消費者も一緒に学習する」販売所を作ったらどうかと思います。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立八日市南高等学校  
農業科 2年 中島 正尋

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

販売をする商品の野菜やお肉などの食べ物の袋に作った人を記載することや、売る店側が商品の良いところや、学校がどのような場所なのかなどを広告や身近な所に農業の課題などを少しずつ生活に入れていくことができると、高齢の方から子どもまで興味をもってもらえ、そこから発展させてお米の作り方から、サツマイモの作り方などを体験してもらえれば良いと思う。本校は小学生と一緒にサツマイモの定植や収穫を行う交流があります。他の野菜で交流する時に播種する時から収穫まで育ててもらうことが大切だと思う。そうではないと一部の良い所だけとった魅力になると思うし、本来の魅力が欠けてしまうと思う。だから、学校とかの教育機関などの全員が関わり合えるような物を発信するべきだと思うがなかなか難しい。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

SDGsにつながる動きをするためには、SNSを利用して自分から発信していくよりも、私が畜産班なので、ウシのフンなどを再利用、ゴミをポイ捨てしないなどたくさんあります。世界としての課題がたくさんあるのでもっと大きな規模で国が決めて行動するくらいのレベルでやっついていかないといけないと思う。また、自分たちの地域がどんな課題に直面しているのか住んでいる一部の人にしかわからないと思うが、自分が今の環境で最低限出来ることは何かを考えて、電気などのエネルギーを節約、作ったら使い切るまで使用するといった無駄のない生活を送っていくことがSDGsにつながると思います。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

本校のスマート農業の取組としては牛舎の牛温恵の導入で携帯から分娩の予測ができ、ハウスの温度や湿度を携帯から調節することができる。また、果樹園では自動草刈り機を導入したことで作業効率が上がった。

若者たちに農業に目を向けてもらうには、「野菜が・・・」とか「ハウスが・・・」、「土が・・・」というよりもお金を稼ぐことができるのが重要な点だと思います。なので、スマート農業の会社をどんどん立ち上げていくことで、安くて質の良い野菜や、お肉などの食料が増えて、自給率も上がる大きい会社になったら、若い人から支持が増え、新しく1歩農業が進んでいくのではないかと思う。また、今の若い人たちは、スマートフォンからの情報が多くっており、偏ったものばかり見たりすると思うので、なかなか多くの人たちに知ってもらうことは難しいのかなと思いました。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 鳥取県立鳥取湖陵高等学校  
緑地デザイン科 2年 戎崎温心

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまう SNS の他に、より多くの人に SNS 以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- 現状**
- ① 湖陵フェスタでF・G科の取り組みをパネルで紹介。鳥取県学校農業クラブ連盟リーダー研修会にて各校合同で作成した農業クラブ新聞も展示した。
  - ② F科生徒が先生になり、幼稚園や保育園の園児を本校に招き、パン作り教室を開催している。
  - ③ 中学校体験入学にて、体験と各科の取り組み紹介をしている。
  - ④ 湖山西公民館と連携し、みそづくりを行っている。
  - ⑤ G科は生徒が先生になり小学校で寄せ植え交流を行っている。

**問題点** 情報発信できるのは、参加者限定であること。

- 対策**
- ① テレビや新聞に情報提供し、取材に来ていただく。
  - ② 学校を開放する日をつくり、普段参加できない住民の方に授業等に参加していただく機会を増やす。
  - ③ ポスターを作成し、貼らせてもらう。
  - ④ 自分たちが農業クラブ活動を通じて学んだことを、話して広める。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- 現状**
- ① 総合実習では規格外のトマトをトマトソース、規格外ナスと大根を福神漬け、オアシスは再利用したビール瓶に充填して製造している。
  - ② 「環境に優しい農薬の研究」「もみ殻を使用した花苗の研究」等、SDGsにつながるプロジェクト研究を行っている。
  - ③ 農場の肥料は残渣をエコファームに持って行き肥料にし、その肥料を使用して農場経営をしている。

**問題点** 課題を解決する視点でプロジェクト研究のテーマが決められていないものが多い。

- 対策**
- ① 地域の課題に目を向け、研究をしていく。
  - ② 今後もSDGsにつながるような実習やプロジェクト研究を行っていく。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

**現状** 湖陵高校ではスマート農業に対する取り組みやプロジェクト研究等が進んでいない。

**問題点** PRする活動をしていない。

- 対策**
- ① 農業は汚くて重労働でお金が儲からないというイメージを、スマート農業や農業経済などの知識を用いて労働の軽減化がはかれ儲かることを、湖陵フェスタでパネル展示をし、中学校体験入学で体験してもらいPRする。
  - ② ポスターを作成し、貼らせてもらう。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立高梁城南高等学校  
環境科学科 3年 綱島 光燿

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

総務省データによると30代以降の人ほどSNSを使っておらず、また必要としていない人が多い。その反面、若い世代よりも新聞やラジオ、テレビを利用している割合が多い。

対策：地元のメディアを活用する。学校見学会やオープンスクールの開催。広報活動の強化。学校の活動をまとめた広報誌を定期的に発行し、地域の公共施設や図書館に配布することで、多くの人に情報を届ける。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

現在、本校で取り組んでいるプロジェクト活動はジョナカフェ（商品を開発し、月に2回程、商業施設でカフェを運営）・2年生の総合的な探求の時間では、3学科合同で高梁市の課題解決に取り組んでいる。学校が位置する高梁市は魅力や観光地は多いが、市外に魅力が伝わりきれていないという課題があるため、地域の方たちの思いや課題を調査し、それに基づいてプロジェクト活動を行っていく必要がある。



本校のブルーベリースムージー

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

少子高齢化が世界一進んでいると言われる日本では、農業だけでなく様々な業界で人手不足が叫ばれている。農業就業人口も年々減少傾向である。

スマート化に関する課題としては価格が高額なものが多く、初期費用がかかる、就農者のICTリテラシーが不足している、高齢化による人手不足等があげられる。

対策として、考えた意見は以下のとおり。

- ・私たち農業高校生が、スマホなどで「農業」の魅力を発信する。
- ・外国から日本に来る人が増えているので外国人にも広めていく。
- ・就労環境の整備や、外国人技能実習生の採用、ITの導入による農業の効率化。
- ・農地バンクや補助金制度を利用する。
- ・温室効果ガスの排出を原因とする地球温暖化現象が招く世界各地での気候変動の対策を行う。
- ・体験型活動を行い、参加しやすく、若者の農業に対する興味を喚起する。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立唐津南高等学校  
生産技術科 2年 青木 颯飛

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

唐津南高校では、各科で作った生産物を販売し好評である。校門の近くに生産物販売の日時を掲示している。開催情報を校門の近くにしか掲示していないので、家にいる高齢の方や学校の近くを通らない人には伝わらない。販売会の魅力をより多くの人に知ってもらうために、新聞などに載せてもらい高齢の方にも伝わりやすくするとか、ポスターを作成し校外に貼り出す等の方法で、さらに農業高校の魅力を発信していきたい。

## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

本校の虹ノ松原研究班では20年ほど松葉掻き活動を行っているが、松葉を取り切れず風通しが悪い場所や水が常にあるような場所ができ、それによって根腐れを起こして土壌菌が繁殖し、松が枯れてしまっている。

問題点として、虹ノ松原は国有林であり清掃活動を行うたびに松葉を購入しなければならず、清掃活動で回収した松葉で様々な商品開発を行いそれを販売しているが赤字になっている。また、高校の3年間しかこの活動ができず、後の世代に商品や知識を伝えるのが難しい。

解決策として、クラウドファンディングを広報活動と資金調達も兼ねて行うことが考えられる。また、地域の住民や子供達を巻き込み、地域の宝である松原を守っていくという流れを作っていくことも重要である。

様々な問題があるが、まず私たちが松原に関心を持ち、それに対する解決方法を常に考えることが大切である。そしてこれまでに挙げた解決方法を確実に実行し問題点を減らしていく。そのことで将来的に松原を白砂青松にしていき、きれいな状態で後世につなげていきたい。

## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

農業の抱える問題として、農業人口の減少、高齢化が挙げられる。

新規就農者の不安材料として、成功しないと安定した収入を得られない、初期費用が高額、都市型生活を送る人が増えた、過疎化等が進行している。

農業に興味を持ってもらうために、スマート農業の事例を文化祭で展示したり、国からの資金援助、通勤型農業、植物工場の紹介、営農疑似体験といった方法で関心を持ってもらう活動に取り組んでいきたい。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 愛媛県立大洲農業高等学校  
食品デザイン科 3年 神山 玲音  
生産科学科 3年 清水 悠生  
生産科学科 3年 中野 康誠

## 1 第1分科会

**「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」**

誰が見てもでも分かりやすいように、学校の取組を新聞やテレビで報道してもらったり、高齢者でもわかりやすいように、大きなイラストを乗せたポスターを作成し、学校周辺の商業施設に依頼し掲示をしてもらうといいと思う。

また、積極的に地域のイベントに参加することで学校の取り組みや特徴を知ってもらえると思う。地域イベントには、幅広い年齢層の人が参加することが予想される。販売する商品に、その商品を作成した学科の特徴や取組をまとめた簡単なパンフレットを一緒に同封することでSNSを利用しない人にも学校の取り組みや魅力を発信することができるのではないかと考える。

さらに、地域の方へ向けた講習会を実施することで、普段の学習の成果や取組を地域の人にも肌で感じてもらうことができるのではないかと考える。そのような取り組みを通して、農業高校の魅力を感じてもらうといいと思う。

## 2 第2分科会

**「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」**

まずは、地域の住民や地元農家さんと連絡を取り、地域の課題を見つける。地域の人と交流を通して、地域の課題とその解決へ向けた具体的な目標を立てることが必要だと思う。

また、課題の題材を地域資源の活用にすることで、地域の伝統文化の保全や新たな商品開発を通して持続可能な取り組みに繋げることが大切であると思う。

そして、学校だけではできないこともあると思うので、地域の方々に協力を依頼しながら持続可能な解決策について研究をすればいいと思う。

## 3 第3分科会

**「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」**

若い世代は、デジタルネイティブで SNS・動画配信サービスなどを通じて情報を得ることが多い。スマート農業や農業経済に関したことをまとめた動画や記事を作成し発信することで、興味を持ってもらうきっかけを増やすことがいいと思う。また、農業を題材としたゲームやクイズを作成し、地域との交流の場やイベント時にクイズ大会を実施することで楽しみながら農業について知ってもらえるのではないかと考える。

さらに、農業分野で成功を収めている若手企業の方と交流をすることで栽培の基礎知識と最新の技術を組み合わせれば、農業は取り組みやすい分野になってきていることを知る機会を設けるといいと思う。未だに、農業のマイナスイメージは払拭することは出来ていないと思う。しかし、少しずつ農業も進化しているのだということを発信することができるのは、私たち農業高校生の役目だと思う。

# クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック連盟 福島県立修明高等学校

食品科学科 3年 菊池 流星

食品科学科 2年 高松 凜

食品科学科 2年 橋本 林奈

## 1 第1分科会

「農業高校の魅力を発信する手段として年齢層が限られてしまうSNSの他に、より多くの人にSNS以外で情報発信するにはどのような手段をとるべきか。」

- ・農業高校ポスターを制作、企業や小中学校へ配布。→QRコード付きで学校HPに誘導できる。
- ・各イベントでの販売活動。→クラブ員の元気な姿を通して、対面で直接情報を発信する。
- ・オリジナル新聞発行。→地域の広報誌と一緒に配付や、小中学校・公共施設に掲示用を送る。

【本校の事例：オリジナル新聞『農業日和』】

2016年9月からスタート、月1回程度発刊し現在53号。各競技会結果や販売会の様子、普段の実習風景を掲載。(A3判、両面刷、写真を多くしインパクトを重視)



## 2 第2分科会

「現在行っている学習やプロジェクト活動等が、地域の課題解決やSDGsにつながるためには、どのような行動をしていくべきか。」

- ・単発で終わらず継続した活動にする。→「あの農業高校と言ったらコレ!」と覚えてもらう。  
単位クラブ毎にオリジナル商品開発や企業との連携など、さまざまな活動をしている。その活動を次世代との交流などとともに、毎年工夫しながら活動を継続する。

【本校の事例：ラッカセイ栽培を通してのつながり】

2022年4月からスタート。地域幼稚園児を招き5月に定植、10月に収穫。企業に加工してもらい、12月に豆まきイベントを幼稚園で開催している。今年度以降も継続していく。



## 3 第3分科会

「スマート農業や農業経済などの知識を用いて、若い世代に興味をもってもらうためにはどのような活動をしていくべきか。」

- ・先進農家の見学会やスマート農業の体験会を地域の企業と実施。→自分が体験し発信する。  
方法は①適宜発信できるSNSと、オリジナル新聞。②小中学校に伺っての活動報告会。



	高等学校	年	科
氏名			